

県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

山 南 遺 跡

2003.3

香 川 県 教 育 委 員 会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター

序 文

普通寺市は、国指定史跡有岡古墳群や古刹普通寺等が所在する、古代讃岐の中心的な地域として知られています。

平成10年度に同市生野町で計画された公営住宅の建設事業に伴い、香川県教育委員会から委託を受け、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしましたところ、弥生時代から近世に至る居住区などが検出され、この地域の歴史に新たな1ページを加えることができました。

このたび、平成14年4月から実施しております山南遺跡の整理事業が終了し、「県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告「山南遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、県土木部住宅課をはじめとする関係機関及び地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月28日

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所長 小原 克己

例　　言

1. 本報告書は、県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県普通寺市生野町に所在する山南遺跡（やまみなみいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、予備調査を平成9年6月・11月、本調査を平成10年6月1日から同年12月28日まで実施した。
調査組織は、本文中に記したとおりである。
4. 調査・整理に当たっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
地元自治会、地元水利組合、香川県歴史博物館
5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
編集・執筆は、同センター主任文化財専門員真鍋昌宏が担当した。なお、近世遺物の記述については同センター主任技師松本和彦の協力を得た。
6. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高はT. P. を基準としている。
また遺構は、下記の略号により表示している。

S A 樹列跡	S B 掘立柱建物跡	S D 溝状遺構
S E 井戸跡	S H 墓穴住居跡	S K 土坑
S P 柱穴跡	S X 不明遺構	
7. 採図の一部に、国土地理院地形図「丸亀」「普通寺」(1/25,000)を使用した。

本文目次

第1章 調査の経緯.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査の経過.....	1
1 調査体制.....	1
2 本調査の経過.....	2
3 整理作業の経過.....	3
第2章 立地と環境.....	4
第3章 調査の成果.....	6
第1節 土層序について.....	6
第2節 主要遺構の検出状態.....	6
第3節 遺構と遺物.....	6
1 掘立柱建物跡.....	6
2 構列跡.....	42
3 柱穴跡.....	43
4 溝状遺構.....	47
5 土坑.....	78
6 井戸.....	97
7 不明遺構	100
8 包含層	102
第4節 自然科学分析	112
第4章 まとめ	115

挿 図 目 次

第1図 調査区割図	2
第2図 遺跡位置図	4
第3図 周辺遺跡位置図	5
第4図 調査壁土層断面図①	7、8
第5図 調査壁土層断面図②	9、10
第6図 調査壁土層断面図③	11、12
第7図 調査壁土層断面図④	13、14
第8図 調査壁土層断面図⑤	15、16
第9図 SB01・SA01平・断面図、出土遺物実測図	18
第10図 SB02平・断面図	19
第11図 SB02出土遺物実測図	20
第12図 SB03平・断面図、出土遺物実測図	21
第13図 SB04平・断面図、出土遺物実測図	22
第14図 SB05平・断面図、出土遺物実測図	23
第15図 SB06平・断面図、出土遺物実測図	24
第16図 SB07平・断面図	25、26
第17図 SB07出土遺物実測図	27
第18図 SB08平・断面図	29、30
第19図 SB08出土遺物実測図	28
第20図 SB09平・断面図、出土遺物実測図	31、32
第21図 SB10平・断面図	33
第22図 SB11平・断面図、出土遺物実測図	34
第23図 SB12平・断面図、出土遺物実測図	37
第24図 SB13・SA04平・断面図、出土遺物実測図	35、36
第25図 SB14平・断面図、出土遺物実測図	38
第26図 SB15平・断面図、出土遺物実測図	39、40
第27図 握立柱建物出土遺物実測図	41
第28図 SA02平・断面図、出土遺物実測図	42
第29図 SA03平・断面図	43
第30図 SA05平・断面図	43
第31図 柱穴出土遺物実測図①	44
第32図 柱穴出土遺物実測図②	45
第33図 SD02～04断面図、出土遺物実測図①	48
第34図 SD02～04出土遺物実測図②	49
第35図 SD06・07・09・11～13・15～20平面図	50
第36図 SD06・07・09・11～13・15～20断面図、出土遺物実測図	51
第37図 SD22～24平面図、SD22・23断面図、出土遺物実測図	53
第38図 SD24断面図、出土遺物実測図①	54
第39図 SD24出土遺物実測図②	55
第40図 SD24出土遺物実測図③	56
第41図 SD25・26平・断面図、出土遺物実測図	57
第42図 SD28・29平・断面図、出土遺物実測図	58
第43図 SD30～32平面図	59
第44図 SD31断面図、出土遺物実測図①	60
第45図 SD31出土遺物実測図②	61
第46図 SD30・32断面図、出土遺物実測図	62
第47図 SD33平・断面図	62
第48図 SD36・37平・断面図、SD37出土遺物実測図①	63
第49図 SD37出土遺物実測図②	64
第50図 SD40～43平・断面図	65
第51図 SD41・43平・断面図、SD41出土遺物実測図	66
第52図 SD44～49平面図	67
第53図 SD44・46・47・49断面図	68
第54図 SD45断面図、出土遺物実測図①	69
第55図 SD45出土遺物実測図②	70
第56図 SD45出土遺物実測図③	71
第57図 SD45出土遺物実測図④	72
第58図 SD45出土遺物実測図⑤	73
第59図 SD48断面図	74
第60図 SD48出土遺物実測図①	75
第61図 SD48出土遺物実測図②	76

第62図	SD50平・断面図	77
第63図	SD53出土遺物実測図	77
第64図	SK01平・断面図	78
第65図	SK01出土遺物実測図	79
第66図	SK02平・断面図、出土遺物実測図①	81
第67図	SK02出土遺物実測図②	82
第68図	SK03～06平・断面図、出土遺物実測図	83
第69図	SK07～09平・断面図	84
第70図	SK10平・断面図	85
第71図	SK11平・断面図、出土遺物実測図	86
第72図	SK12平・断面図、出土遺物実測図	87
第73図	SK13～16平・断面図	88
第74図	SK17～19平・断面図、出土遺物実測図	89
第75図	SK20平・断面図、出土遺物実測図	90
第76図	SK21・22平・断面図、SK22出土遺物実測図	91
第77図	SK23～25平・断面図、SK25出土遺物実測図	92
第78図	SK26～28平・断面図	93
第79図	SK29平・断面図、出土遺物実測図	94
第80図	SK30断面図、出土遺物実測図	95
第81図	SK31平・断面図	96
第82図	SE01平面図、出土遺物実測図	97
第83図	SE02・03平・断面図、SE03出土遺物実測図	98
第84図	SE04平・断面図、出土遺物実測図	99
第85図	SX01平・断面図、出土遺物実測図	101
第86図	包含層出土遺物実測図①	102
第87図	包含層出土遺物実測図②	105
第88図	包含層出土遺物実測図③	106
第89図	包含層出土遺物実測図④	107
第90図	包含層出土遺物実測図⑤	108
第91図	包含層出土遺物実測図⑥	109
第92図	包含層出土遺物実測図⑦	110
第93図	包含層出土遺物実測図⑧	111
第94図	調査区全体図	117
第95図	遺構変遷図①	118
第96図	遺構変遷図②	119
第97図	遺構変遷図③	120
第98図	遺構変遷図④	121

写真図版目次

図版 1 (1)	SB01全景(北から)	(3)	SB08全景(西から)
(2)	SB02全景(南東から)	図版 5 (1)	SB09全景(南から)
図版 2 (1)	SB02(SP153)柱痕検出状態(西から)	(2)	SB09全景(西から)
(2)	SB03(SP137)遺物出土状態(北から)	図版 6 (1)	SB09(SP367)根石検出状態(西から)
(3)	SB04(SP97)遺物出土状態(西から)	(2)	SB09(SP369)根石検出状態(東から)
(4)	SB05・06全景(東から)	(3)	SB09(SP372)根石検出状態(西から)
図版 3 (1)	SB07全景(東から)	(4)	SB09(SP395)根石検出状態(北から)
(2)	SB07(SP271)完掘状態(南西から)	(5)	SB09(SP396)根石検出状態(北から)
(3)	SB07(SP277)遺物出土状態(西から)	(6)	SB09(SP410)根石検出状態(南から)
(4)	SB07(SP279)完掘状態(西から)	(7)	SB09(SP411)根石検出状態(南から)
(5)	SB07(SP287)根石検出状態(西から)	(8)	SB09(SP412)根石検出状態(南から)
図版 4 (1)	SB07(SP291)根石検出状態(南から)	図版 7 (1)	SB09(SP420)根石検出状態(南から)
(2)	SB07(SP300)完掘状態(北西から)	(2)	SB09(SP421)根石検出状態(南から)

- 図版7(3) SB09(SP423)根石検出状態(北から)
 　(4) SB09(SP424)根石検出状態(北から)
 　(5) SB09(SP426)根石検出状態(南から)
 　(6) SB09(SP427)根石検出状態(南から)
 　(7) SB09(SP431)柱痕検出状態(南から)
 　(8) SB09(SP434)根石検出状態(西から)
- 図版8(1) SB09(SP454)完掘状態(西から)
 　(2) SB10全景(南から)
- 図版9(1) SB11・SE04全景(南東から)
 　(2) SB11・SE03・04全景(南から)
- 図版10(1) SB12全景(北から)
 　(2) SB12・13全景(南から)
- 図版11(1) SB12・13全景(北から)
 　(2) SB13全景(南から)
- 図版12(1) SB15全景(南から)
 　(2) SA02全景(南から)
- 図版13(1) SA03全景(東から)
 　(2) SD15全景(東から)
- 図版14(1) SD15全景(西から)
 　(2) SD24全景(北から)
- 図版15(1) SD24全景(北から)
 　(2) SD25・26・27全景(北から)
- 図版16(1) SD28全景(北から)
 　(2) SD30全景(北から)
- 図版17(1) SD31全景(北から)
 　(2) SD31全景(南から)
- 図版18(1) SD33遺物出土状態(南西から)
 　(2) SD33遺物出土状態(南西から)
- 図版19(1) SD41・43全景(北から)
 　(2) SD44全景(南から)
- 図版20(1) SD45全景(北東から)
 　(2) SD45全景(北東から)
- 図版21(1) SD48全景(北から)
 　(2) SD48全景(南から)
- 図版22(1) SD48遺物出土状態(南東から)
 　(2) SD50全景(南から)
- 図版23(1) SK01遺物出土状態(北から)
 　(2) SK02遺物出土状態(北から)
- 図版24(1) SK03全景(南から)
 　(2) SK04全景(南西から)
- 図版25(1) SK06遺物出土状態(北から)
 　(2) SK07全景(南西から)
- 図版26(1) SK08全景(北東から)
 　(2) SK09全景(南から)
- 図版27(1) SK10全景(南から)
 　(2) SK11全景(北から)
- 図版28(1) SK12遺物出土状態(北から)
 　(2) SK14全景(東から)
- 図版29(1) SK18全景(南から)
 　(2) SK19全景(南から)
- 図版30(1) SK20全景(東から)
 　(2) SK21全景(南から)
- 図版31(1) SK24全景(南から)
 　(2) SE01全景(北から)
- 図版32 捩立柱建物跡出土遺物(1)
- 図版33 捩立柱建物跡出土遺物(2)
- 図版34 柱穴出土遺物
- 図版35 溝状遺構出土遺物(1)
- 図版36 溝状遺構出土遺物(2)
- 図版37 溝状遺構出土遺物(3)
- 図版38 溝状遺構出土遺物(4)
- 図版39 溝状遺構出土遺物(5)
- 図版40 溝状遺構出土遺物(6)
- 図版41 溝状遺構出土遺物(7)
- 図版42 溝状遺構・土坑出土遺物
- 図版43 土坑・井戸・不明遺構・包含層出土遺物
- 図版44 包含層出土遺物(1)
- 図版45 包含層出土遺物(2)
- 図版46 包含層出土遺物(3)
- 図版47 包含層出土遺物(4)
- 図版48 溝・包含層出土遺物
- 図版49 捩立柱建物跡・柱穴・溝状遺構・包含層出土遺物
- 図版50 捩立柱建物跡・柱穴・溝状遺構・井戸・包含層出土遺物
- 図版51 包含層出土遺物(5)

表 目 次

第1表 整理作業工程表	3	第6表 管玉觀察表	129
第2表 堀立柱建物跡一覧表	6	第7表 金属觀察表	129
第3表 樹種同定結果	112	第8表 木器觀察表	129
第4表 土器觀察表	123	第9表 瓦觀察表	129
第5表 石器觀察表	128		

付 図 目 次

付図1 山南遺跡遺構配置図(1)

付図2 山南遺跡遺構配置図(2)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

山南遺跡は、公営住宅（善通寺地区）建設事業に伴い、香川県教育委員会が当該地における埋蔵文化財の確認を目的に平成9年6月と11月に試掘調査を実施した結果、文化財保護法に基づく保護措置が必要であると判断した。（「埋蔵文化財試掘調査報告XⅠ 香川県内遺跡発掘調査」平成10年3月 香川県教育委員会）

この結果に基づき、香川県教育委員会は財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）との間で、平成10年4月1日付けで「埋蔵文化財調査委託契約」を締結し、センターが発掘調査を担当することになった。

第2節 調査の経過

1 調査体制

平成10年度の調査及び平成14年度の整理は、香川県教育委員会事務局文化行政課の指導の下、次の体制で実施した。

平成10年度

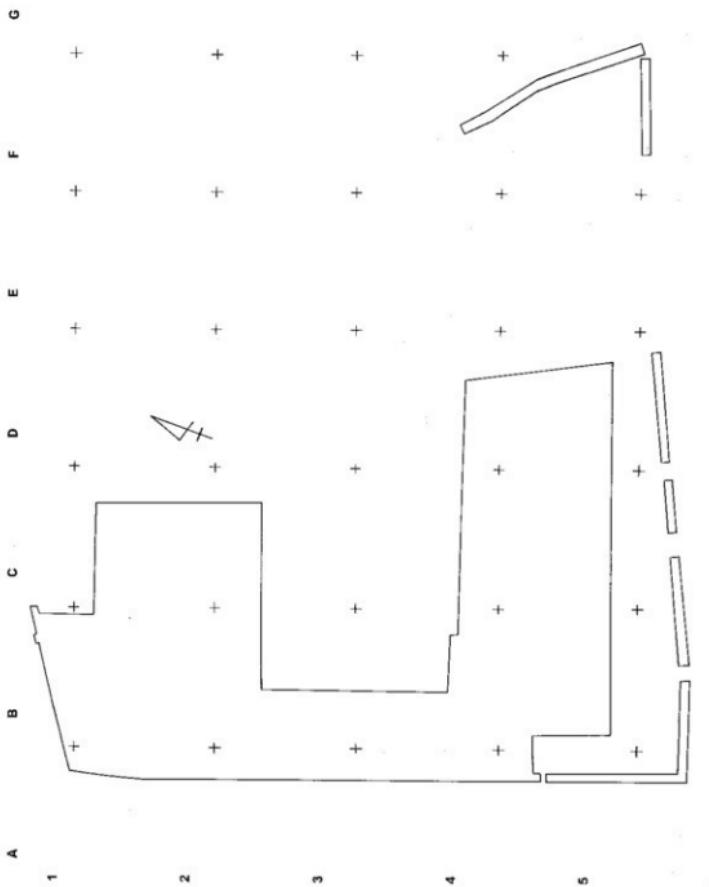
総括 所 長	菅原 良弘
次 長	小野 善範
総務 副主幹兼係長	田中 秀文
主 査	長尾寿江子
参 事	別枝 義昭
調査 主任文化財専門員	廣瀬 常雄
参 事	長尾 重盛
主任文化財専門員	中西 昇
文化財専門員	島田 英夫
調査技術員	糸山 晋

平成13年度

総括 所 長	小原 克己
次 長	渡部 明夫
総務 副主幹	野保 昌弘
係 長	多田 敏弘
主 査	山本 和代
主任主事	高木 康晴
整理 主任文化財専門員	真鍋 昌宏
担 当	東條 俊子、長井真由美、西本英里香、加藤 恵子、藤澤 明子、 東川真希子、福家 良子、徳永 貴美

2 本調査の経過

調査は、平成10年6月1日から同年12月28日にかけての、およそ7ヶ月間実施した。調査時点では、調査区は対象地の南、建物本体部分にあたるI区、北と西にかけてL字状を呈する建物及び付帯施設部分のII区、擁壁工事部分の北辺、西辺、南辺、南東隅の各部分をそれぞれ擁壁調査区1~4とした。調査面積は、I区が $1,160\text{m}^2$ 、II区 $1,150\text{m}^2$ 、擁壁調査区1~4が 90m^2 、 270m^2 、 60m^2 、 50m^2 の合計 $2,780\text{m}^2$ である。県土木部住宅課との協議により、工事工程を踏まえて、擁壁調査区とそれに続けてI区から発掘調査を開始した。



第1図 調査区割図

香川県教育委員会の試掘調査結果から、遺構面が2面あることが確認されており、本調査ではI区の西半分強及びII区、擁壁調査区1・2において下層の遺構面を検出・精査した。その結果実掘面積は、5,220m²となった。

なお、航空写真測量は、I区第1遺構面・擁壁調査区2の南半分・擁壁調査区3について8月15日(1回目)、I区第2遺構面・擁壁調査区1及び2の第2遺構面について10月2日(2回目)、II区第1遺構面を11月17日(3回目)、II区第2遺構面を12月16日(4回目)に実施した。

また、平成11年3月31日付けで「県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度 山南遺跡」を刊行した。

以下、本報告中では、I区・II区等の呼称は用いず全体を第1図に示した地区割りを用いて説明する。

3 整理作業の経過

整理作業は、4月～9月の6カ月間で実施した。作業の進捗状況は第1表のとおりである。

第1表 整理作業工程表

	4	5	6	7	8	9
遺物の注記	■					
遺物の接合、石膏復元	■					
報告遺物の抽出	■	■				
遺物の実測		■	■			
遺物図面のチェック			■			
遺物挿図原稿の作成				■	■	
遺構整理			■	■	■	
遺構挿図原稿の作成				■	■	
付図、表原稿の作成			■	■	■	
遺物写真撮影				■		
原稿作成			■	■	■	■
編集						■
遺物の収納、台帳整備						■

第2章 立地と環境

山南遺跡は、香川県西部の普通寺市生野町山南2881-1番地外に所在する。丸龜平野の南西に位置する大麻山から北東に延びる尾根の末端で、やや独立丘陵状に標高119mのピークをもつ磨白山の南麓にあり、別に大麻山の小尾根末端からさらに延びる微高地の斜面部から谷部に至る地点に位置する。当該地の標高は約42mを測る。

平成10年度の同時期に、南側隣接地において普通寺市教育委員会による発掘調査が実施され、弥生時代前期の土坑、後期の堅穴住居跡などが検出されている。(「山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書～普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5～」1999年3月 普通寺市教育委員会)

周辺で確認されている遺跡には、縄文時代までのものはあまり知られていない。弥生時代には、この地域の拠点的集落である旧練兵場遺跡が、当遺跡の北西方向約3kmに所在する。また、大麻山北西麓の瓦谷遺跡では平形銅劍・中広銅劍・中繩銅矛などが出土している。近接する磨白山丘陵上にも弥生土器の散布が見られる。なお、西方の我拌師山から大麻山西麓にかけての地域は、銅鐸をはじめとする青銅器の出土地として知られているなど、県下でも弥生時代の中心的な地域であったと考えられる。

古墳時代には、大麻山北西部中腹の標高400mを超える高所に、前期の前方後円墳である野田院古墳がある。前方部は盛土、後円部は安山岩の積石によって築かれている。同山腹にはこの他にも、大麻山腕貸塚古墳・大麻山経塚古墳・丸山1号墳等の積石塚が分布する。盛土の前方後円墳としては、東より磨白山古墳・鶴ヶ峰4号墳・王墓山古墳などがある。当遺跡に近接する磨白山丘陵頂部に立地する磨白山古墳は全長49mの前方後円墳で、後円部からは過去に、造付石枕をもつ国分寺町鷺ノ山産角閃安山岩製剝抜式石棺が出土しており、重要文化財に指定されている。後期古墳としては、大麻山北東麓の岡1号墳と西麓に宮ヶ尾古墳が所在する。共に、横穴式石室内部に線刻画をもつ円墳として知られている。前者では堅穴住居と考えられる線刻が確認されており、後者では騎馬人物・舟・武人などが描かれているなど、古墳時代に至っても中心的な地域を形成している。

古代以降、散発的な遺跡の確認は行われているが、この地域の全体像は不明の状態である。今後の調査等を待ちたい。



第2図 遺跡の位置図 (1/25, 000)



- | | | | |
|-------------|---------------|-------------|--------------|
| 1. 山南遺跡 | 14. 龍川五条遺跡 | 27. 九頭神遺跡 | 35. 王墓山古墳 |
| 2. 田村廬寺 | 15. 川四条遺跡 | 28. 下吉田神社古墳 | 36. 丸山古墳 |
| 3. 中ノ池遺跡 | 16. 三条番ノ原遺跡 | 29. 齊難古墳 | 37. 御前神社古墳 |
| 4. 平池南遺跡 | 17. 三条黒島遺跡 | 30. 大塚池古墳 | 38. 宮が尾1・2号墳 |
| 5. 田村遺跡 | 18. 稲家原遺跡 | 31. 旧鍛兵場遺跡群 | 39. 宮が尾3号墳 |
| 6. 三井遺跡 | 19. 稲家一里屋遺跡 | ①城ノ宗遺跡 | 40. 瓦谷1号墳 |
| 8. 乾遺跡 | 20. 稲家大林上遺跡 | ②仙遊遺跡 | 41. 鶴が峰4号墳 |
| 7. 上一坊遺跡 | 21. 稲家田代遺跡 | ③仲村廬寺 | 42. 鶴が峰山頂古墳 |
| 9. 中村遺跡 | 22. 川西北・原遺跡 | ④善通寺伽藍 | 43. 廉山古墳 |
| 10. 永井遺跡 | 23. 宝像寺跡 | ⑤善通寺西遺跡 | 44. 同古墳群 |
| 11. 稲木遺跡 | 24. 陣山古墳群 | 32. 香色山經塚群 | 45. 大麻山柳賀塚古墳 |
| 12. 金藏寺下所遺跡 | 25. 鈴伏山北東麓遺跡群 | 33. 北原古塚群 | 46. 大麻山莊塚古墳 |
| 13. 五条遺跡 | 26. 石川遺跡 | 34. 菊塚古墳 | 47. 野田院古墳 |

第3図 周辺遺跡位置図 (1/50,000)

第3章 調査の成果

第1節 土層序について

調査区の基本層序は耕作土・床土・部分的に残る灰褐色土の古代～中世包含層を経て、地表下0.3～0.5mで第1遺構面に至る。更に暗褐色ないし暗灰褐色粘質土下0.3～0.5mの灰黄色シルト・粘質土の上面で第2遺構面が存在する。

第4～8図は、調査区の東西南北壁の土層である。基本層位は前述したとおりであるが、異なる部分も多々ある。特に第2遺構面は全ての調査区で確認されず、微地形の影響によるものと考えられる。この点、中世以降は比較的安定した地形の元に集落形成が行われたことが伺われる。

第2節 主要遺構の検出状態

第1遺構面で検出した遺構は、掘立柱建物跡15棟、柵列跡5条、井戸跡4基をはじめ、多数の土坑、柱穴跡群、大小の溝状遺構等がある。近世以降に削平を受けているためか、第1遺構面では中世の遺構が大半を占めるものの、古代及び近世の遺構も同一面で検出している。なお、この面における検出遺構は、調査区北部で密度が高い。

第1遺構面における主たる出土遺物は、8世紀代の須恵器（杯・杯蓋・壺等）、中世の土師器（杯・小皿・羽釜・鉢等）、須恵器（束縛系こね鉢・壺等）、青磁碗片、近世のものでは肥前系陶器、土師質土器、瓦等がある。

下位の第2遺構面では、調査区南部で弥生時代後期の溝状遺構、調査区北部では北西隅で弥生時代前期土器を含む包含層等を、東端で弥生時代後期の溝状遺構を検出した。主たる出土遺物は、弥生土器（前期・後期）の壺・鉢・高杯等、石礫、磨製石斧等がある。

第3節 遺構と遺物

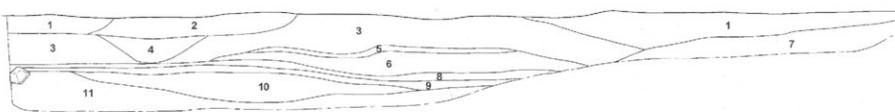
前節まで記述した第1遺構面、第2遺構面は、部分的な確認に終わっており、面による時代差を明瞭に反映したものではない。また、出土している遺物から弥生時代前期・後期、古墳時代、古代～中世、近世の複合遺跡であること、年代を確定させるための出土遺物を持たない遺構も多々あるため、ここでは、遺構の種別にそって記述し、時代ごとの概要については第4章でまとめる。

1 掘立柱建物跡

第2表 山南遺跡掘立柱建物一覧表

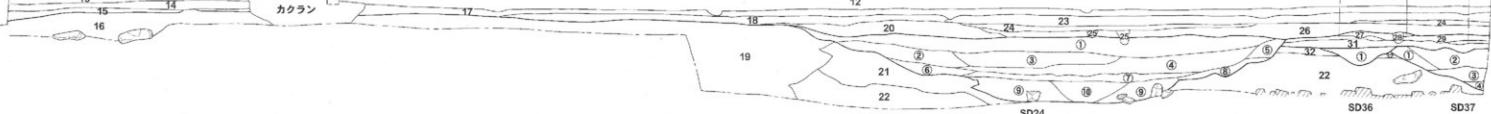
遺構名	規模・構造(桁行×梁間)m	面積(m ²)	主軸方向
SB01	2間(3.5)×2間(3.0)	10.5	N-77° -E
SB02	2間(3.5)×3間(8.0)	28	N-74° -E
SB03	1間(2.8)×3間(5.8)	16.24	N-18° -W
SB04	2間(6.0)×2間(3.9)	23.4	N-70° -E
SB05	1間(1.7)×2間(4.2)	7.14	N-14° -W
SB06	1間(2.2)×2間(3.7)	8.14	N-15.5° -W
SB07	2間(4.2)×3間(7.3)	30.66	N-15.5° -W
SB08	1間(3.9)×2間(6.0)	21.6	N-70° -E
SB09	2間(3.8)×5間(12.4)	47.12	N-72.25° -E
SB10	2間(2.7)×2間(2.1)	5.67	N-21.4° -W
SB11	2間(3.2)×5間(5.7)	18.24	N-18.5° -W
SB12	1間(2.2)×3間(4.0)	8.8	N-71° -E
SB13	4間(6.3)×4間(7.6)	47.88	N-71.4° -E
SB14	2間(4.1)×3間(7.2)	29.52	N-67.5° -E
SB15	2間(3.7)×3間(6.3)	23.31	N-21.75° -W

41.7m

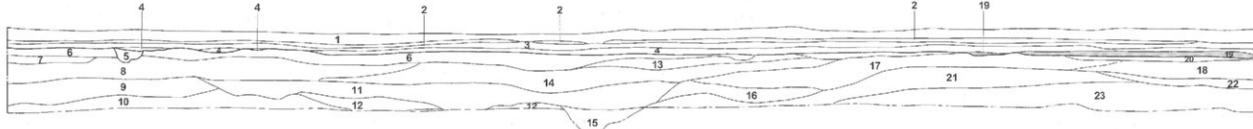


- SD24: ① 黄灰系小中粒砂質泥じり粘土
② 白色小礫混じりシルト
③ 黄色小礫混じり粘土
④ 白色砂質シルト
⑤ 黄色砂質シルト
⑥ 白色砂質シルト
⑦ 白色砂質シルト
⑧ 白色砂質シルト
⑨ 深灰色軟塑(1より大形塑性多い)
⑩ 黄褐色軟塑(1より少)
⑪ 黄褐色軟塑
⑫ 黄褐色軟塑
⑬ 黄褐色軟塑
⑭ 黄褐色軟塑じり粘土
⑮ 黄褐色軟塑じり粘土
⑯ 黄褐色軟塑じり粘土
⑰ 黄褐色シルト
- SD24: 18. 灰褐色混じりシルト
19. 正黄色帶砂質
20. 正黄色帶砂質
21. 正黄色シルト
22. 正黄色帶砂質
23. 正黄色シルト
24. 正黄色
25. 正黄色
26. 正黄色
27. 正黄色土
28. 黄色シルト
29. 黄色
30. 黄色
31. 黄色
32. 黄色シルト

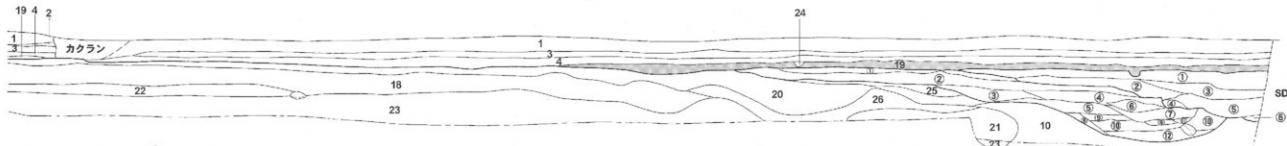
41.7m



41.7m

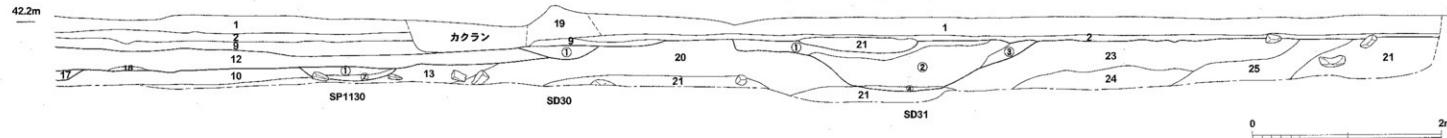
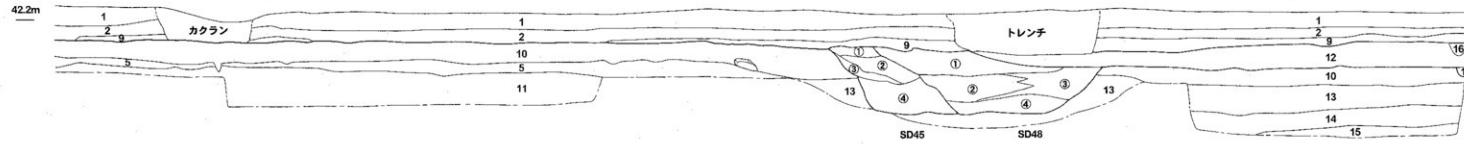
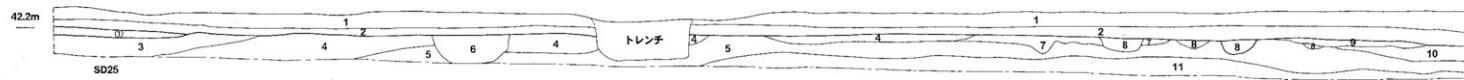


41.7m



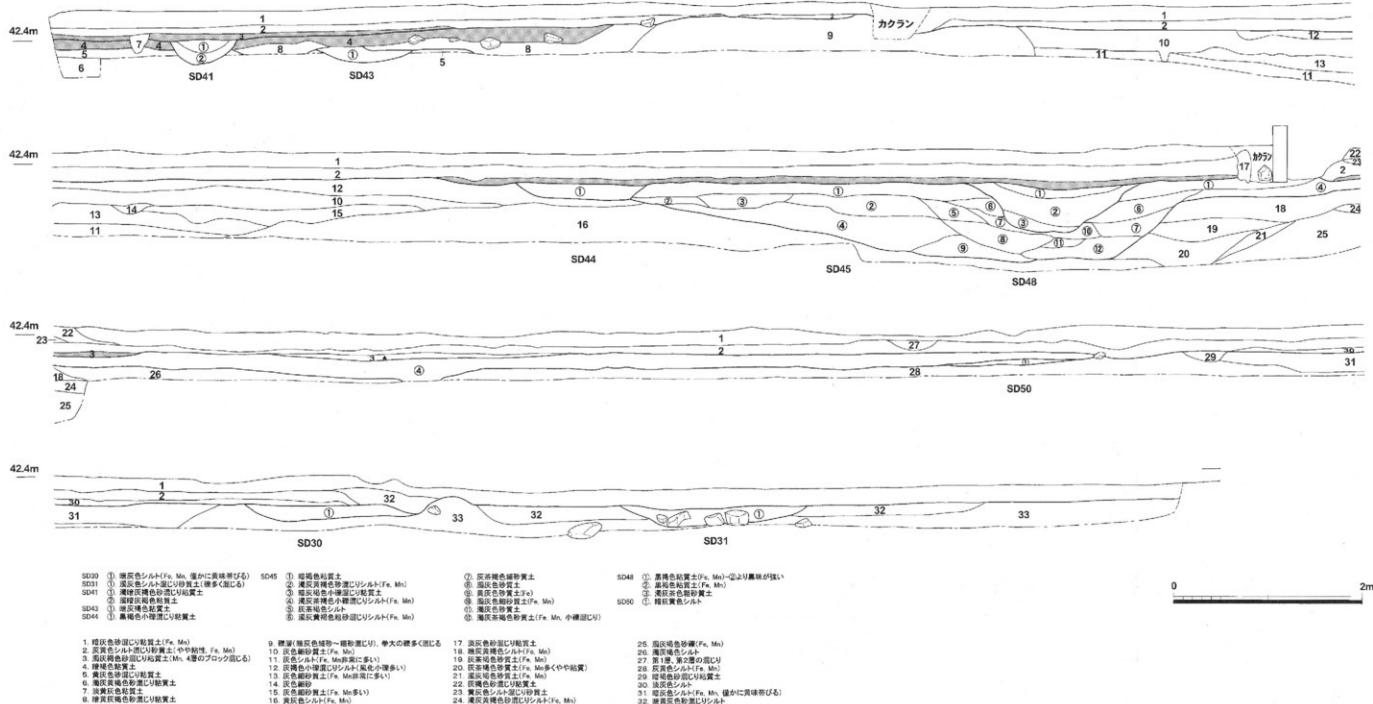
第4図 調査壁土層断面図① (1/40)



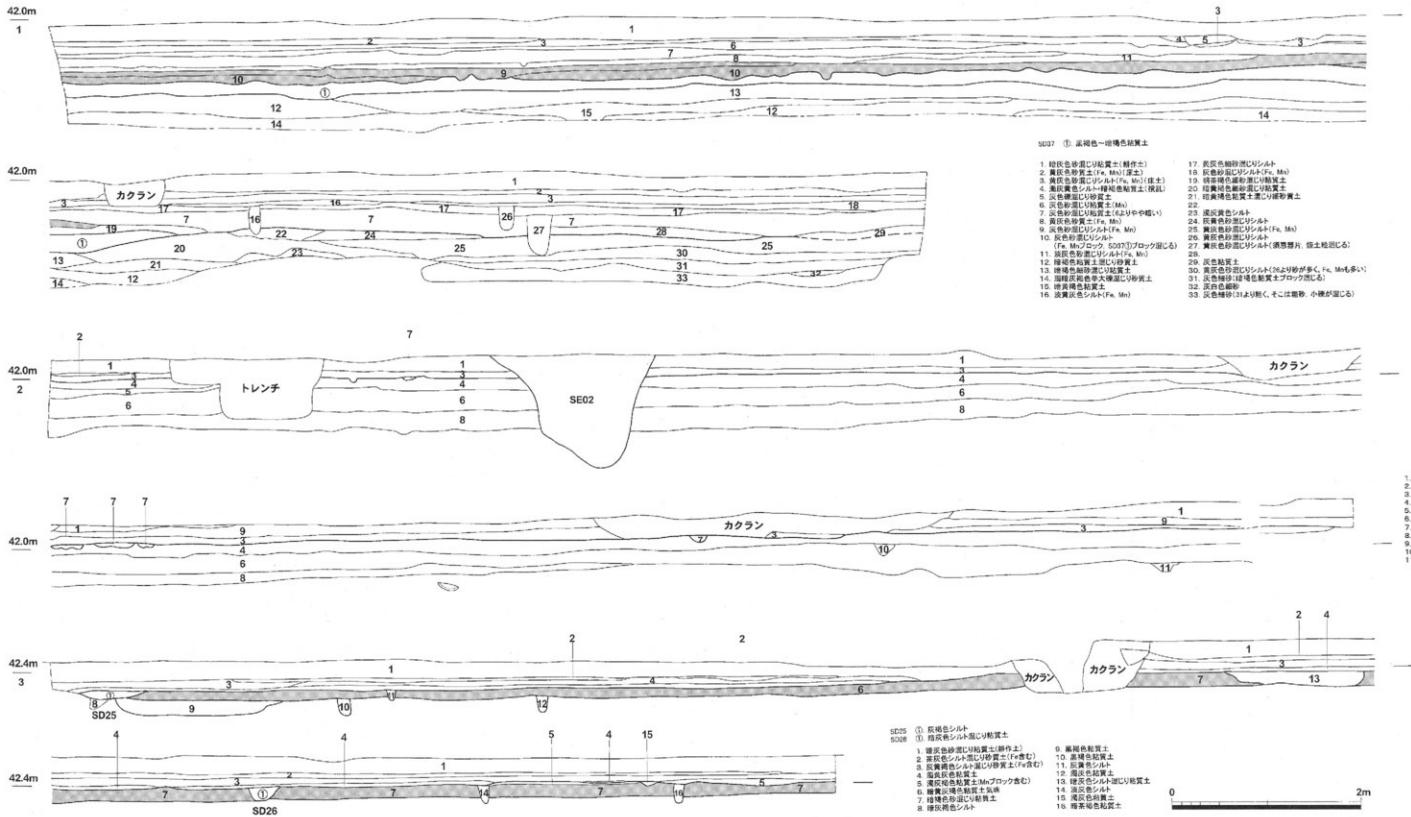


- SD25
 ① 黄褐色砂質粘土(板質土)
 ② 黄褐色砂質粘土(Mn)
 ③ 黄褐色砂質粘土(Mn)
 ④ 黄褐色砂質粘土(板質土)
 ⑤ 黄褐色砂質粘土(板質土)
 ⑥ 黄褐色砂質粘土(板質土)
 ⑦ 黄褐色砂質粘土(板質土)
 ⑧ 黄褐色砂質粘土(板質土)
 ⑨ 黄褐色砂質粘土(板質土)
 ⑩ 黄褐色砂質粘土(板質土)
 ⑪ 黄褐色砂質粘土(Fe, Mn)
 ⑫ 黄褐色砂質粘土(Fe, Mn)
 ⑬ 黄褐色砂質粘土(Fe, Mn)
- SD31
 1 黄褐色砂質粘土(板質土)
 2 黄褐色砂質粘土(板質土)
 3 黄褐色砂質粘土(板質土)
 4 黄褐色砂質粘土(板質土)
 5 黄褐色砂質粘土(板質土)
 6 黄褐色砂質粘土(板質土)
 7 黄褐色砂質粘土(板質土)
 8 黄褐色砂質粘土(板質土)
 9 黄褐色砂質粘土(板質土)
 10 黄褐色砂質粘土(板質土)
 11 黄褐色砂質粘土(Fe, Mn)
 12 黄褐色砂質粘土(Fe, Mn)
 13 黄褐色砂質粘土(Fe, Mn)
- SD45
 ① 黄褐色砂質粘土
 ② 黄褐色砂質粘土
 ③ 黄褐色砂質粘土
 ④ 黄褐色砂質粘土
 ⑤ 黄褐色砂質粘土
 ⑥ 黄褐色砂質粘土
 ⑦ 黄褐色砂質粘土
 ⑧ 黄褐色砂質粘土
 ⑨ 黄褐色砂質粘土
 ⑩ 黄褐色砂質粘土
 ⑪ 黄褐色砂質粘土
 ⑫ 黄褐色砂質粘土
 ⑬ 黄褐色砂質粘土
 ⑭ 黄褐色砂質粘土
 ⑮ 黄褐色砂質粘土
 ⑯ 黄褐色砂質粘土
 ⑰ 黄褐色砂質粘土
 ⑱ 黄褐色砂質粘土
 ⑲ 黄褐色砂質粘土
 ⑳ 黄褐色砂質粘土
 ㉑ 黄褐色砂質粘土
 ㉒ 黄褐色砂質粘土
 ㉓ 黄褐色砂質粘土
 ㉔ 黄褐色砂質粘土
 ㉕ 黄褐色砂質粘土

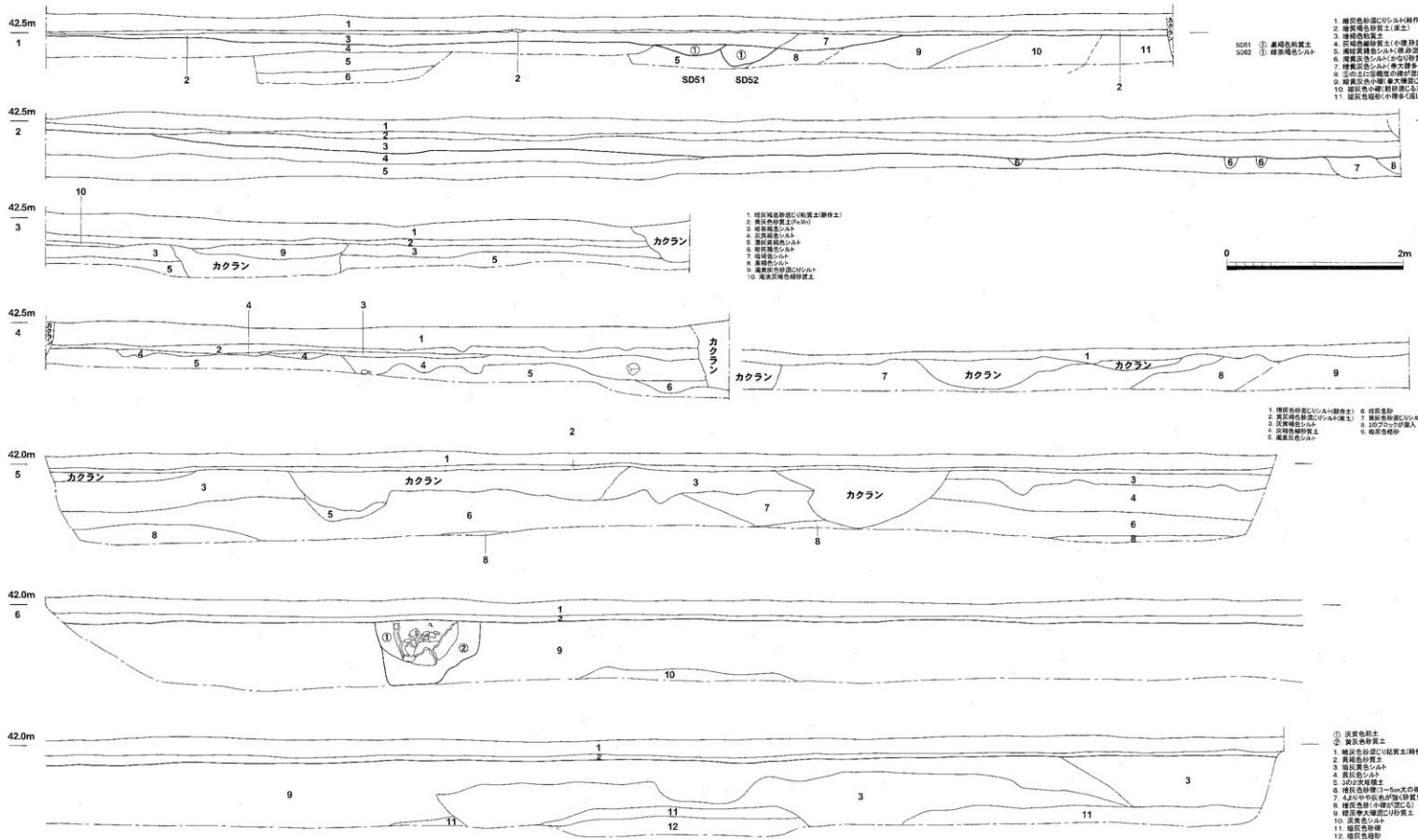
第5図 調査壁土層断面図② (1/40)



第6図 調査壁土層断面図③ (1/40)



第7図 調査壁土層断面図④ (1/40)



第8図 調査壁土層断面図⑤ (1/40)

SB01・SA01（第9図）

B 2 調査区で確認した2間×2間の純柱建物である。柱穴の大きさに大小があり、推定プランも明確な長方形にならないが、東側のSB02や北側のSA01との関係から建物と認定している。柱穴の平面面からして柱の抜き取り穴やその痕跡が認められないため、移動に際しては柱材を根元から切断したと考えられる。柱穴に近接して小形の柱穴が多く認められる。これは、主たる建物の柱穴とは考えられないが、柱を補助するためのものとも考えられる。この小柱穴はほぼ垂直の掘り方を持つことから、添え柱的な役割を担っていたと考えることもできる。

SA01は、現状では6間のみ確認されており、SB01・SB02の北辺を東西に延びている。ただし、それぞれの掘立柱建物跡の底に分割される可能性もある。

1はSB01出土の土器である。2はSA01出土の土器である。1は、縦方向のヘラミガキを持つ壺底部で、弥生時代中期の所産と考えられる。2は土師器杯の口縁で、破片であること単独資料であることから年代決定は難しい。以上1・2の資料は、この掘立柱建物跡の年代を示す資料とはなり得ないと考えている。

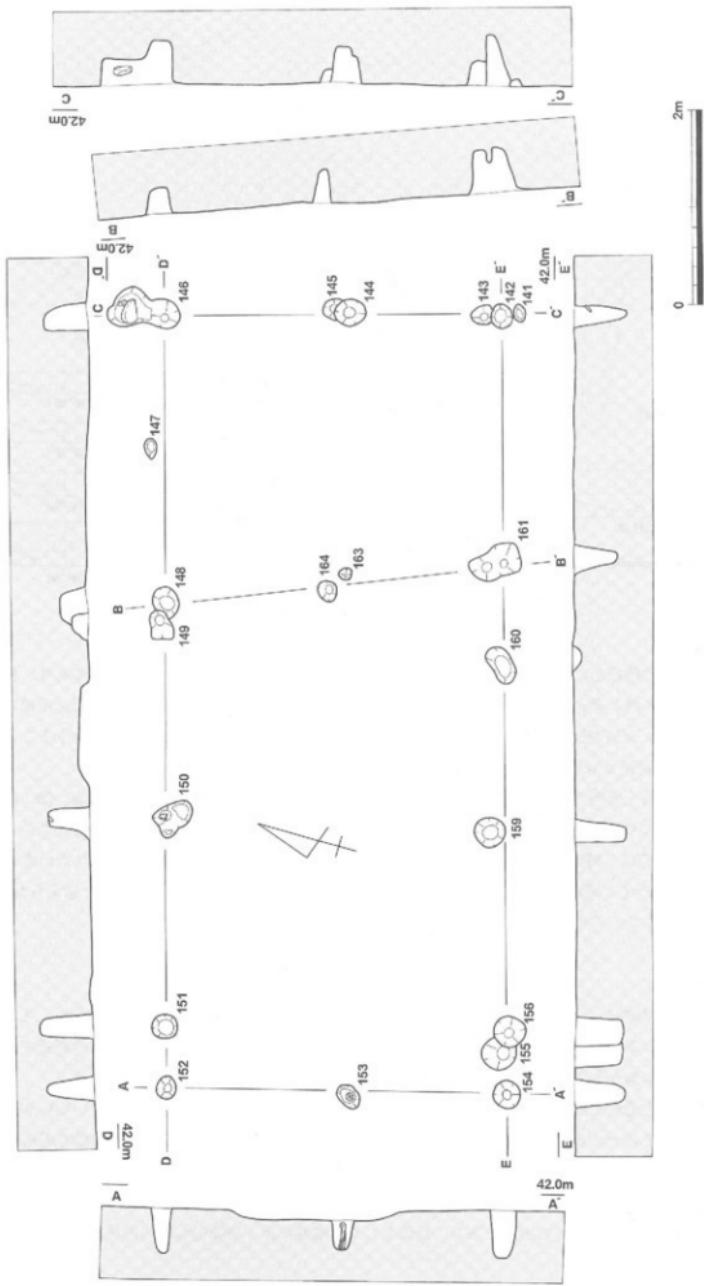
SB02（第10・11・27図）

B 2 調査区で確認した2間×3間の東西棟である。この掘立柱建物跡もSB01同様、添え柱的役割を持つ小柱穴が顕著である。SP151とSP156を結ぶ線は西辺に並行するため、この部分に何らかの施設があった可能性もある。また、東辺から1間のラインは北辺・南辺の柱穴跡の位置がずれており斜めラインになるが、中央にSP163・164があるため、変形ではあるが土間等何らかの施設を想定することが可能である。柱穴断面の形状・深さなど必ずしも一定しないことから、使用部材の不規則性が考えられる。第27図74は、SP152に残存していた柱材である。材質は、コウヤマキである。（第4節自然科学分析の結果による。以下、柱材については同文による。）

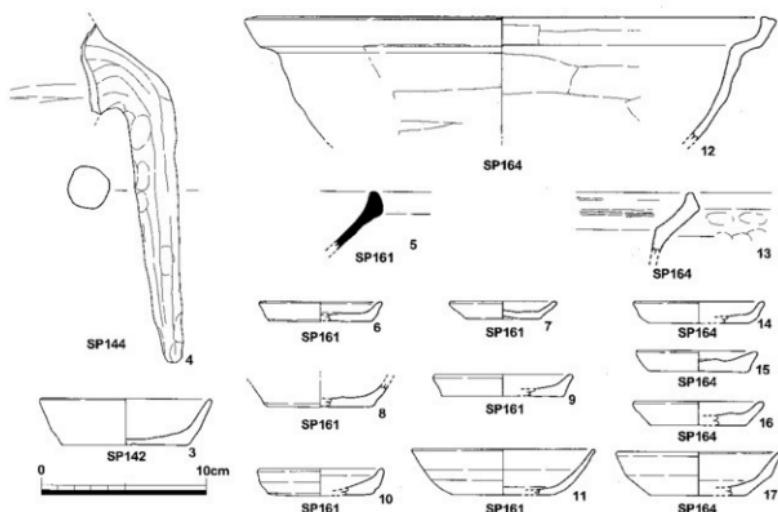
出土遺物は第11図に図示した。3は土師器杯で、平底の底部からやや内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。底面は板目圧痕を残す。4は、土師質土釜の脚部である。5は、東播系こね鉢の口縁部で、玉縁状に端部外面が肥厚している。6は、土師器小皿で、器壁が厚く、口縁部も短く外反する。底面はヘラ切り後ナデと思われる。7も土師器小皿で、底面は摩滅している。8は、土師器杯の底部で、底面は摩滅している。9は、土師器小皿で、短く外反する口縁部を有する。底面は平らで、糸切り及び板目圧痕と考えられる痕跡が見られる。10も土師器小皿で、器壁が厚く、短く立ち上がる口縁部を有する。底面は摩滅している。11は土師器杯Dで、底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。底面はヘラ切りである。口径が小さく、やや内湾する口縁部を有する。12は土師質土鍋で、受け口状の口縁部を有し、内外面を板ナデ調整している。13も土師質土鍋の口縁部で12ほど顕著ではないが同様の口縁形態を持つ。14は土師器小皿で、6に共通する体部形態を有する。15も土師器小皿で、より器壁が厚く、口縁部の立ち上がりは短い。底面はヘラ切りである。16も土師器小皿で、底面はヘラ切りである。17は土師器杯で、底部から直線的に延びた体部が上方に屈曲して口縁部に至る。

以上の資料の内、5～11はSP161から、SP12～17はSP164からの出土である。内容的にやや不適当な資料もあるが、基本的には杯・小皿で構成されており、地鎮もしくは廃絶に伴う祭祀的行為の所産と考えられる。時期は、やや先行する資料もあるが、おおむね12世紀中葉～後半代と考えられる。片桐1992（以下、古代～中世土器に関しては、同書を基準として使用する。）





第10図 SB02平・断面図 (1/50)



第11図 SB02出土遺物実測図（1/3）

SB03（第12図）

B2調査区で確認した1間×3間の南北棟である。この掘立柱建物跡も桁行が不明確であり、柱間の数から言えば4間と考えることもできる。北辺から1間目の東辺中央に1穴、2間目の西辺南側に1穴見られ、東辺・西辺の柱が対象とならない。ただし、SP99とSP102を結ぶ線と南辺は並行することからSB02同様狭い範囲ではあるが何らかの施設を想定することができる。

18～23が、出土遺物である。いずれも土師器杯で、19・23は底面が糸切り後板目状圧痕、20・21がヘラ切りで仕上げている。全体的にII-⑦～⑨期に位置づけられ、13世紀後半代の所産と考えている。

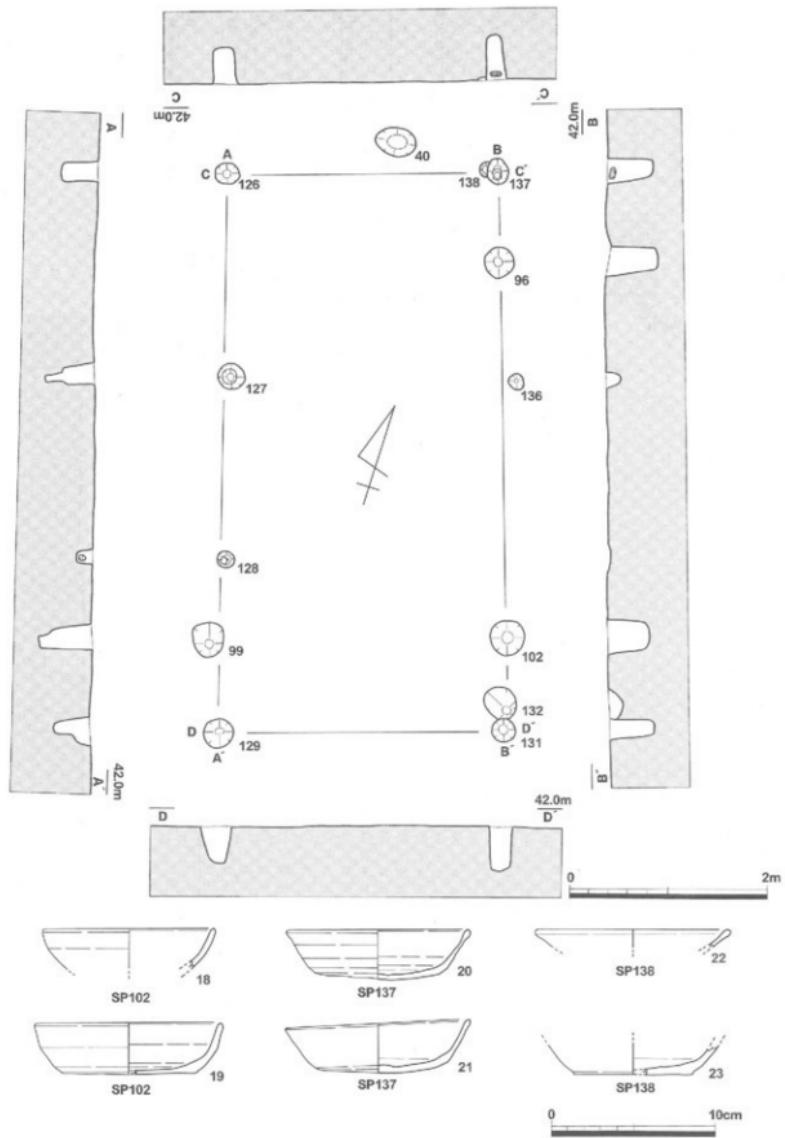
また、22・23は、SP138から出土しているが、SP138はSB03を構成するSP137に切られていることから、SB03に先行する時代の柱穴跡であるが、いずれも13世紀の範囲内での建て替え等と考えられる。73はSB03の柱材でヒノキと考えられる。

SB04（第13図）

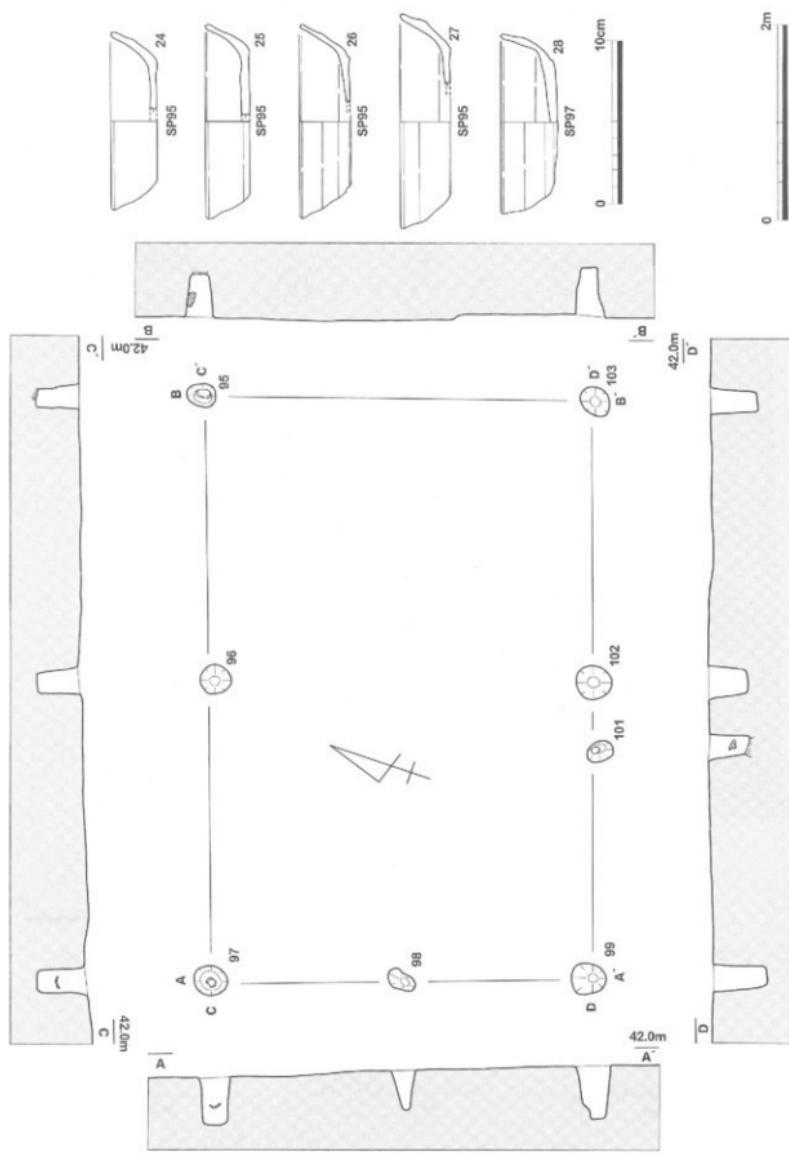
B2調査区で確認した1間×2間の東西棟である。西辺では中央に柱穴が認められるため、2間×2間とも考えられるが、柱穴規模が平面面からもわかるように比較的整っている中で、この西辺中央の柱のみ断面形状が異なることから付随的な柱と考えられる。

24～28が出土遺物である。いずれも土師器杯で、27は摩滅しており観察が十分行えていないがヘラ切りと考えられるほか、24・26・28は糸切り成形である。器形は、先のSB03出土資料同様であるが、総体的に口径が大きく、口縁部もあまり外傾しないことから、II-⑦～⑨期に相当する資料であるが、ややSB03よりも先行し13世紀中葉～後半代の所産と考えている。

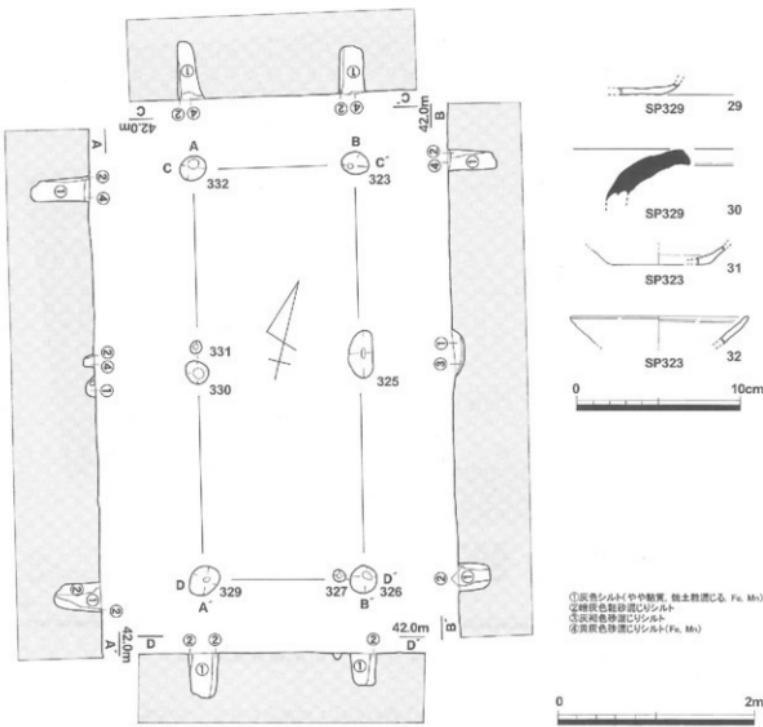
なお、24～27はSP95からの出土であり、地鎮もしくは廃絶に伴う祭祀的行為の所産と考えられる。



第12図 SB03平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3)



第13図 SB04平・断面図（1/50）、出土遺物実測図（1/3）



第14図 SB05平・断面図(1/50)、出土遺物実測図(1/3)

SB05 (第14図)

B2調査区で確認した1間×2間の南北棟である。西辺・東辺とも中央の柱穴が四隅の柱穴に比べて浅く貧弱である。この掘立柱建物跡を構成する柱穴6穴の内2穴には添え柱と考えられる小柱穴が認められる。四隅の柱穴は、柱穴に柱材を建てた後、側面に土を充填している。柱の抜き取り痕が見られないことから、撤去に際しては柱を切り取った可能性が高い。

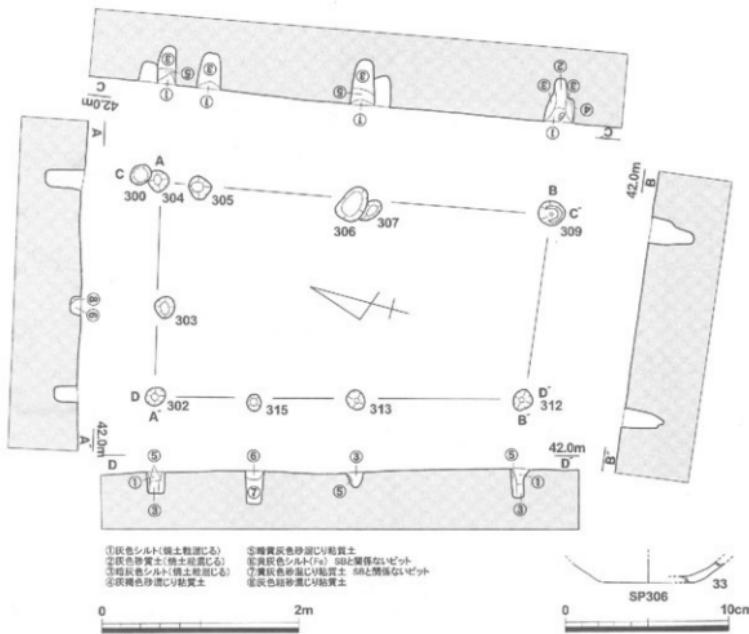
29~32が出土遺物である。29・30はSP329の、31・32はSP323の出土である。

29は、土師器杯の底部片で、年代は不詳である。30は、須恵器壺の口縁部片で、同じく年代は不詳である。31・32は土師器杯で、31は糸切りである。32は、小型化し口縁部の傾きも低くなることなど、後出する要素が大きい。

以上の特徴から、年代を決定することは難しいが、およそ14世紀中葉～後半頃と推定される。

SB06 (第15図)

B2調査区で確認した1間×2間の南北棟である。全体的にはやや台形に近く、北辺の梁間が南辺に



第15図 SB06平・断面図（1/50）、出土遺物実測図（1/3）

比べて広い。北辺の中央少し西に1穴、西辺の1間中央に1穴認められる。北東隅の柱穴は切りあいと添え柱と考えられる柱穴が認められる。また、西辺中央の柱穴にも切り合いが認められる。埋土最上層が皿状に堆積していることから柱の抜き取りが想定される。

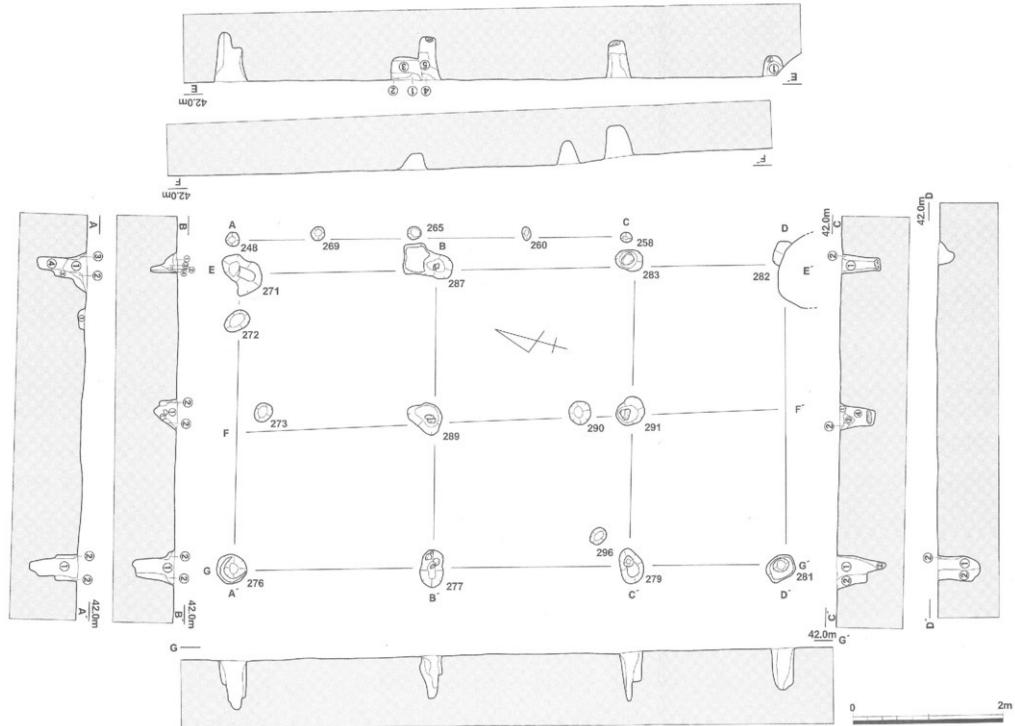
出土遺物は33のみである。33は、土師器杯の底部片で、年代を決定する資料にはならない。

SB07 (第16・17図)

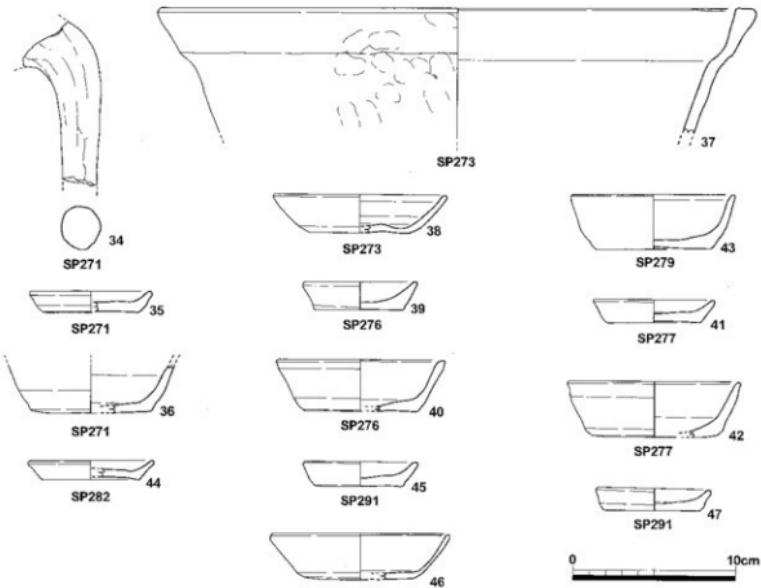
B2調査区で確認した2間×3間、絶柱の南北棟である。ただし、西辺・東辺の中央に柱穴が認められず、規模・構造等についてはやや問題を残す。このことは、北辺に庇と考えられる小柱穴が見られるものの、2間幅しか確認されていないことからも推定できるが、四隅の柱穴の状態が良好であることから、1間×3間の建物の中に2本の支え柱を想定することも可能である。ただ、このことは先の庇の問題を解決するものではない。

この建物では、SP271・287は明らかに柱の抜き取り穴が認められ、その他は柱を切り取ったと考えられる断面形状を示す。

出土遺物は34~47である。34は土師質土鍋の脚部で、中央から先端にかけて欠損している。35は土師器小皿、36は底面へラ切りの杯、37は土鍋口縁部でⅢ-⑦期頃、38は土師器杯でⅡ-⑧・⑨期頃、39は



第16図 SB07平・断面図 (1/50)



第17図 SB07出土遺物実測図（1/3）

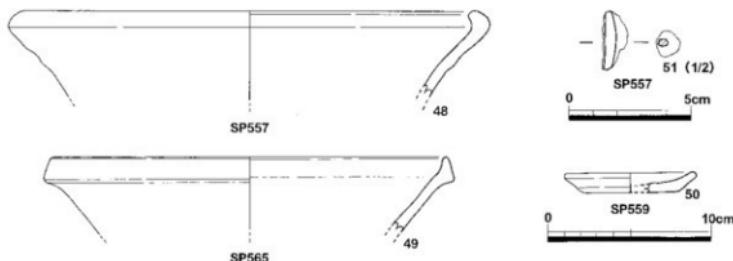
土師器小皿で底面糸切り、40は土師器杯で底面ヘラ切り、41は土師器小皿で糸切り、42・43は土師器杯で糸切り、44は土師器小皿、45も土師器小皿で糸切り、46は土師器杯でヘラ切り、47は土師器小皿で糸切りである。総体に土師器杯は小型化したものが多く、深い。ヘラ切り、糸切りが混在することから、37の資料もあり、14世紀代の資料が不明確な点はあるが、II-⑦～⑨期、13世紀後半代と考えておく。

SB08（第18・19図）

B2・3、C2・3調査区で確認した1間×2間の東西棟である。北・東・南の三辺には庇が見られる。ただし、南辺の西端には、北辺と対応する柱穴が確認できていない。また、建物本体の西辺には主柱穴P539・547の間に4穴認められ、これに対応する形で西辺に並行して柱穴列が存在する。この部分に何らかの施設を想定することが可能であり、入り口施設の痕跡ではないかと考えられる。これは、柱穴が均等距離で検出されておらず、ほぼ中央の柱間がやや広いことによる。

建物全体の柱穴には、根石・詰石が多く見られる。

出土遺物は、48～51である。48・49は須恵器こね鉢である。48は口縁端部が内側に円く湾曲し、あまり例を知らない。49は口縁端部に面を持ち、上方に三角形状に端部を納める。東播系と考えられ、13世紀前半代と考えられる。50は、土師器小皿で、摩滅しているが糸切りと考えられ、先のこね鉢とはほぼ同年代と考えうる。51は不明鉄製品である。以上のことから、13世紀前半代の掘立柱建物跡と考える。



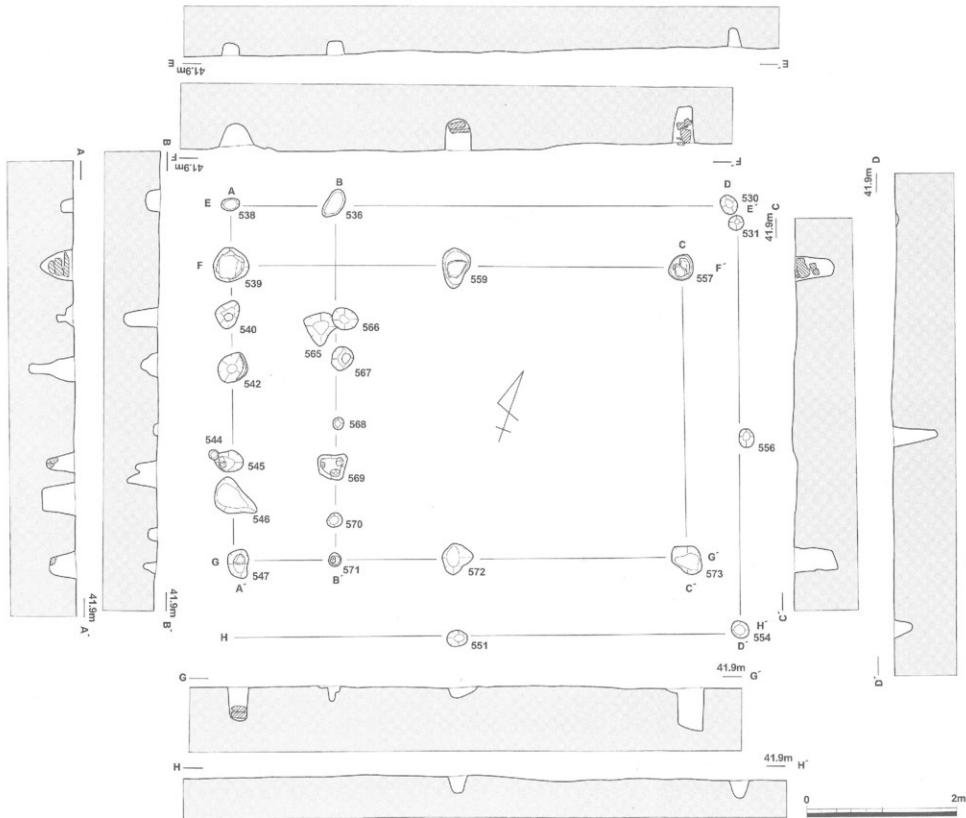
第19図 SB08出土遺物実測図（1/3）

SB09（第20・27図）

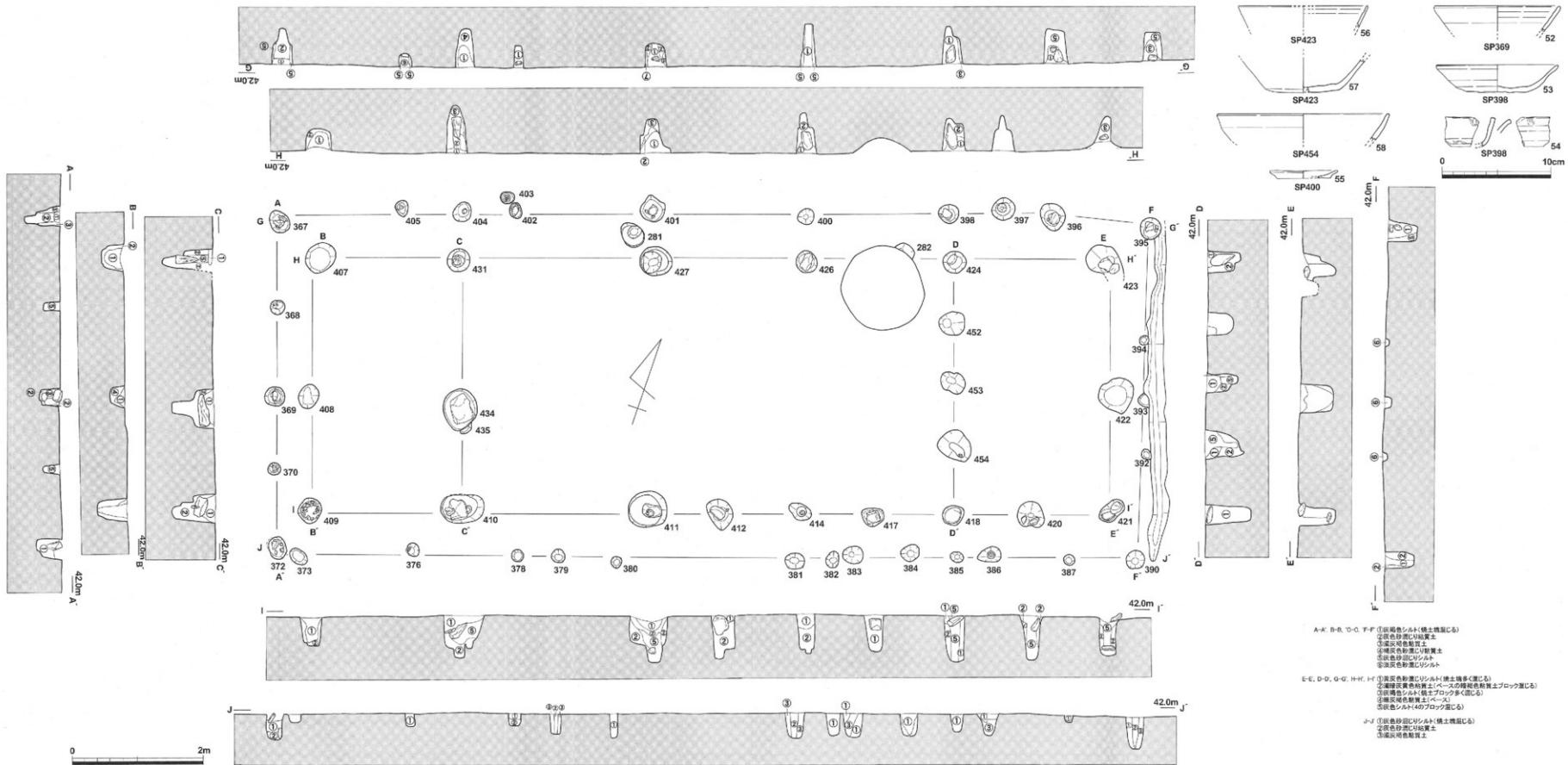
B2・3調査区で確認した2間×5間の東西棟である。四辺に庇が確認される。また、東辺には庇に接するように雨落ち溝がある。建物本体では、西辺から1間にあたるSP431・410を結ぶ線上にSP434があり、東辺から1間にあたるSP424・418を結ぶ線上にSP452・453・454がほぼ均等に配置されている。この東西の1間幅の空間は、中間の3間幅と区分された何らかの施設を想定することができる。

また、庇のうち南辺を構成する柱穴列は、他の三辺に比べて不揃いであり、この部分にも他とは異なる状態、例えば出入り口などを想定しうるかも知れない。第27図75は、SP431に残存していた柱材である。出土状態からすると、平坦な部分を下に設置しており、上部に向かって細くなる傾向がある。材質は、ヒノキである。

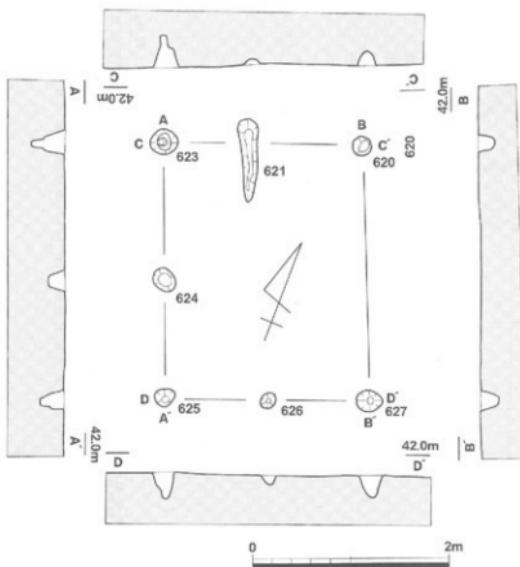
出土遺物は52～58で、このうち庇の柱穴から52～55、建物本体の柱穴から56～58が出土している。52・53は上師器杯で、53はヘラ切り底面に板目压痕が見られる。54は古瀬戸の鉢皿の片口部分で、内面に鉢目が見られる。13世紀後半に位置づけられる。55は土師器小皿、ヘラ切りが見られる。56～58はいずれも土師器杯で、57はヘラ切りである。杯の形態が小型化し、器壁も薄くなる傾向にあることから、54の資料があるものの14世紀前半まで下ると考えられる。



第18図 SB08平・断面図 (1/50)



第20図 SB09平・断面図（1/50）、出土遺物実測図（1/3）



第21図 SB10平・断面図 (1/50)

SB10 (第21図)

C 3調査区で確認した2間×2間の南北棟である。北辺中央の柱穴は溝状を呈しており、東辺の中央柱穴は確認できなかった。出土遺物はない。

SB11 (第22図)

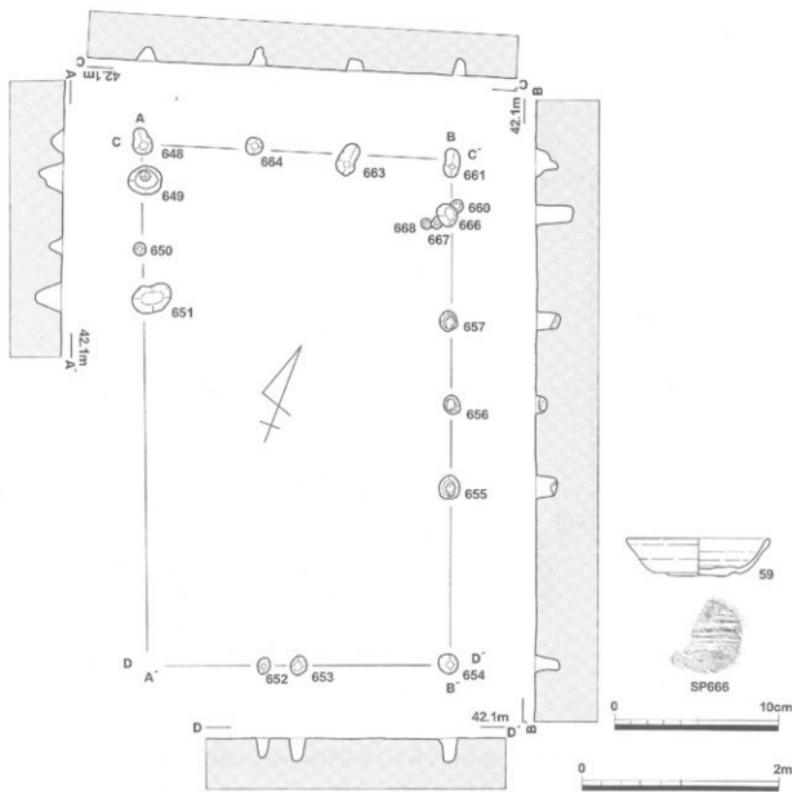
A 3・B 3調査区で確認した2間×5間の南北棟である。北辺では3間、西辺及び南西隅の柱穴を確認していないため、掘立柱建物跡かどうか不明な点もあるが、他の柱穴列を積極的に評価した。東辺においても、北側1間と南側1間の間隔が他と比べて不均衡である。

遺物は59一点であり、SP666からの出土である。SP666は、建物の主たる柱穴であるSP660に切られているが、先後関係は認められるものの、建物に伴う柱穴とも考えられるため、SB11に伴うものか、もしくは先行する年代の資料となるかは明確ではない。

59は、土師器杯で小型化している。底面には板目状圧痕が認められる。1点のみの出土であり、年代を確定するには至っていないが、14世紀前半頃と考えるのが妥当であろう。

SB12 (第23図)

B 4調査区で確認した1間×3間の東西棟である。この掘立柱建物跡もやや不規則な柱穴配置となっている。東辺から1間の間隔が狭く、何らかの施設を想定しうる。また北辺の西から1間を構成する柱



第22図 SB11平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3)

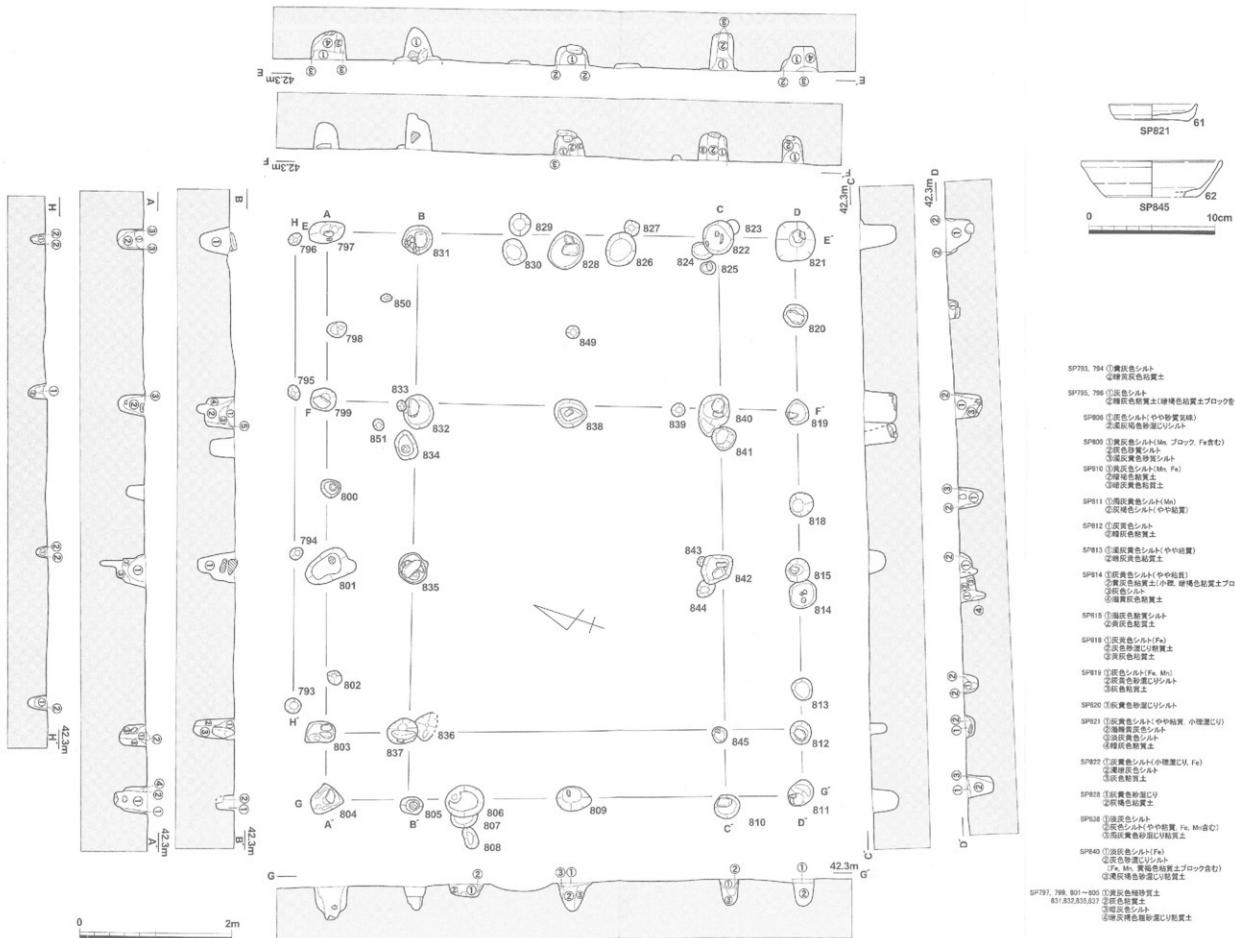
穴が3穴からなっており、主柱に対して添え柱的な役割をもつものか、本來細い3本の柱で構成されていたものは判然としない。SP759は、主柱穴SP761と同758のはば中間にあり、想定ライン上に接することからSB12に伴うものと考えることもできるが、対象位置に柱穴が確認できなかったため、一応除外している。

出土遺物は60のみで、弥生時代の石器である。他の掘立柱建物跡の時期から考えて、混入と考えられる。

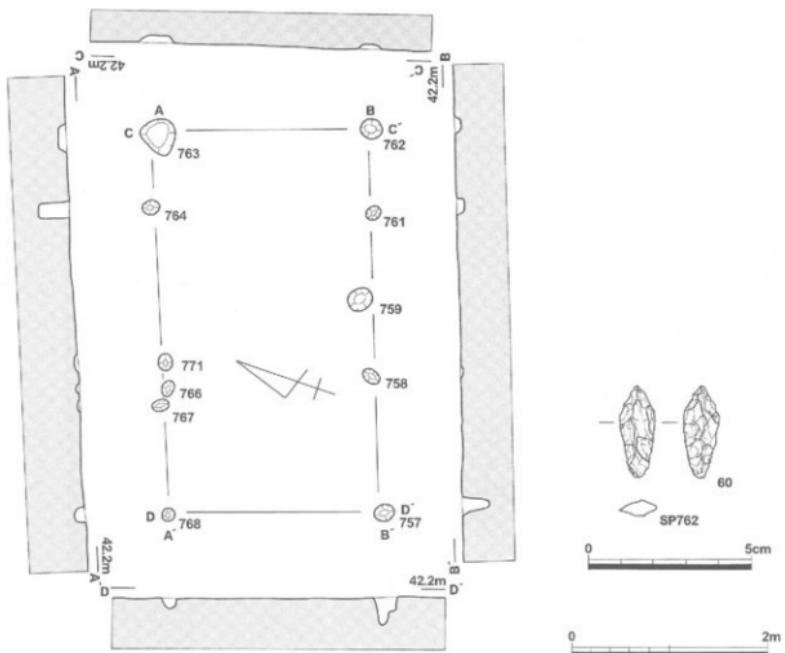
SB13・SA04（第24図）

B4調査区で確認した4間×4間の東西棟である。この掘立柱建物跡は、2間×2間の中央部分を核として、南・北・西側に幅の狭い1分間の空間を持つ。中央部分の西辺には主柱穴が1穴欠落している。また、北辺に接するように柵列（SA04）もしくは庇と考えられる小柱穴列が見られる。掘立柱建物跡を構成する柱穴は、整然とした状態ではなく複数の柱穴が重複したり集合したりしており、建て替えもしくは補強などの要因が考えられるが、いずれも確定するには至らない。

柱穴の土層堆積状況からは、最上層が皿状に堆積するものや、柱材の土壤化を想定できるような状況



第24図 SB13・SA04平・断面図（1/50）、出土遺物実測図（1/3）



第23図 SB12平・断面図(1/50)、出土遺物実測図(2/3)

もあり、一様ではなく柱の抜き取りや切り倒しなど必要に応じた柱材の再利用が考えられる。

出土土器は61・62の2点で、いずれも主柱穴から出土している。

61は、土師器小皿で底面はヘラ切りである。62は土師器杯で、これもヘラ切りである。62は、底径と口径の比率及び深さなどからⅡ-⑦～⑨期の範疇に入ると考えられ、61もこの時期と考えて矛盾がないため13世紀後半代の所産としておく。

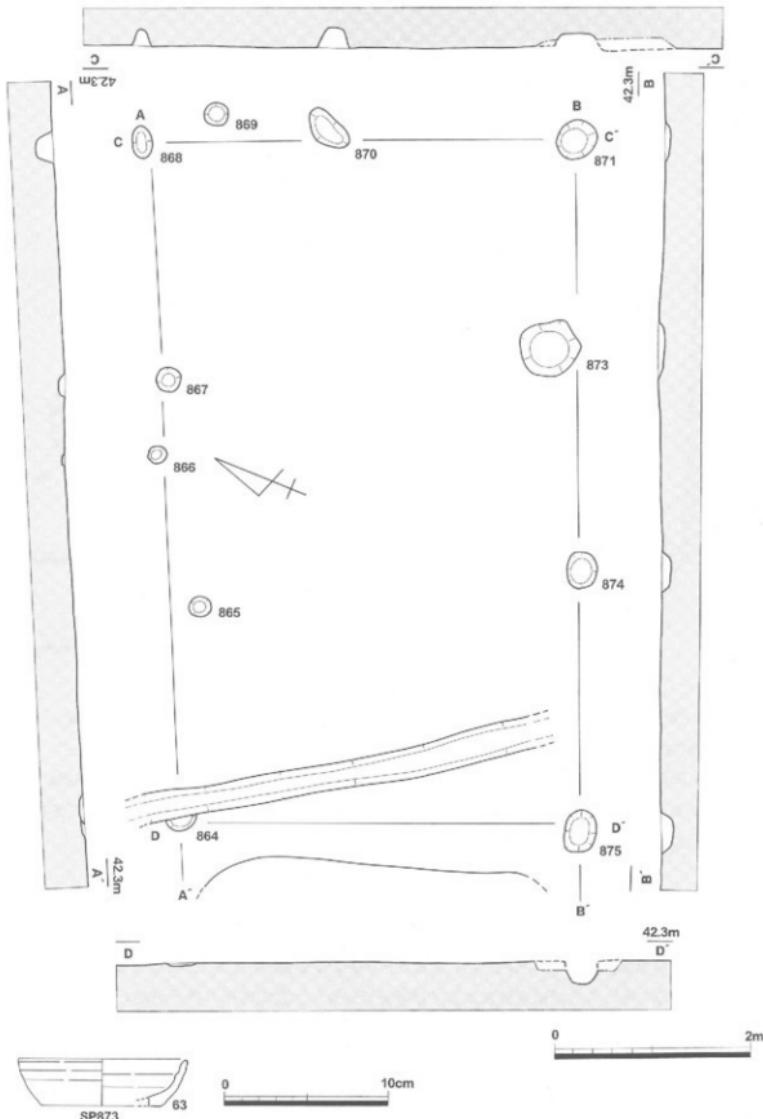
SB14（第25図）

B 5調査区で確認した2間×3間の東西棟である。西辺の中央柱穴が確認できず、北辺・南辺の主柱穴が必ずしも対象位置ではない。北辺では、SP865を考慮する必要があるが、SP864とSP868の線上から大きく離れているため、ここでは主柱穴としては考えていない。柱穴はその多くが浅く、削平を受けたと考えられる。

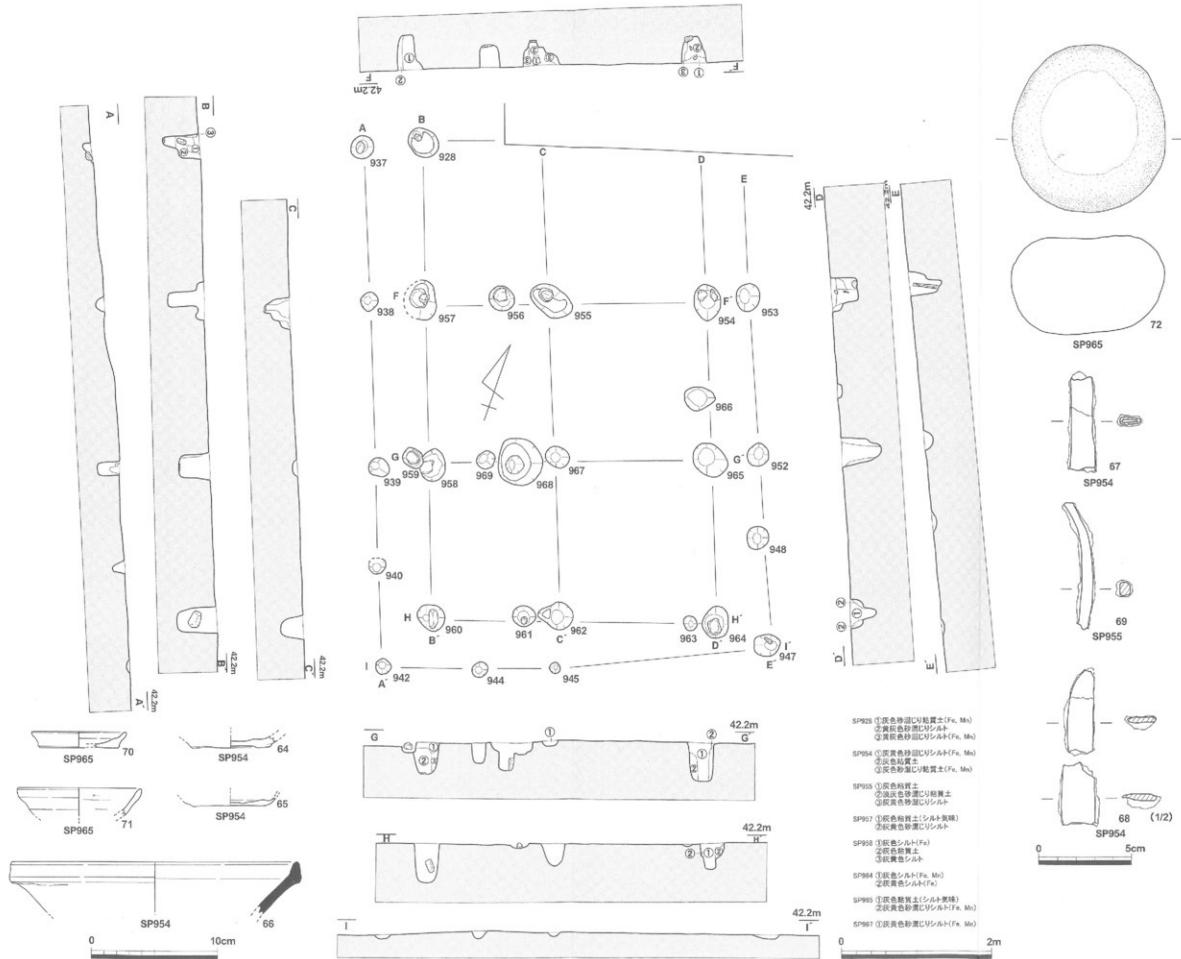
出土遺物は63のみで、土師器杯である。先の61とはほぼ同時期、13世紀後半代と考えておく。

SB15（第26・27図）

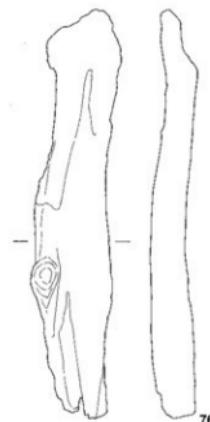
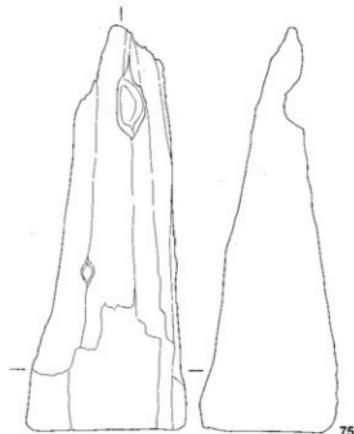
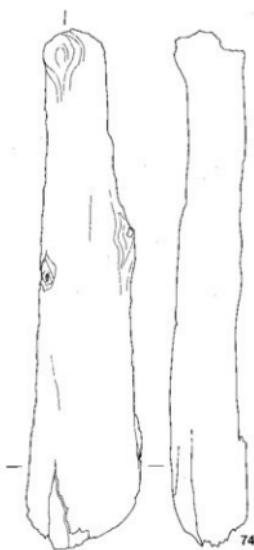
B 4・5調査区で確認したが、北辺が調査区外に延びるため全体を明確にできない。現状では南北棟



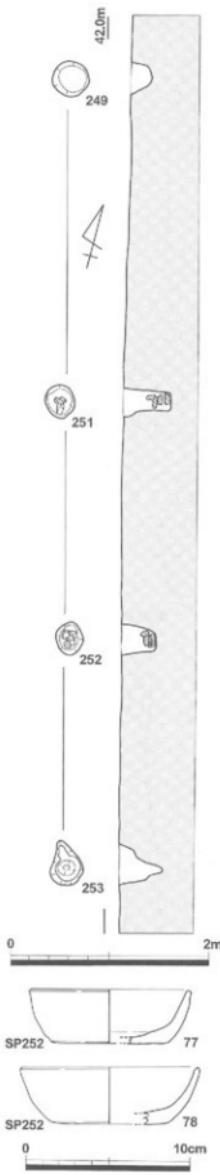
第25図 SB14平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3)



第26図 SB15平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3, 1/2)



第27図 挖立柱建物出土遺物実測図 (1/4)



第28図 SA02平・断面図 (1/50)
出土遺物実測図 (1/3)

で2間×3間の矩形建物である。北辺を除く三辺に庇が確認できる。SP958に対するSP959のような小柱穴が3穴確認される。また、SP956からSP961のラインが中軸線に並行して確認されるため、このラインにも何らかの意味を見出すことができる。図面ではSP967を主柱穴として考えているが、隣接するSP968がより主柱穴としてふさわしい。しかし、これを採用した場合、中軸線のぎれと先の中軸線に並行する柱穴列の取り扱いに問題ができる。柱穴の土層序から、たびたび触れているように皿状の堆積が認められ、この状態は柱材の抜き取り後の堆積を示すものと考えている。庇も、南西隅では、SP940・944のようなコーナー用の補助柱があるのにに対して、南東隅ではSP947のみで対応するなど、差が認められる。このことは、柱材の太さに起因するものか、屋根の構造に起因するものかは判断できない。

第27図76は、SP953に残存していた柱材である。材質は、スギである。

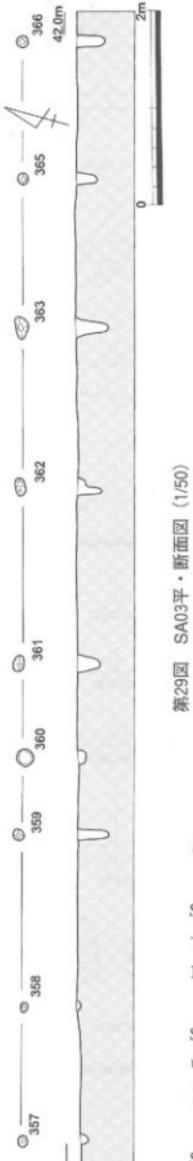
柱穴からは、64～72の資料が出土している。64・65は上師器杯で、両者とも板目压痕が見られ、65はヘラ切り成形である。66は東播系こね鉢で、II-⑦～⑨期に比定される。67～69は鉄器で、刀子及び針と考えている。70は上師器小皿で底面はヘラ切り、71は土師器杯で小型化している。72は、この遺跡の弥生時代に伴う円窓、投弾としての使用を考える。年代は70・71の形態から14世紀前半代と考えている。

2 檻跡

SA02 (第28図)

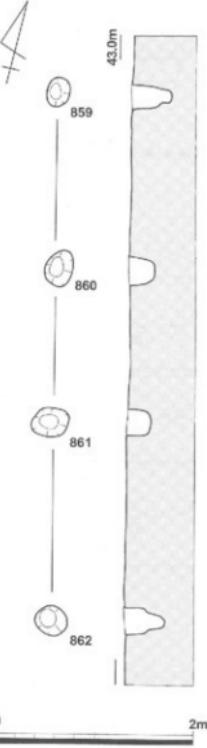
B2調査区で確認した。SB03・06の中間に設置されており、4穴が確認されている。断面形状からは、先に触れたSB09の残存柱材を設置するための柱穴底が平坦になるものや、先細りする形状が観察されるものなど、多様な柱材が用いられている。これは、掘立柱建物跡にも共通する事項である。また、庇や檻列の柱穴には、掘立柱建物跡と同様の柱穴を持つものと、小柱穴で構成されるものがあり、おのずと庇や檻の構造に差異があることが確認できる。

出土遺物は77・78の2点で、いずれもSP252から出土している。77・78とも土師器杯で、摩滅のため底面の状態は明らかでない。他の資料同様、底径・口径の差が少なく、深い点から見て同時期と考えられ、13世紀後半代に位置づけうる。



第29図 SA03平・断面図 (1/50)

第30図 SA05平・断面図 (1/50)



SA03 (第29図)

B 2 調査区で確認し、SB09の北辺に並行する形で検出されている。柱間などSB09と対称とはならないことから、柵列と判断した。ただし、SB09と並行することから同一年代に位置づけて問題なかろう。柱穴の形状は、先に述べた小柱穴にあたり、垣根程度の柵と考えている。出土遺物はない。

SA05 (第30図)

A 4・5 調査区で確認した。SB1 3の西側で検出されているが、方向や位置から、調査区内で検出された掘立柱建物跡に伴うものではない。現状では 4 穴確認されており、掘立柱建物跡と同様の柱穴を有する。出土遺物はない。

3 柱穴跡 (第31・32図)

ここでは、個々の柱穴は取り上げないが、柱穴から出土している遺物を紹介する。

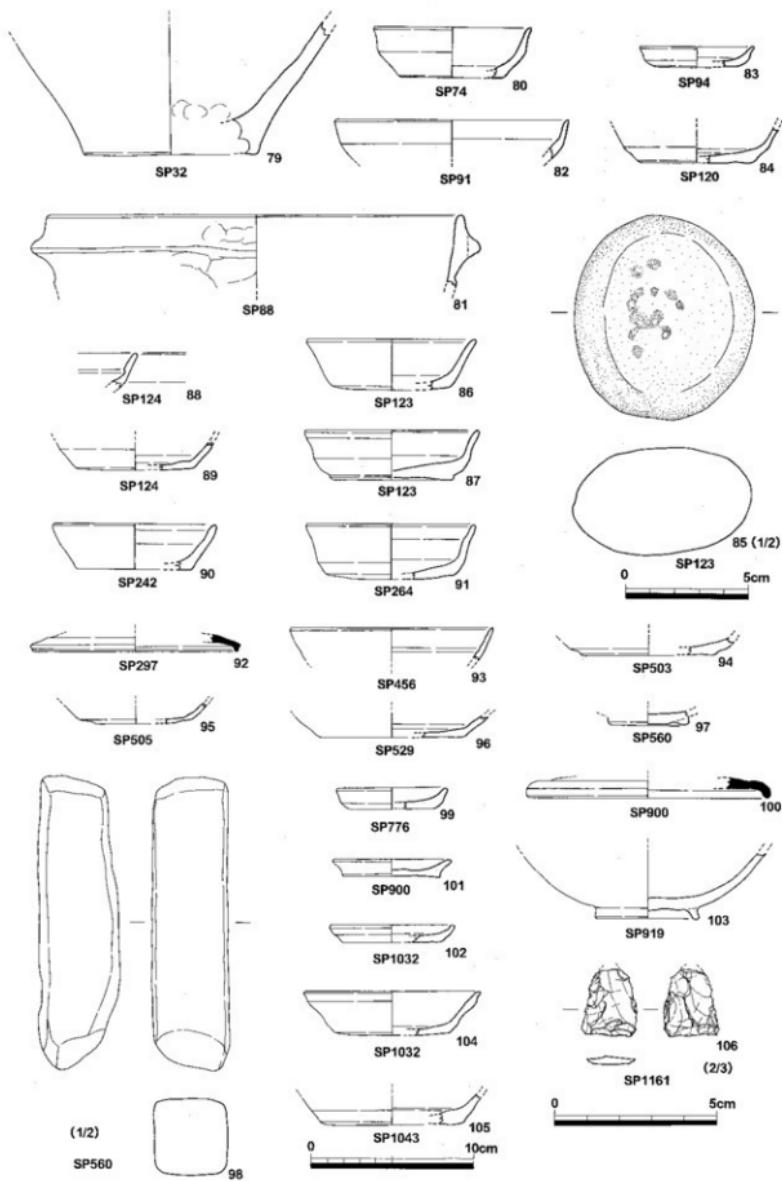
SP32 B 2 調査区で確認した。79は、平底の弥生土器壺底部片である。破片の状態からは、柱穴に伴うもの

とは認識しておらず、柱穴の年代は不詳である。

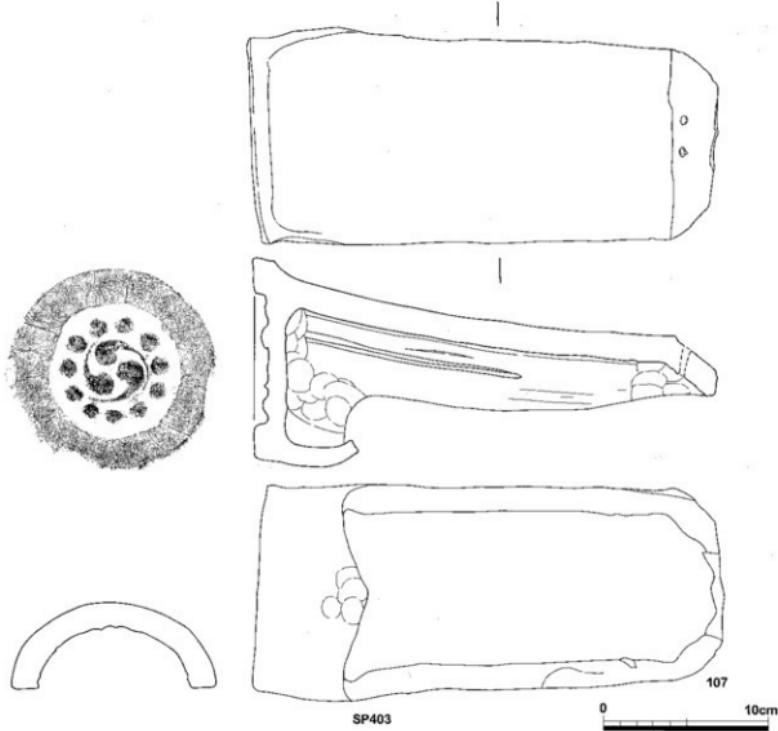
SP74 B 2 調査区で確認した。80は、土師器杯で、体部中央で明瞭に屈曲するタイプである。掘立柱建物跡からも出土しており、同様にⅡ-⑦～⑨期、13世紀代と考えている。

SP88 C 2 調査区で確認した。81は、土師質土釜の口縁部で、短い鈸に短い口縁部が付く。短い鈸など後出する要素が多いが、口縁部が直立するなどⅡ-⑦～⑨期の様相も見られるため、13世紀代としておく。

SP91 C 2 調査区で確認した。82は、土師器杯で、80同様、体部中央で屈



第31図 柱穴出土遺物実測図① (1/3)



第32図 柱穴出土遺物実測図② (1/3)

曲するタイプである。13世紀代と考えておく。

SP94 C 2 調査区で確認した。83は、土師器小皿で、82同様に体部中央で屈曲する。底面の成形が不明のため、年代は不詳である。

SP120 B 2 調査区で確認した。84は、土師器杯で、底面はヘラ切りである。年代は不詳である。

SP123 B 2 調査区で確認した。85は、砂岩製の円碟で、特に研磨痕などが見られないことから投弾と考えている資料で、弥生時代の所産であると考えている。86は、土師器杯で小型化している体部にあまり傾かない口縁部を有する点から、底面が磨滅のため観察不能であるが、II-⑧期前後を考えている。87も土師器杯で、底面には糸切りが観察できる。時期は不詳であるが、86同様の年代を考えても矛盾はない。86・87の資料から、推定も多分に含むが13世紀代としておく。

SP124 B 2 調査区で確認した。88は龍泉窯系青磁皿の口縁部片である。体部中位で屈曲し、口縁部は直線的に延び、端部は丸く終わる。12世紀中頃～末の標識資料と位置づけられている。89は土師器杯で、底面にはヘラ切りが観察される。体部中央に屈曲が見られ、80同様の時期と考えられる。88・89の資料から、13世紀代と考えて差し支えない。

SP242 B 2 調査区で確認した。90は、土師器杯で、底面には板目状圧痕が見られる。小型化が顕著で、多く見られる13世紀代の資料よりも後出するとも考えられる。

SP264 B 2 調査区で確認した。91は、土師器杯で、底面は板ナデ調整が施されている。口縁部があまり外傾しないもので、Ⅱ-⑦期頃、13世紀代と考えておく。

SP297 B 2 調査区で確認した。92は、須恵器杯蓋で、径が小さいことから平城宮土器IV～VII、8世紀第4四半期～9世紀第1四半期頃と考えるが、破片が小さいため推測でしかない。

SP403 B 2 調査区で確認した。107は、瓦当に巴文を持つ軒丸瓦である。近世以降の所産と考えられる。

SP456 B 2 調査区で確認した。93は、土師器杯の口縁部である。時期は不詳である。

SP503 B 2 調査区で確認した。94は、土師器杯の底部で、板目状圧痕が見られる。時期は不詳である。

SP505 B 2 調査区で確認した。95は、土師器杯の底部で、底面は磨滅のため観察不能、時期は不詳である。

SP529 C 2 調査区で確認した。96は、土師器杯の底部で、底面はヘラ切りである。時期は不詳である。

SP560 B 2 調査区で確認した。97は、土師器碗の底部で、低い貼り付け高台を持つ。年代は不詳である。98は、磨製柱状片刃石斧に近似する形態を持つが、明瞭な刃部をもたず、性格は不明である。

SP776 B 4 調査区で確認した。99は、底面に糸切りが確認できる土師器小皿である。

SP900 B 5 調査区で確認した。100は、須恵器杯蓋で、92同様の時期が想定されるが、口縁端部が丸みを帯び、より後出する觀がある。101は、土師器小皿で、ヘラ切り底部から外反する短い口縁部を持つ。時期は14世紀代と考えられる。

SP919 B 5 調査区で確認した。103は、土師器碗で、口縁部を欠損している。底面にはヘラ切り痕が見られるが、体部外面は磨滅のため調整が不明である。高台部のみに注目すれば、低くなつておりⅡ-⑦～⑨期、13世紀代の所産と考えて差し支えない。

SP1032 C 5 調査区で確認した。102は、土師器小皿で底面の成形は不明である。104は、土師器杯で底面は不明、体部内外面はナデ調整である。年代は不詳である。

SP1043 C 5 調査区で確認した。105は、土師器杯で、内外面とも摩滅しており調整は不明。年代も不詳である。

SP1161 D 6 調査区で確認した。106は、平基式の石鎚で先端を欠損している。弥生時代の所産である。

以上のように、この遺跡が営まれていた弥生時代・古代～中世・近世の遺物が断続的に出土している。弥生時代の遺物については、単独で良好な出土資料が見られないことから混入と考えて差し支えない。また、近世資料についても数量的に少なく、近世段階では集落等の遺跡としては他の遺構から見ても考えがたい。やはり主体は古代～中世であるが、柱穴の数量に比して掘立柱建物跡等の遺構が復元されにくく、建物の建て替えや形式的な掘立柱建物跡像では解決できない状況がある。中世資料の年代についても、片桐編年に当てはまらない形態の資料が多くあり、今後の課題となる。

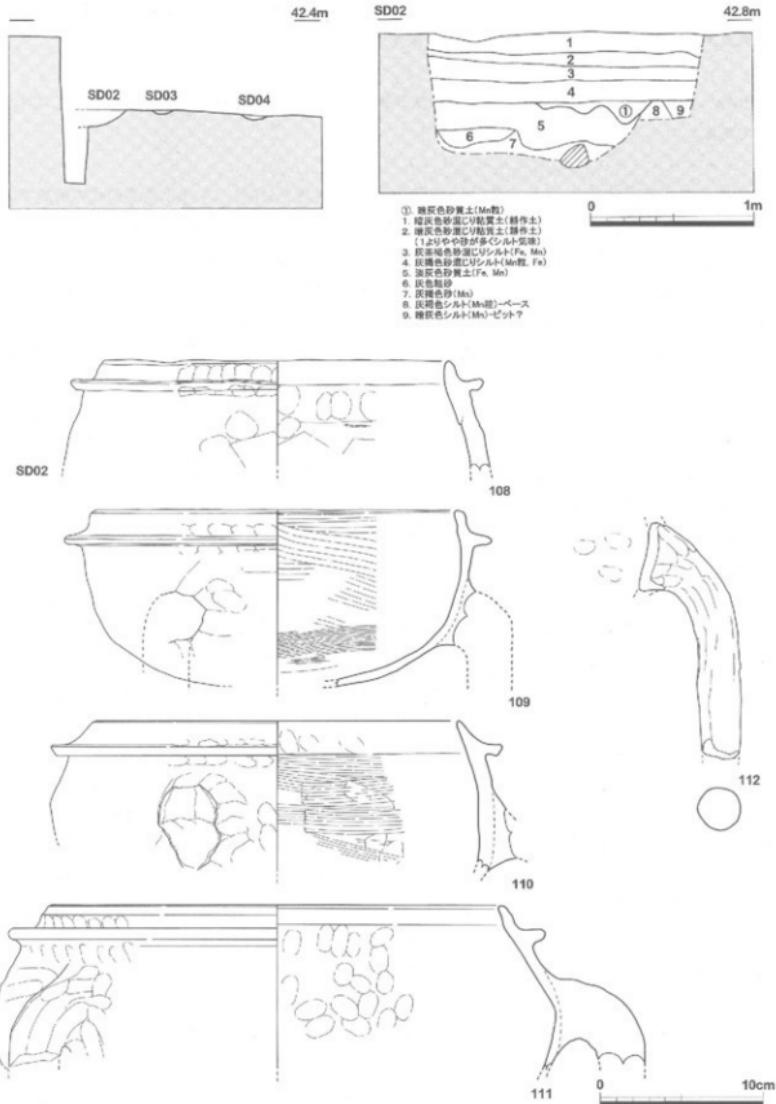
4 溝状遺構

この項目では、遺物が出土している溝状遺構を中心に、主な遺構について記述する。

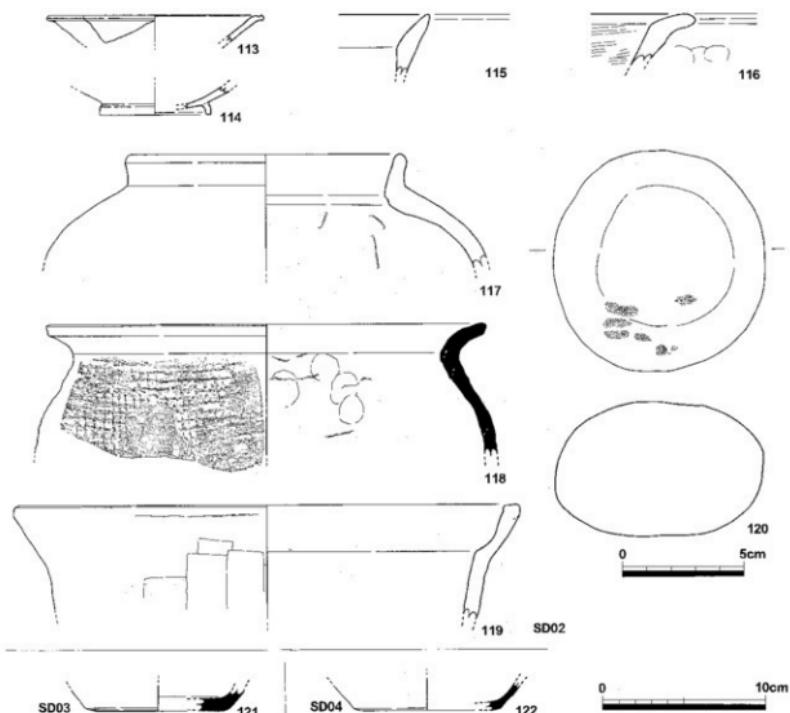
SD02・03・04（第33・34図）

SD02・03・04は、A 1～A 6 調査区の西端を南北に延びる溝で、交差することができないため、同時期に機能していたと考えられる。埋土は各1層で、埋没状況は不明である。

108～120は、SD02出土資料である。108は、土師質土釜の体部で、内外面に指頭圧痕が顕著である。内面下部は板ナデ調整が施されている。体部上半の出土であるが、他の資料との関係から土釜であると考えている。109も土師質土釜である。脚部は欠損している。口縁端部にやや丸みを持った面を持ち、外面は丁寧なナデが行われている。内面はハケ調整である。110も土師質土釜で、体部下半を欠損している。口縁部は、やや内傾し端部は細く終わる。鍔は水平方向に延び、端部は面を持つ。外面は指頭圧痕、内面はハケ調整が見られる。111も土師質土釜で、体部中央で屈曲するタイプである。口縁部は内傾し、端部は丸く終わる。鍔は水平方向に短く延び、端部は丸く終わる。口縁端部内面は、強い横ナデにより凹面になる。体部内外面とも指頭圧痕及び指ナデが顕著である。112は土師質土釜の脚である。113は肥前系陶器溝縁皿で、1640～1650年代と考えられる。114は土師器鉢である。内面は摩滅、外面はナデ調整である。115・116は土師質土鍋の口縁部で、115は直線的に外傾し、端部は細く終わる。116は口縁端部で水平方向に屈曲し、端部は丸く終わる。内面調整はハケである。117は土師器壺で、球形の体部に短く直立する口縁部を有する。体部内面は板ナデ、他は横ナデ調整である。118は須恵器壺で、砲弾形の体部から外反する口縁部を有し、端部には面を持つ。外面には格子状タタキが見られる。119は土師質土鍋の口縁部で、やや外傾しながらのびる体部から、やや内湾ぎみに上方にのびる口縁部を有する。口縁部内面は、やや凹面に仕上げられており、体部との境に明瞭な段を形成する。体部外面は板ナデ調整である。120は砂岩製の円窓で、投弾と考えている資料である。以上、SD02から出土した資料を概観したが、土師質土釜については、鍔が未だ形骸化しておらず、111を除いて体部に明瞭な屈曲が認められないことなどから、これらの資料を一括として捉えた場合、II-⑦～III-③期の範疇に含まれると考えられ、幅はあるが13～14世紀の所産と理解できる。118の資料からは、13世紀の範囲で考える



第33図 SD02～04断面図 (1/30)、出土遺物実測図① (1/3)



第34図 SD02～04 出土遺物実測図② (1/3)

ことも可能である。しかし、113は明らかに後出する資料と理解でき、混入と考えうる。

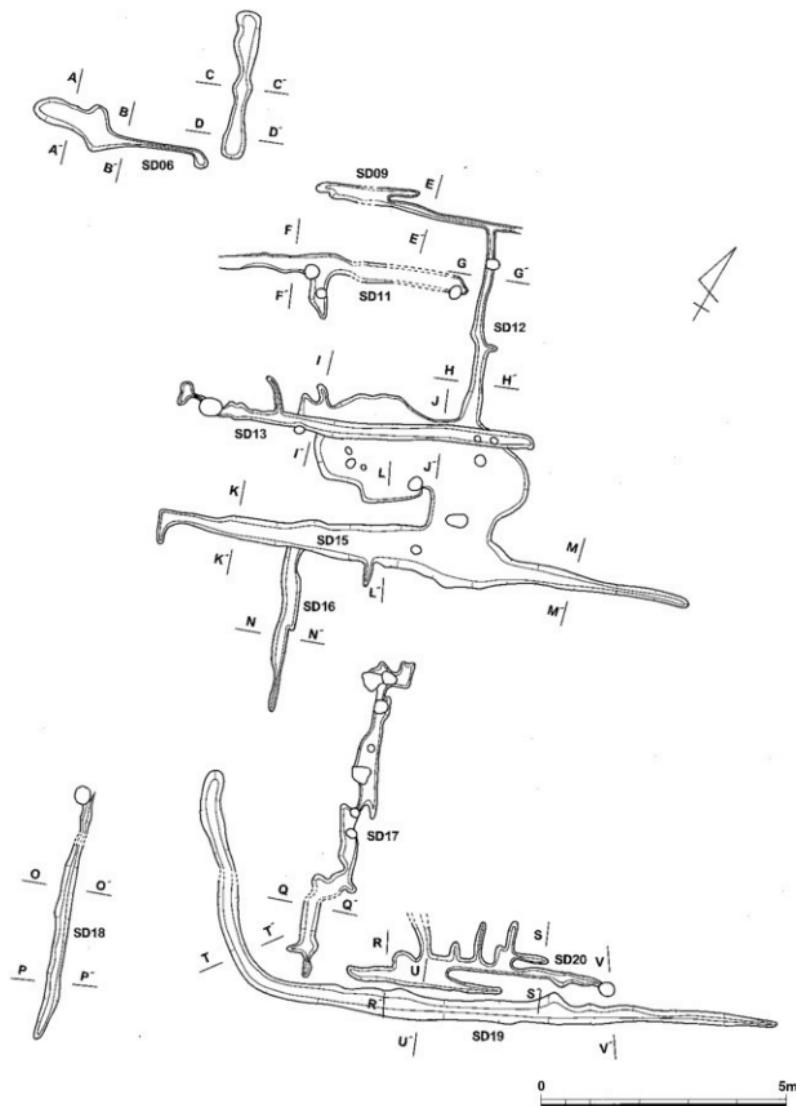
121は、SD03出土資料である。須恵器杯の底部で、ヘラ切りが認められる。

122は、SD04出土資料である。これも須恵器杯で、摩滅した小破片である。

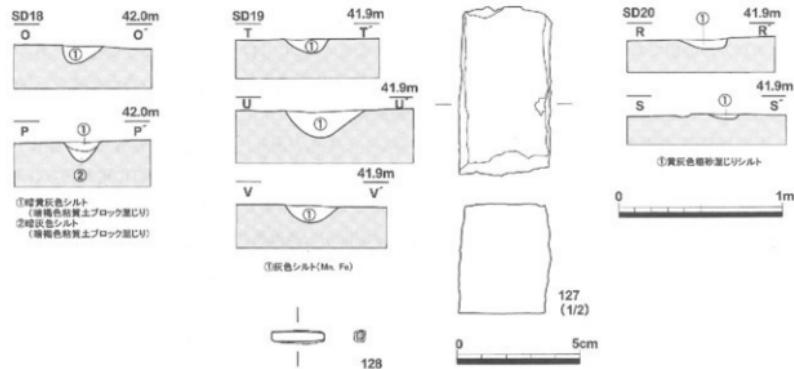
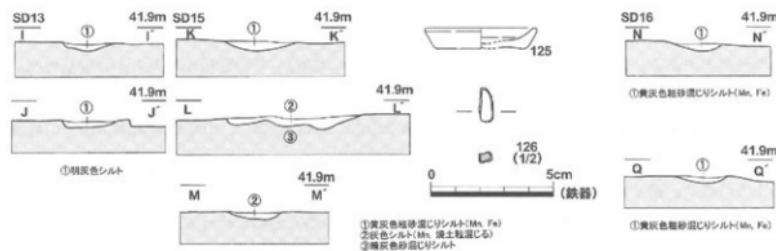
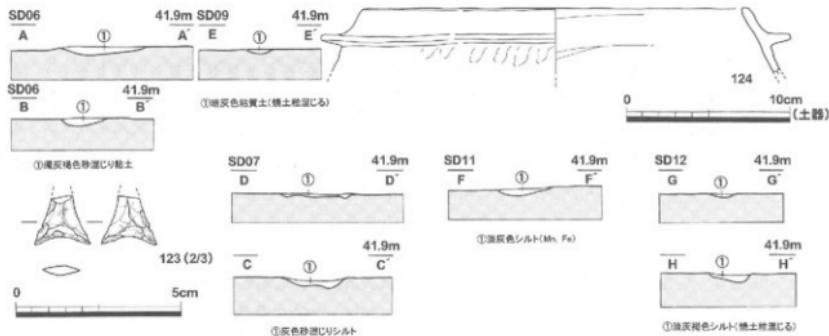
以上の資料から、SD02・03・04が同時期に機能していたと考えた場合、埋没年代は13世紀の範囲に収まると考えられる。

SD06・07・09・11～13・15～20 (第35・36図)

B 2・3、C 2・3 調査区、掘立柱建物跡群に重複する位置で検出されている。SD09・12・15は、一連の溝状遺構である。また、SD16も同様であると考えられる。これに重複する形でSD13が検出されており、検出状況から先の溝状遺構群に後出する。他の溝状遺構は切りあい関係が認められないため、先後関係は明確ではない。全体の配置からは、ほぼ同一時期に機能していた可能性が高い。堆積土もほぼ同様で、複数層になっているのはSD18のみである。相対的に長期間での埋没ではなく、短時間での



第35図 SD06・07・09・11~13・15~20平面図 (1/100)



第36図 SD06・07・09・11~13・15~20断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/3)

埋没を想定することができる。

出土遺物は、123～128である。123はSD06出土の凹基式石鐵で先端部が欠損している。剥離は難である。弥生時代の石鐵と考えられる。124はSD09出土の土師質土釜で、口縁部が長く内傾する。II-⑦～⑨期、13世紀に位置づけられる。125・126はSD15出土の土師質小皿と不明鉄器片である。不明鉄器は小片のため製品を特定することができないが針ではないかと考えている。小皿は、底面がヘラ切り成形である。127・128はSD19出土の棒状石と不明鉄器片である。棒状石は四角柱の形状を持ち、一見砥石と考えられたが、研磨面が確認できず、用途は不明である。128は、先の126同様針の可能性が高い。

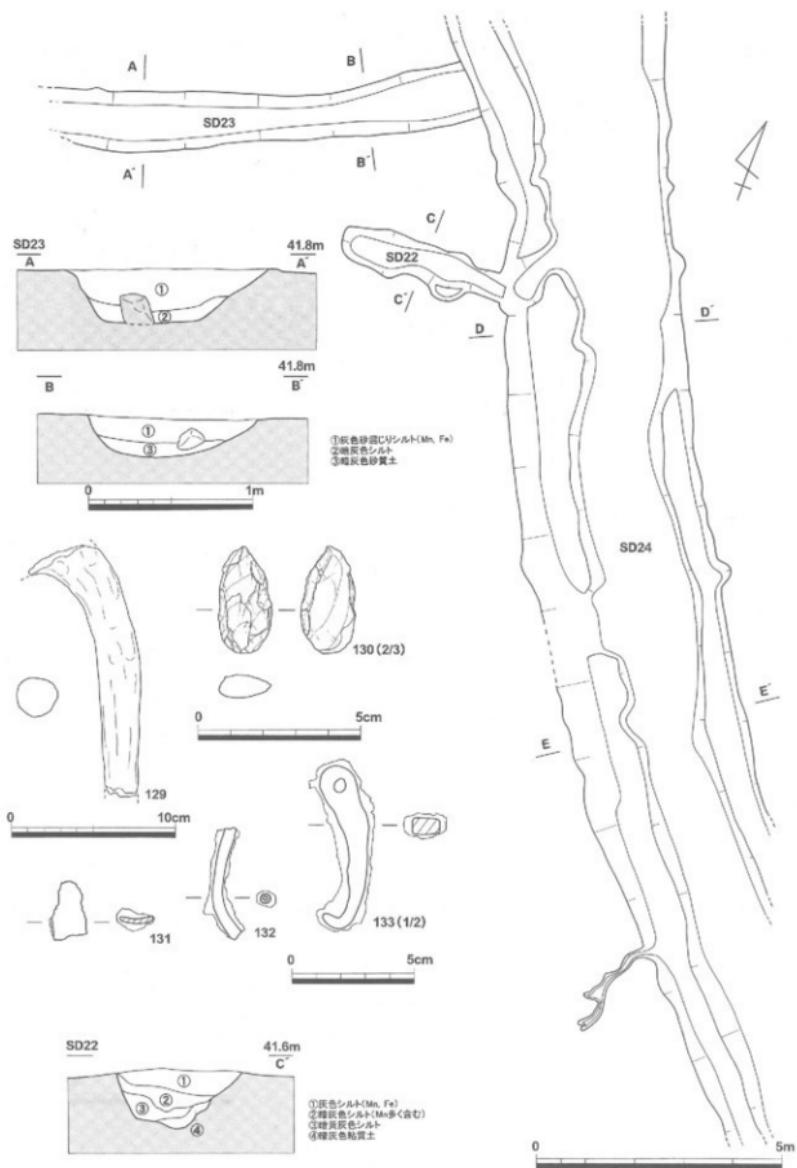
SD22～24（第37～40図）

SD24は、C 2・3 調査区を南北に延びる広めの溝状遺構で、北端は調査区外に延びるが、位置関係から南はSD30～32につながると想定できる。SD22・23は、SD24に關係する溝状遺構である。ただし、SD23は切りあいを持つ溝状遺構の可能性も若干残される。SD22・23の堆積状況は、徐々に埋没する傾向を示す。SD24も同様の傾向を示し、最下層に砂がたまっていることから、常に一定の水量があったことがわかる。この溝状遺構が前述した掘立柱建物跡群の東限の可能性が高い。出土遺物は129～163で、この内129～133がSD23、134～163がSD24の出土である。

129は、土師質土釜の脚で、先端が欠損している。130は石鐵で、未製品の可能性もある。131～133は不明鉄製品である。132は棒状を呈し、針の可能性もある。133は、その形状から何らかの製品の部品であると考えうるが、製品の特定はできなかった。

134～137は土師質土釜・土鍋の口縁部及び体部である。134は土釜で、やや外傾気味に開く口縁部を有する。口縁部に対して鈎はやや短く、後出する要素かもしれない。135は土鍋で、体部から直線的に外上方に延び、細くなつて終わる。136は弥生時代中期後半の鉢の口縁部で、混入と考えられる。137は土釜であるが、浅い体部に短い口縁部や鈎を持ち、端部は両者とも面を持って終わる。他の資料と比べて分厚い。年代は不詳である。138～141は土師器円盤状高台小皿で、138が糸切り、140・141がヘラ切りの底面を持つ。141はやや大形で、焼成前穿孔が見られ、他の器種の可能性もある。片桐編年では、II-⑥～⑨期、12世紀後半～13世紀に位置づけられる。142～145は土師器杯である。142は糸切り、145は糸切りの底面である。底部径に対して口径があまり大きくなない。147・148・152は土師器碗である。148は高台が低い。152は、深い体部を持つ。146は須恵器系土器碗である。短く低い高台を持つ。149は陶器高台で、時期等不詳。150は須恵器高台で、時期等不詳。

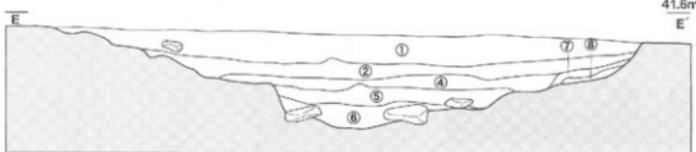
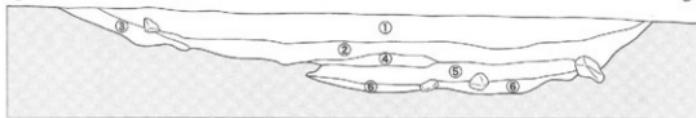
151は外面に鏽斑が見られ、高台は角高台である。このことから、龍泉窯系青磁碗II-b類に分類され、13世紀前後～前半の年代が与えられている。153は、十瓶山窯壺底部で、外面に釉が見られる。底面はヘラ切りである。154は、須恵器の底部であるが、器種は不明である。底面は糸切りである。155は十瓶山窯こね鉢で、底面はヘラ切りである。体部は底部から直線的にのびることからII-⑦～⑨期、13世紀代と考えて大過ない。156は瓦質の片口こね鉢で、体部下半はヘラ削り、上半は板ナデが顕著である。内面下部はヘラ削り、上部はナデ調整である。口縁端部に明瞭な面を持たないこと、体部が丸みを持つことから、13世紀代と考えている。157・158は土師質土釜の脚である。159はサヌカイト製のスクレイパーもしくは打製石庖丁の未製品と考えられる。石庖丁を想定した場合、やや小形である。160～163は砥石である。石材の長辺方向に研磨痕が認められる。また、写真図版36に掲載した「開元通寶」も出土している。



第37図 SD22～24平面図 (1/100)・SD22・23断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/3)

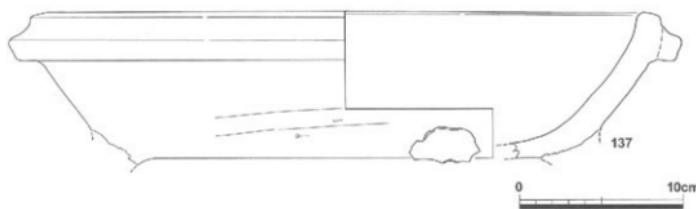
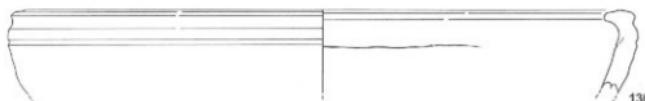
SD24
D

41.6m
D'

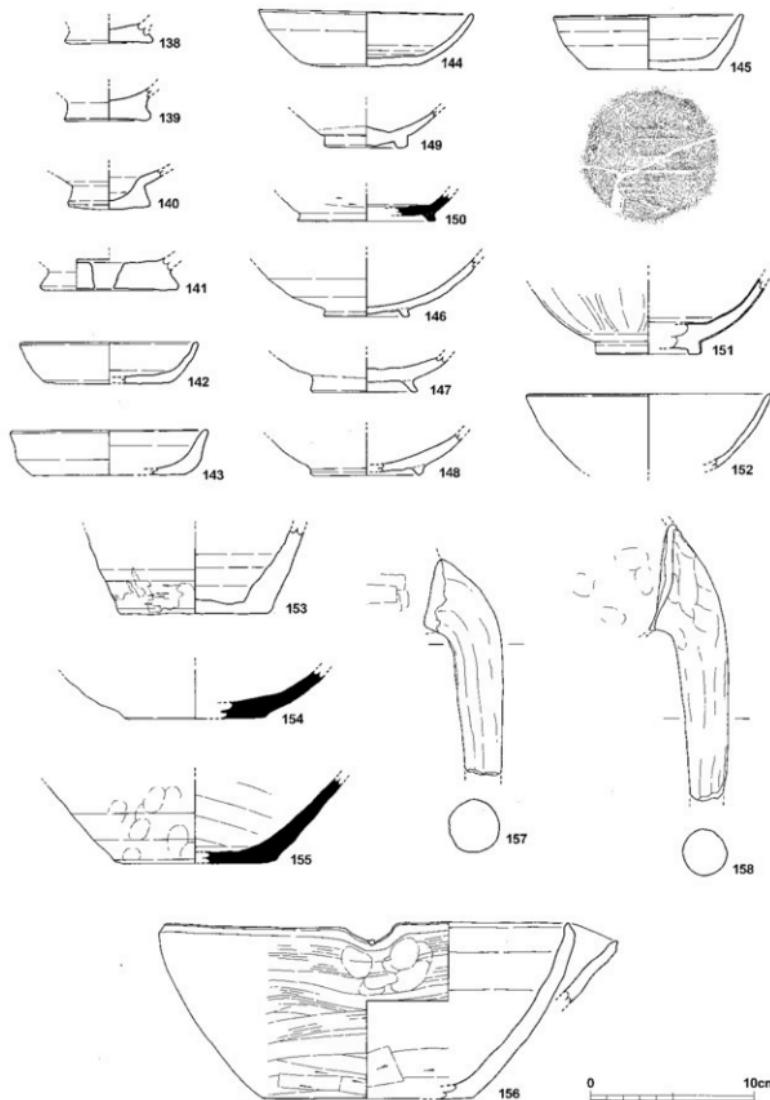


- (1) 黒色シルト(Mn, Fe)
(2) 黒色シルト
(3) (Mn, Fe) 少ない上位層(粘性を持つ)
(4) 灰褐色シルト(中位層質実質)
(5) 灰褐色膠質土(Mn, Fe)
(6) 灰褐色砂
(7) 灰褐色泥
(8) 黑色泥質土
(9) 灰褐色泥質土(Mn, Fe)

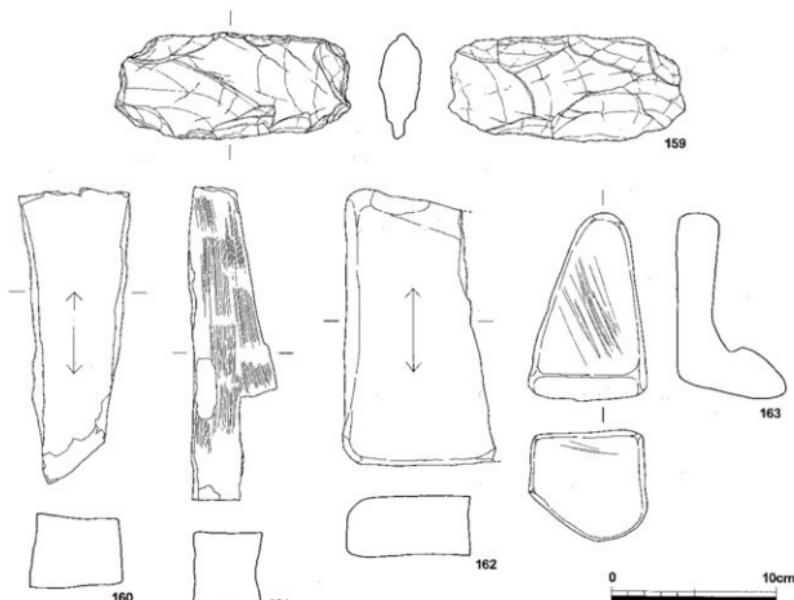
0 1m



第38図 SD24断面図 (1/30)、出土遺物実測図① (1/3)



第39図 SD24出土遺物実測図② (1/3)



第40図 SD24出土遺物実測図③ (1/3)

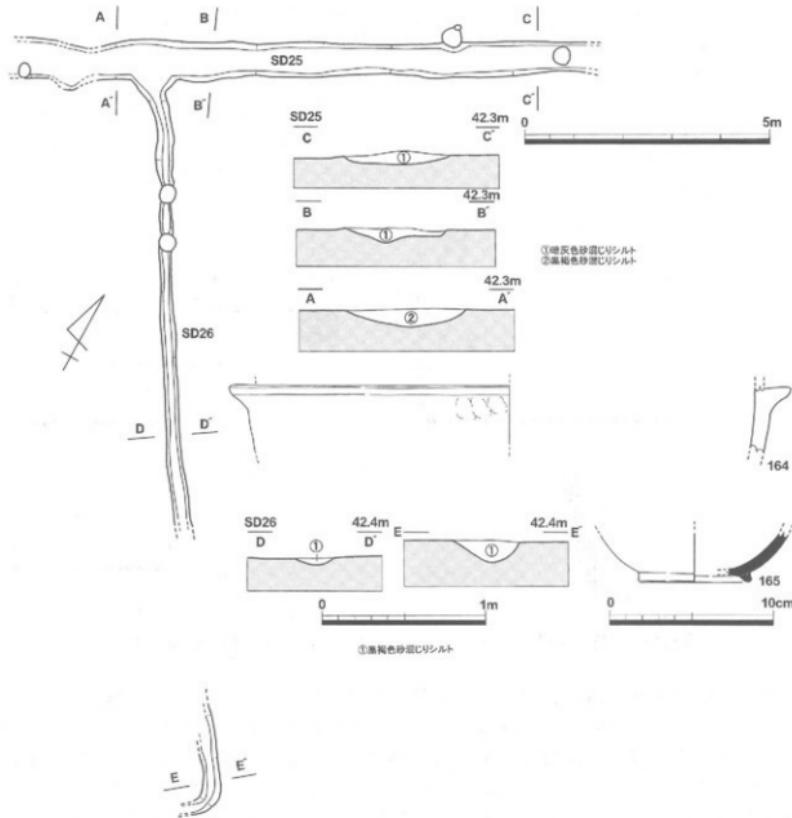
以上の資料から、混入資料はあるもののSD24は13世紀前半代の埋没と考えて差し支えない。SD23はこれに先行する溝状遺構ではあるが、出土遺物からは明確にできない。

SD25・26 (第41図)

A 4、B 4・5調査区に位置し、東・西・南側は調査区外で全体の形状は不明である。東西に延びるSD25が幅広く、これから直角に分岐する形でSD26が南に延びる。南端ではほぼ直角で西側に折れる。埋土は砂混じりの暗色系で、一定の水量で流水があった後、ヘドロ状の堆積が重なって形成されたものと考えられる。埋土中からは164・165が出土している。164は、SD25から出土した土師質土釜で、口縁部及び体部の大半を欠損している。165は、SD26出土の須恵器碗で、低い高台を持つ。12世紀後半代の所産。

SD28・29 (第42図)

C 4・C 5調査区で確認した。SD28はSB15の東側に存在し、SB15と同一時期の所産である可能性が高い。SD28は南北に延びる溝状遺構で、北端は調査区外に延びる。SD29は同一方向に延びるもの短く、周辺部で確認された所謂「鈎溝」の可能性が高いが、遺物が出土しているため掲載した。两者とも単層の埋土で、自然堆積と考えられる。出土遺物は166・167で、166は須恵器壺の体部片と考えられ、外面に格子状タキ、内面にハケ目が認められる。167は土師器碗の体部と考えられる。2点とも年代は不詳である。

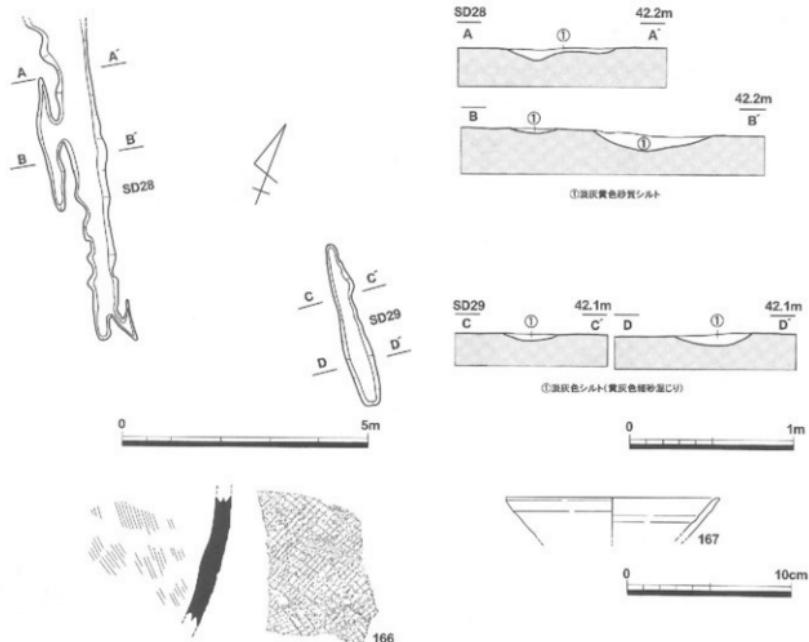


第41図 SD25・26平面図(1/100)・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/3)

SD30～32(第43～46図)

D 4・5調査区で確認した。SD30～31は、先に述べたように、SD24に連続すると考えられる溝状構造で、SD31が本流、SD30はこれから分かれた溝状構造と考えられる。SD31がもっともしっかりしており、逆台形状の掘り方を持つ。埋土から見た埋没状況は、ヘドロ状の堆積が認められず、主として砂を中心とした堆積土の状況から、一定の水量での流れが推測されるもので、最終的には流水に伴う短期間での埋没と考えられる。こうした状況が、この集落の廃絶の原因とも考えられる。これに対して、SD30は徐々に埋没したと考えられ、SD30との先後関係や役割の差など不明な点が多い。出土遺物から時代差を明確にすることはできない。SD32は、SD31から直角に分岐する溝状構造であり、後述する資料からはSD31に先行するものと考えられる。埋没状況は不明である。

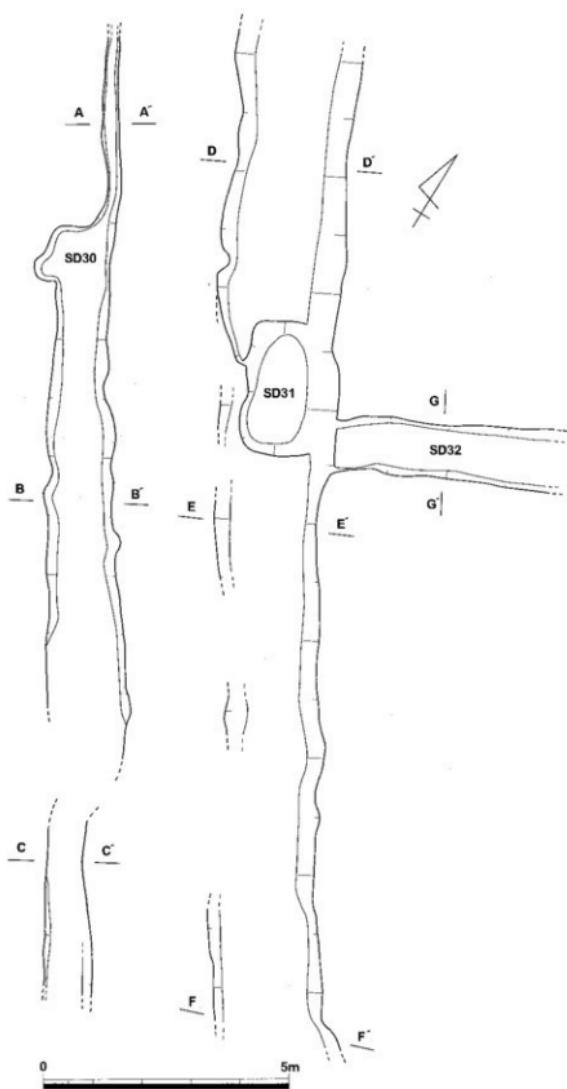
168～184はSD31の、185・186はSD30、187～191はSD32の出土遺物である



第42図 SD28・29平面図 (1/100)・断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/3)

168は、亀山焼壺の体部片と考えられ、外面に格子状のタキ目を有する。169は土師器椀の高台部で、全体に摩滅している。170は肥前系磁器皿（青磁）で、底部が無釉、蛇の目釉剥ぎの可能性がある。17世紀後半の波佐見窯系の上器である。171は土師器壺の口縁部で、球形の体部からやや聞く短い口縁部がのびる。内外面とも摩減している。172・173は土師質すり鉢で、172は4から5条の条線を持ち、口縁端部は内傾して丸く終わる。173は7条程度の条線を持つ底部である。172の形態からⅢ-①～③期、14世纪代の年代が与えられる。174は、土師質土釜の体部である。体部から口縁部は直線的に延び、口縁部も比較的長いが、鋤が形骸化している。すり鉢と同様の年代と考えられる。175は内側に釣手を持つ土師質土鍋である。口縁端部は内傾し、外側に面を持つ。年代は土釜同様である。176は土師質土釜の脚である。177は土師質土釜の体部で、底部・脚を欠損している。口縁部は短く内傾し、形骸化した鋤を持つ。Ⅲ-①～③期、14世纪代の年代が与えられる。178は、175同様の土師質土鍋で、底部付近にヘラ削り、内面にハケ目調整が見られる。形態から前者同様の年代が与えられる。179・180は土師質土鍋である。179は浅い体部がやや外湾気味に延びて口縁端部に至る。180は浅く丸みを帯びた体部から外上方に屈曲して口縁部を形成する。2点とも内面は板ナデ調整である。181・182は不明鉄製品である。181は断面が四角形を呈する棒状で、両端が欠損している。182は筒状のものである。183はサスカイト製の石庵丁片と考えられる。側面の抉りはないが、刃部の調整が認められる。184は砂岩の円礫で、投弾と考えている。

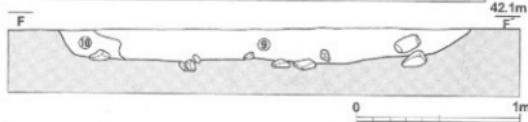
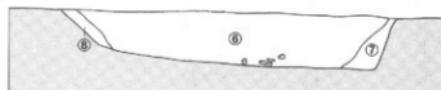
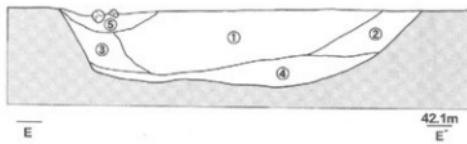
185は、ミニチュアの鉢で、底面をヘラ削りしている。186は土師器小皿で、底面はヘラ切りである。



第43図 SD30～32平面図 (1/100)

SD31
D

42.1m
D'



168



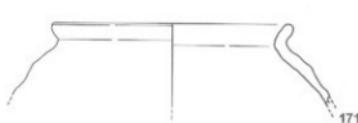
169



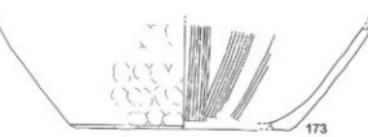
170



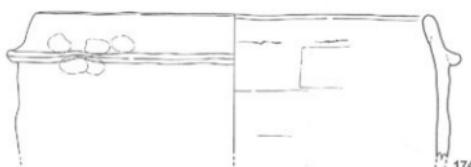
172



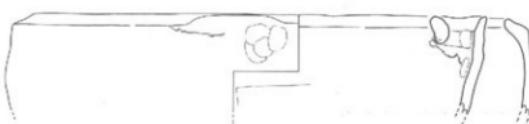
171



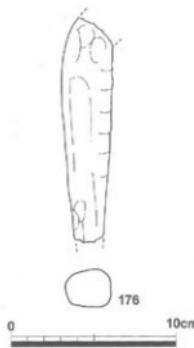
173



174



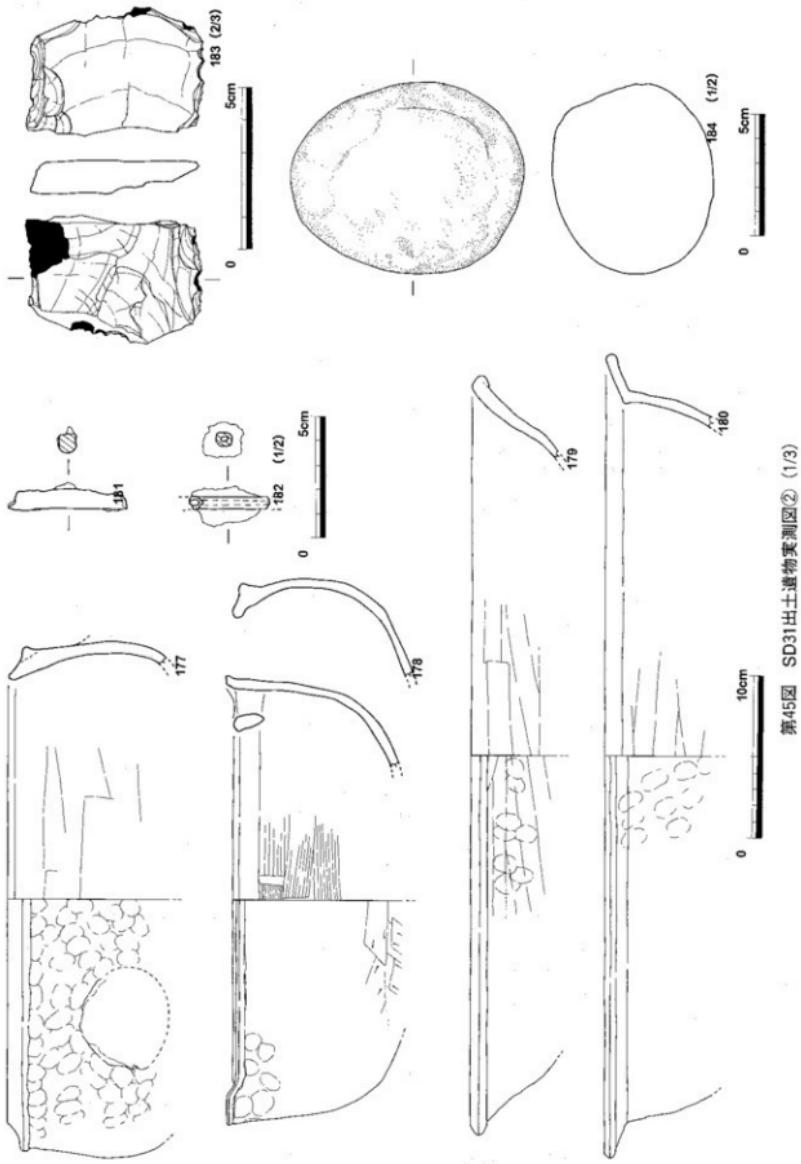
175



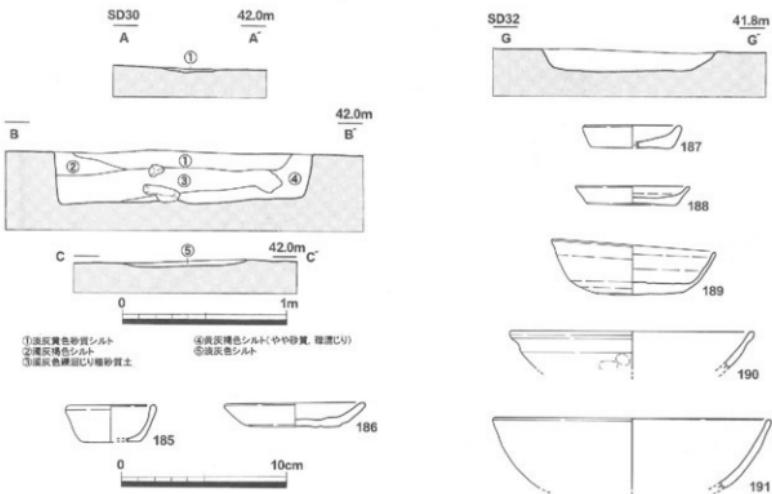
176

10cm

第44図 SD31断面図（1/30）、出土遺物実測図①（1/3）



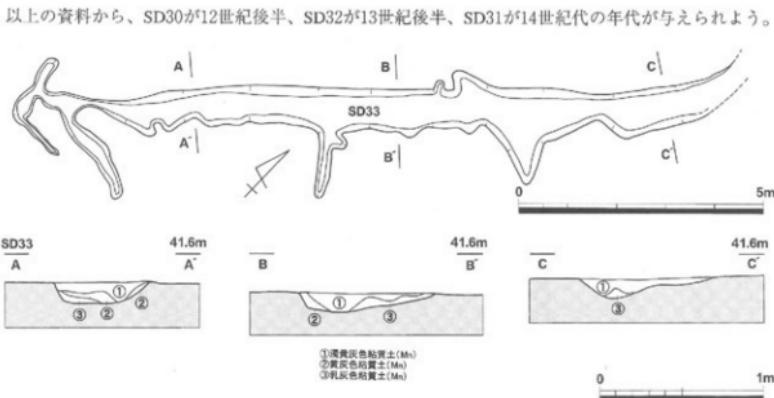
第45図 SD31出土遺物実測図② (1/3)



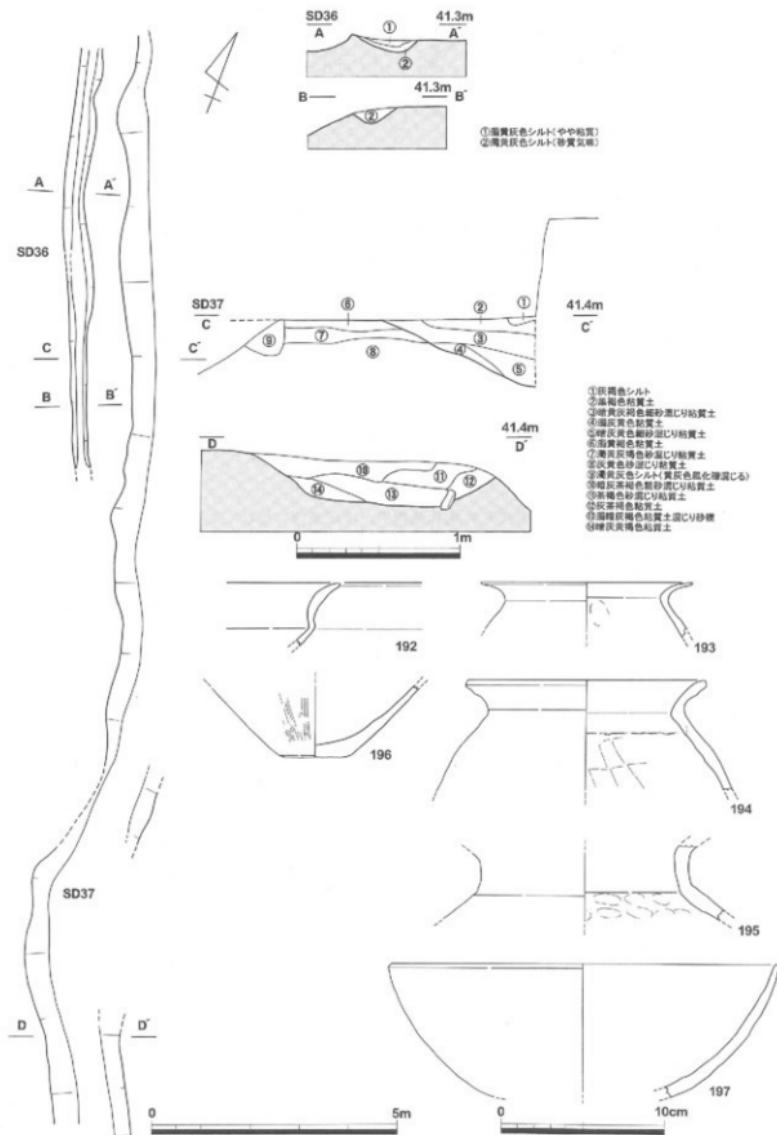
第46図 SD30・32断面図 (1/30)、出土遺物実測図① (1/3)

12世紀後半に遡る可能性がある。

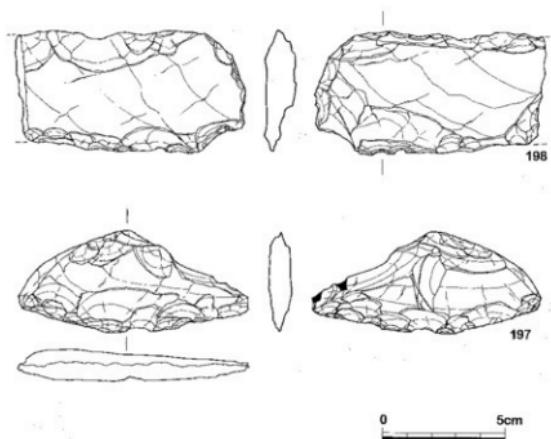
187・188は土師器小皿で、底面はヘラ切り。189は土師器杯で、底面はヘラ切り。190は瓦器椀で、内外面ともナデ調整である。口縁端部下に凹面が認められる。191は土師器椀と考えられるが内外面とも摩滅しており詳細は不明である。個々の資料からは難しいが、他の資料との比較からは、II-⑦～⑨期、13世紀後半に位置づけても問題ない。



第47図 SD33平面図 (1/100)、断面図 (1/30)



第48図 SD36・37平面図 (1/100) 断面図 (1/30)、出土遺物実測図① (1/3)



第49図 SD37出土遺物実測図② (1/2)

SD33 (第47図)

A 2・B 2調査区の第2遺構面で検出した溝状遺構で、ほぼ東西に延びており、東端は検出できなかった。自然埋没と考えられる。遺物の出土はない。この北側には概報段階で不明遺構とした河川のオーバーフロー状態の堆積土が広がり、弥生時代前期の土器などが出土していることから、この溝も同様の時期と考えられ、平面形態から溝としての機能を考えることは難しい。この溝状遺構が弥生時代前期の北限と考えられる。

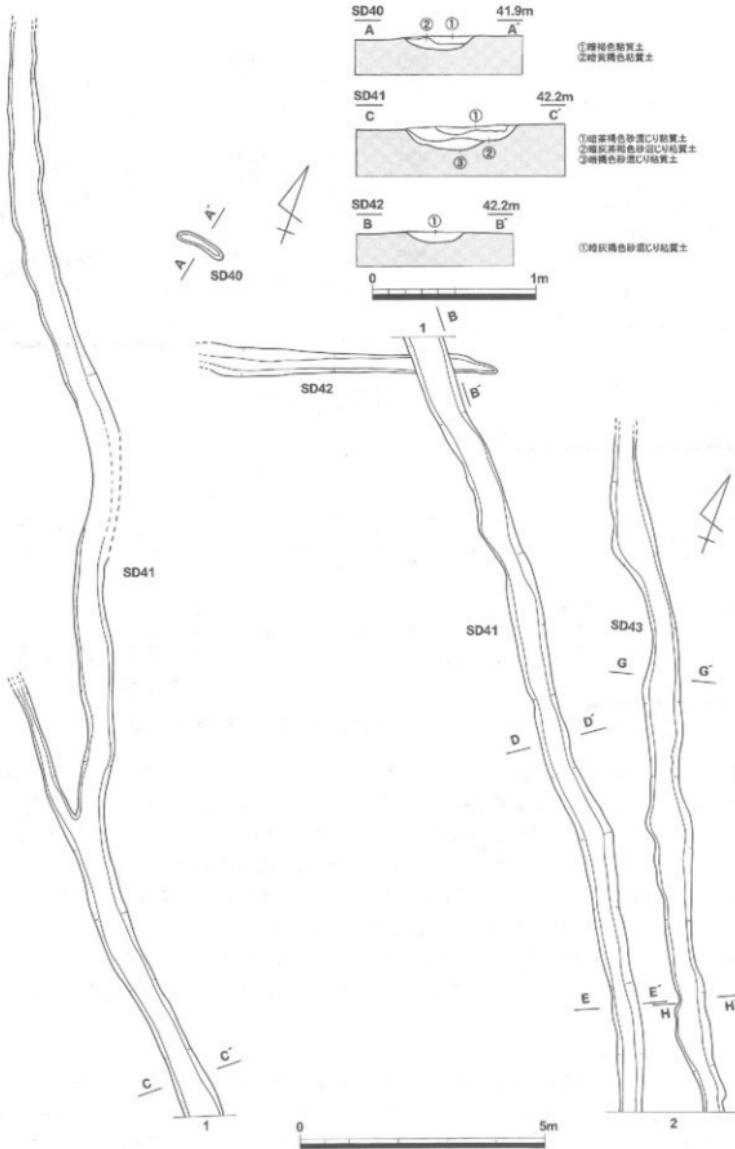
SD36・37 (第48・49図)

C 2調査区で検出され、SD37の東肩の一部、北端・南端は調査範囲外で明確ではない。しかし、位置的には調査区南部で検出しているSD48につながるものと考えられる。SD36は、SD37に平行して延びる溝で、北端はSD37同様調査範囲外に延び、南端は自然消滅している。SD36はその埋土から、自然埋没を考えられ、SD37もほぼ同様の状態で埋没する。位置関係から見て、両者が並存していたことは疑いない。

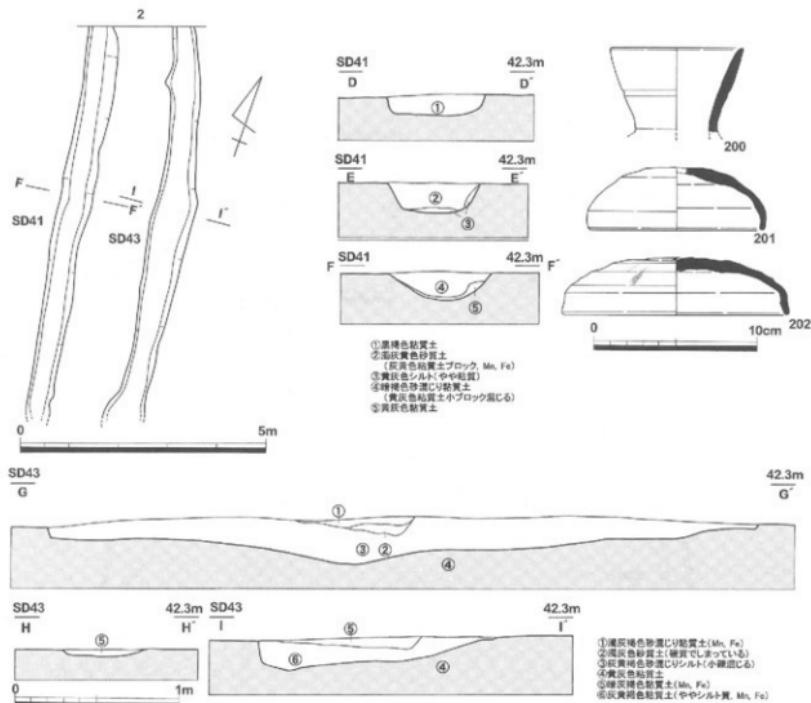
192～199は、SD37出土の遺物である。すべて弥生時代に属する資料である。192は、高杯の口縁部で、短く外反して端部は細くなり終わる。193・194は壺で、193は口縁部が「く」の字で外溝気味に延びて細く終わる。194は「く」の字に直線的に延び、端部には明瞭ではないが面を持つ。内面はヘラナデ、外面はナデ調整が行われている。195は広口壺Bの頸部で、体部内面には指頭圧痕が顯著である。他はナデ調整が行われている。196は壺底部で、やや小さくなりながらも平底を維持しており、外面にはハケ目調整がなされている。197は鉢で、半球状を呈し、内外面ナデ調整である。198・199はサヌカイト製スクレイバーで、丁寧な刃部調整が施されている。土器資料については、摩減が著しく調整が明確ではない。形態からは、192の高杯口縁部と196の壺底部の2点からV-6・7様式と考えておく。

SD40～43 (第50・51図)

A 3・4、B 4・5調査区の西辺を南北に延びる溝状遺構群である。SD40は、この一群の中でやや



第50図 SD40～43平面図（1/100）・断面図（1/30）



第51図 SD41・43平面図(1/100)・断面図(1/30)、出土物実測図(1/3)

性格を異にするもので、鋤溝に該当するものと考えられる。埋土は二層で、自然埋没と考えられる。SD41が最も長く延びる溝で、部分的に逆台形状の断面を有するが、おおむね皿状の断面で、自然埋没と考えられる。SD42は、SD41に先行する溝状遺構で、埋没状況は他とおおむね同様である。SD43は、SD41にはほぼ平行して延びる溝状遺構で、交差しないことから同時期に並存していたと考えられる。

遺物の出土はSD41に限られており、本調査区で他にない古墳時代後期の須恵器が出上している。

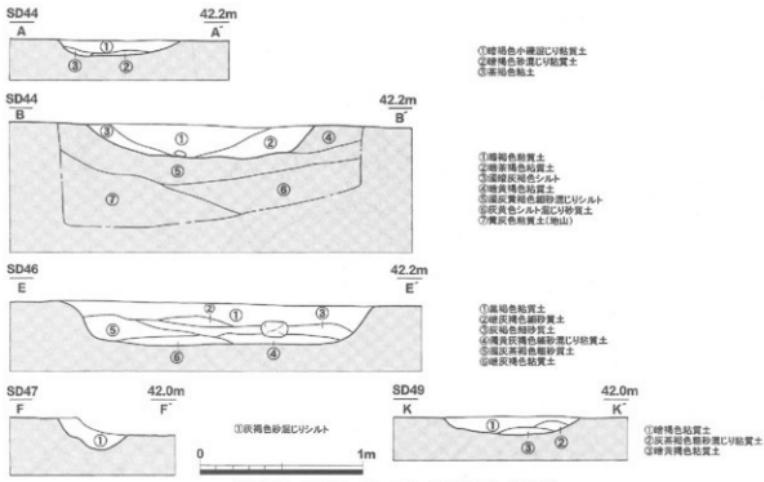
200は、提瓶もしくは平瓶の口縁部で外上方に直線的に延び口縁端部は細く終わる。201-202は杯蓋で、201は天井部から口縁端部まで丸みを持って移行し、202は屈曲して口縁端部に至る。201が小形であるのに対して、202はやや大形であることなどからMT85・TK43併行期、6世紀後半に位置づけられる。

SD44~49 (第52~61図)

C 4・5 調査区で検出された溝状遺構群で、第2遺構面での検出である。切り合い関係からは、SD45=SD49→SD44=SD46=SD48=SD47と大きくは二つに分離することができる。SD45はSD48に切られるが、北端部が明らかではなく、SD48に重複する可能性が高い。南端でも同様のことと言えるが、それぞれ調査区外に延びるため断定はできない。SD49も、SD45から派生した溝状遺構と考えられるが、

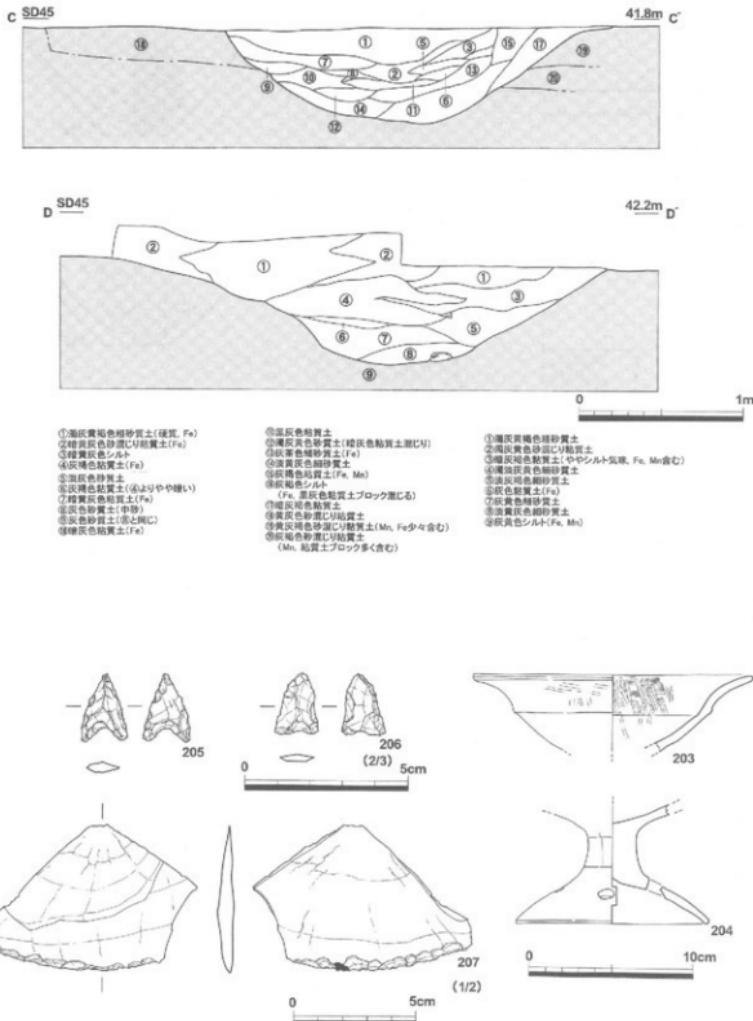


第52図 SD44~49平面図 (1/100)

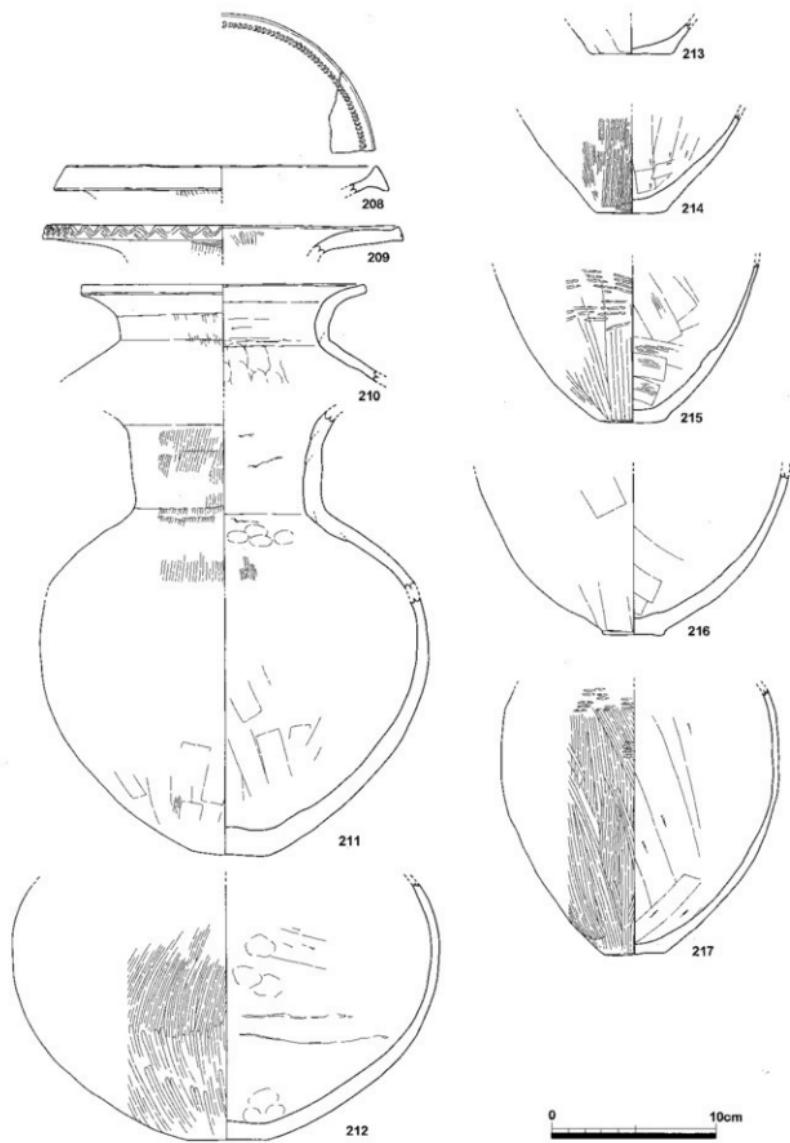


SD48と重複するため定かではない。SD46・47は、SD48から派生した溝状遺構で不整形な形からオーバーフローとも考えられたが、SD46のE断面に見るように逆台形状の断面を持つ明確な遺構である。機能面から考えると、SD46等すべてを溝状遺構として取り扱うには疑問もあるが、明確な答えが見出せないため、ここでは、溝状遺構として取り扱う。埋土の状況から見て、徐々に埋没していくことが考えられる。

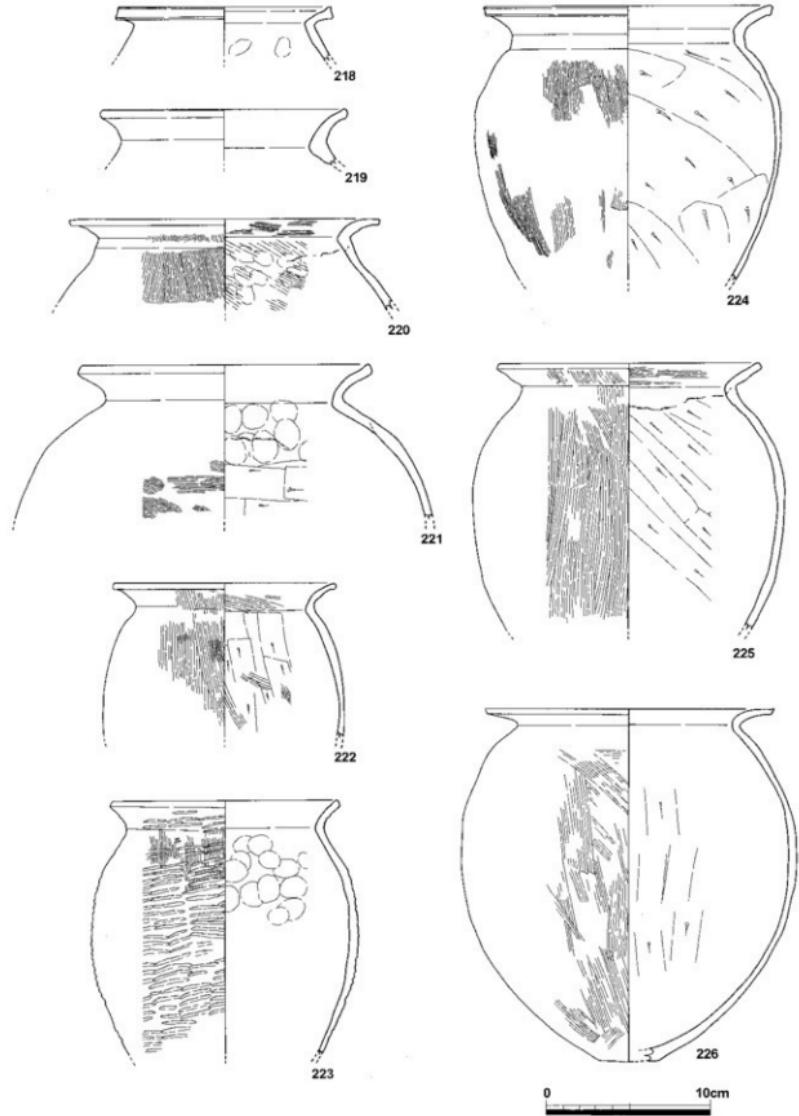
遺物は、SD45・48から出土している。203~241がSD45、242~253がSD48出土遺物である。203・204は高杯の杯部と脚部である。203は半球状の体部から大きく外反して端部を丸く終わらせる口縁部を有し、摩滅している体部外面を除いてヘラ磨きが行われている。204は中実の筒部から内湾気味に脚端部に至り、端部は丸く終わる。円孔が4孔見られる。内外面とも摩滅しており調整は不明である。V-5・6様式頃と想定される。205・206は石蠶である。共に凹基式と考えられる。207は横長剥片に刃部を加えたスクレイパーである。208~212は壺、213~226は甌、227~241は鉢である。208~211は広口壺の口縁部で、208は端部を上下に拡張し、内面屈曲部に半截竹管文を施している。外面に一部ハケ目が見られる。209は口縁端部に面を持ち、柳描波状文を施している。内面にヘラ磨き、外面にハケ目が部分的に観察できる。210は体部から短く頸部が立ち上がり屈曲して外上方にのびる口縁部を有する。頸部外面に一部ハケ目が認められるが、体部内面の指頭圧痕を除いてナデ調整が行われている。211は口縁部が欠損している。体部も肩部で接合していない。やや球形気味ではあるが肩部に最大径部を持つ資料で、肩部から頸部にかけてハケ目が断片的に観察できる。体部下部は、内外面とも板ナデ調整である。底部は平底を残すが、やや丸みを持ち、底部と体部の境は不明瞭になりつつある。212はやや横広の体部を持ち、底部は211同様である。体部外面は、下部がヘラ磨き、上部がハケ目調整である。内面は最大径部分に横方向のヘラ削りがある他は指ナデである。213~217の底部は、体部との境が明瞭で、おおよそ砲弾形の体部を持つ。外面はハケ目調整が多く、215・217にはタタキ目も観察される。内面はヘラ削りもしくは板ナデで調整されている。218~226は壺の口縁部で、226のみほぼ完形である。口縁部は「く」



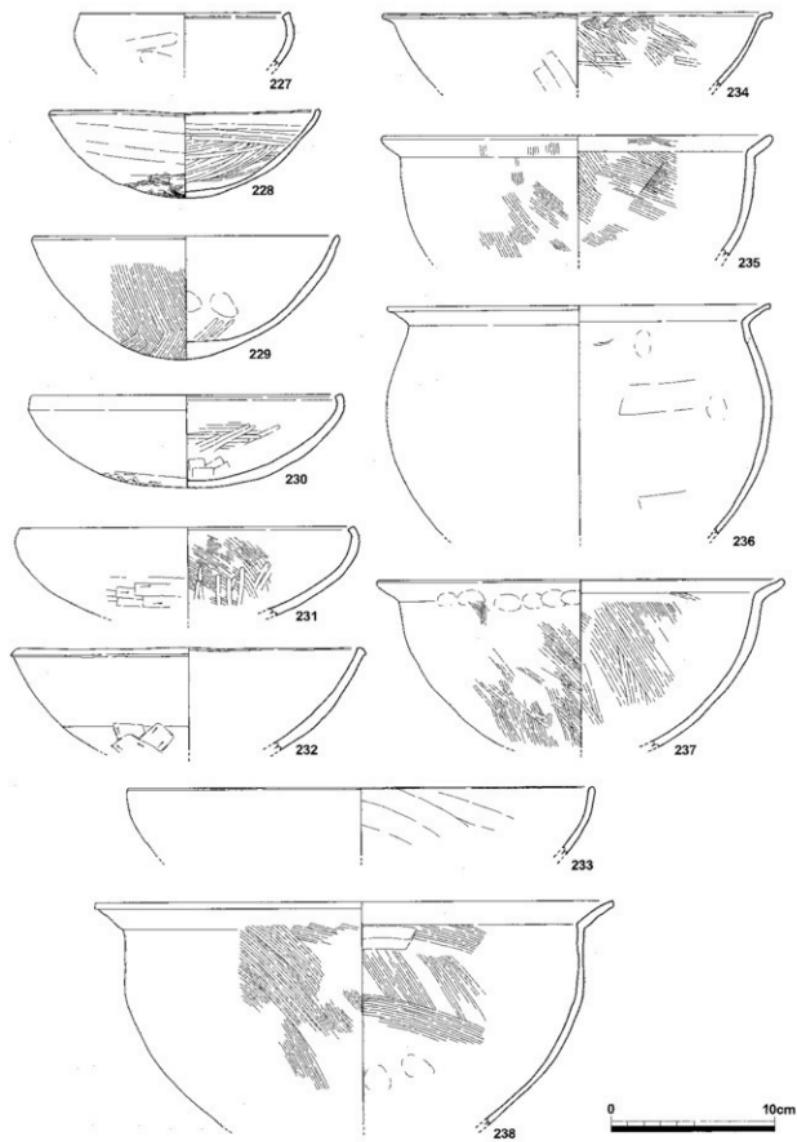
第54図 SD45断面図 (1/30)、出土遺物実測図① (1/3)



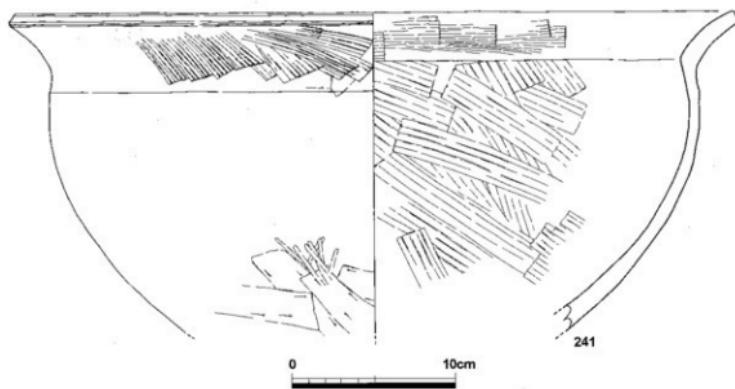
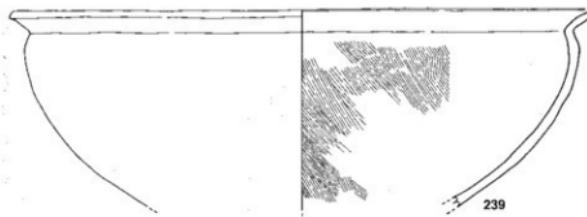
第55図 SD45出土遺物実測図② (1/3)



第56図 SD45出土遺物実測図③ (1/3)

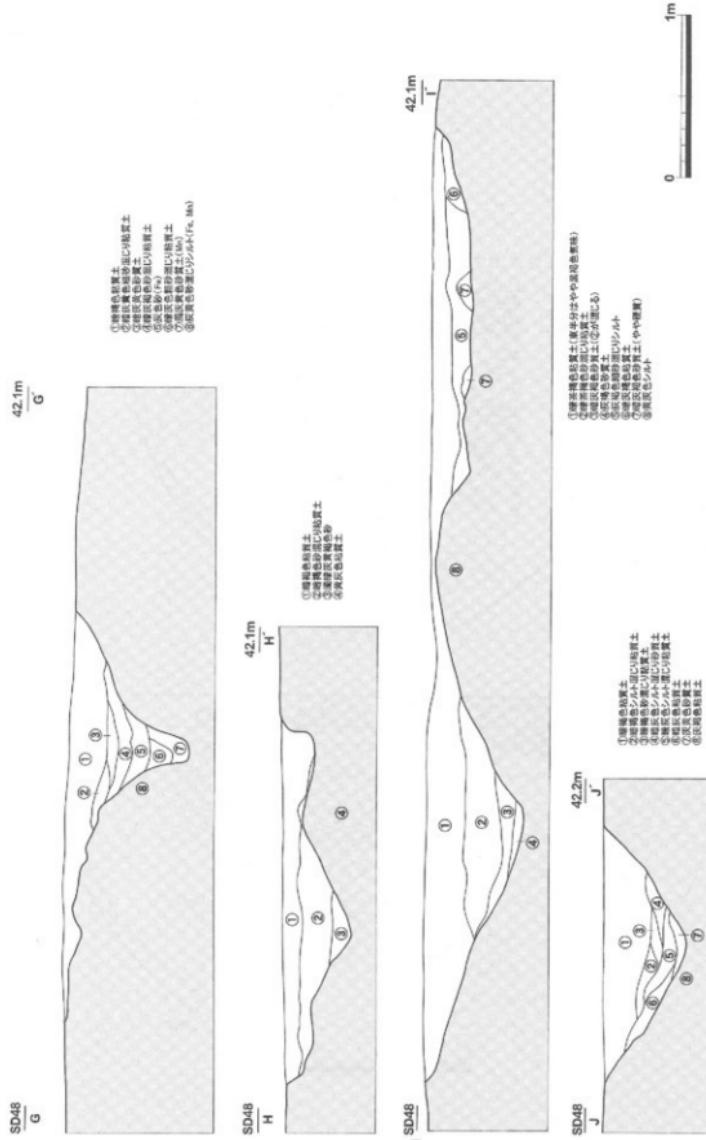


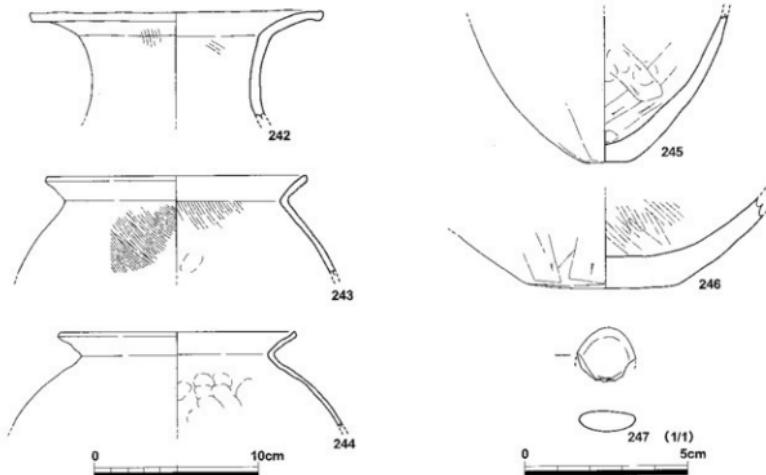
第57図 SD45出土遺物実測図④ (1/3)



第58図 SD45出土遺物実測図⑤ (1/3)

第59図 SD48断面図 (1/30)

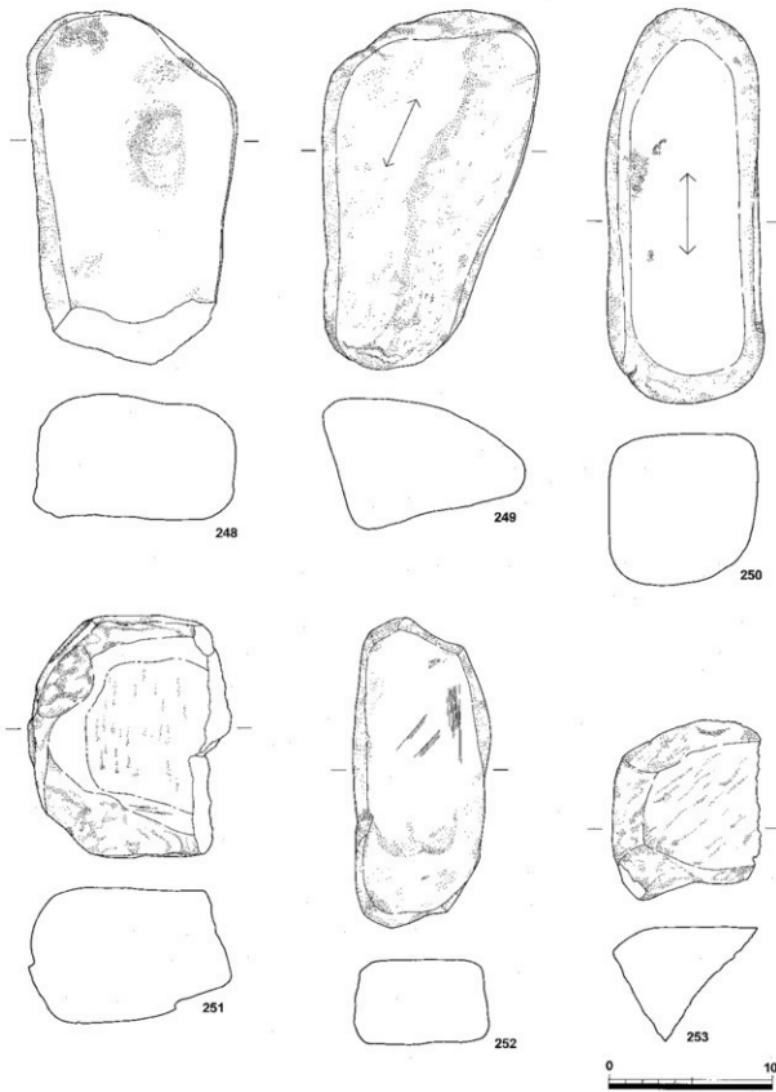




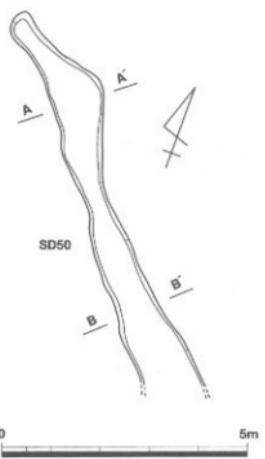
第60図 SD48出土遺物実測図① (1/3)

の字に外反するが、内面屈曲部が明瞭な218～223と、不明瞭な224～226に分けられる。また、体部も砲弾型ではあるが、細長いものや球形を呈するものなどバリエーションが多い。底部は226のみで、やや不明瞭な境をもつものの平底を有する。調整は、外面がハケ目（223はタタキ目が顕著である）、内面がヘラ削りのものが多い。鉢は、227・230・231のように口縁端部が内清するもの、228・229・232・233のように半球状を呈するもの、234～238のように屈曲して口縁部を形成するものがある。227は、内外面ともナデ調整である。228は丸底で、外面底部付近を指頭圧痕後ハケ調整、内面をヘラ磨きしている。229は丸底で、外面をハケ調整、内面をナデ調整している。内面底部分に、部分的なヘラ磨きが見られる。230も丸底で、外面底部付近はヘラ削り、内面はヘラ磨きである。231は底部付近をヘラ削り、内面をヘラ磨き後ハケ調整している。232は内外面とも摩滅しているが、底部付近にヘラ削りが見られる。233は内外面ともナデ調整である。外面は板ナデの痕跡が認められる。234は短く屈曲させて水平に口縁部を作るもので、内面をヘラ磨き、外面を板ナデ調整している。235は屈曲させて短く外上方にのびる口縁部を有し、内外面ともハケ調整を施している。236は深い体部を有し、235同様短く外上方にのびる口縁部を持つもので、内外面とも摩滅のため一部の痕跡を除き調整は不明である。237は235同様の器形をし、内外面ともハケ調整が見られる。238も同様の器形で、内外面ともハケ調整である。239も同様の器形で、外面を磨き、内面をハケ調整している。外面のミガキについてはヘラ等、道具を特定できない状態である。240はやや平底気味の底部を持ち、口縁部が外反する。口縁端部には面を持つ。底部内外面ともヘラ削りが見られ、外面上半はタタキ後ハケ調整、内面はハケ調整である。241は底部付近をヘラ削りしており、そのほかはハケ調整である。

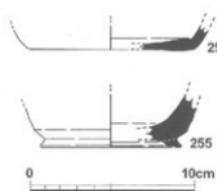
以上、SD45出土遺物について概観したが、壺・甕・鉢等の底部形状が、平底から丸底への過渡期にあたること、鉢の底部にヘラ削りが多用されていることなどからV-8様式に位置づけられる。



第61図 SD48出土遺物実測図② (1/3)



第62図 SD50平面図(1/100) 断面図(1/30)



第63図 SD53出土遺物実測図(1/3)

242は広口壺の口頭部で、部分的にハケ目が見られるが、全体的には摩滅しており調整は不明である。243・244は甕口縁部で、肩部より上が出土している。243は体部内外面にハケ調整、244は体部内面に指頭圧痕が見られる。245は甕底部で、やや小さいながらも平底を有し、内面にヘラ削りが見られる。246は鉢底部と考えられ、外面にヘラ削り、内面にハケ調整が見られる。247は石製で平たい円形を呈しており、基石の可能性がある。248~253は砂岩製の砥石と考えられる。

以上、SD48出土遺物について見たが、断片的な資料でしかなく、SD45以後の資料としてVI-1様式に位置づけても大過ないが、やや資料数に問題があり保留しておく。

出土遺物の状態と南側での普通寺市教育委員会調査の成果から、SD45・48が、弥生時代後期の山南遺跡のはば北端部に位置する遺構であると考えられる。

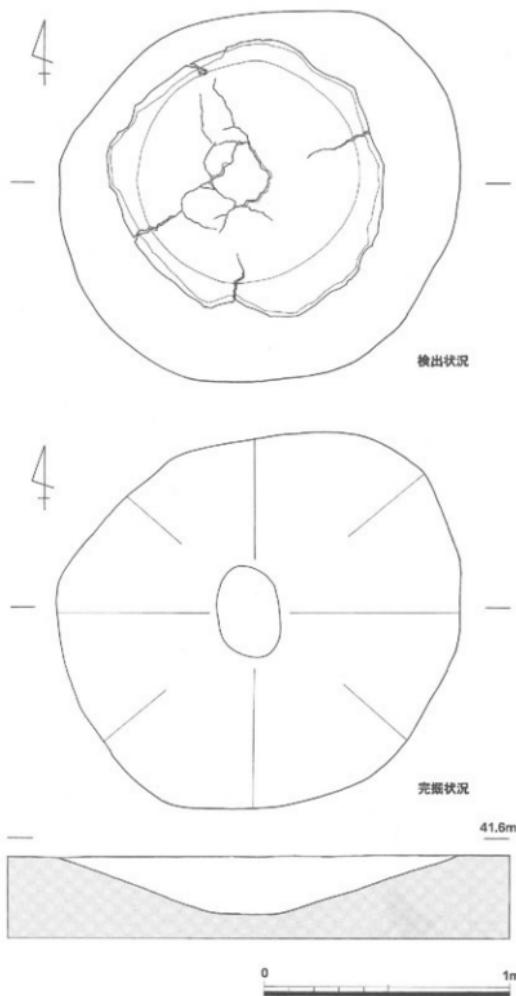
SD50(第62図)

C5・D6調査区で確認した。前述のSD44~49の南東部に位置し、北西から南東方向へ延びる溝状遺構である。断面は浅い皿状を呈しており、自然埋没と考えられる。全体図からは、SD49につながる可能性が考えられる。

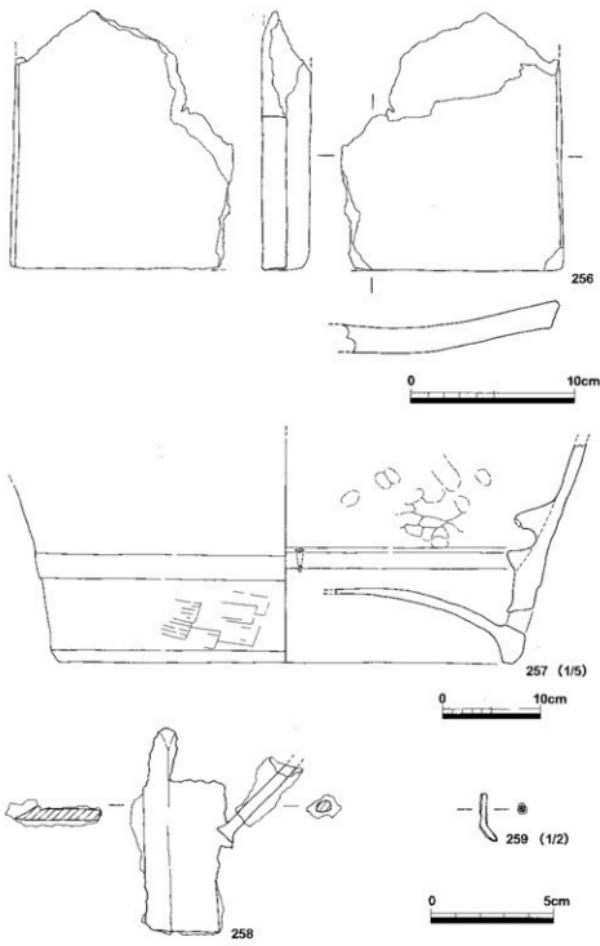
SD53(第63図)

出土遺物は254・255で、254は須恵器杯の底部、255は高台付壺の底部と考えられ、口縁部が欠損しており詳細は不明であるが、奈良時代の範疇で考えうる資料である。

5 土坑



第64図 SK01平・断面図 (1/20)



第65図 SK01出土遺物実測図 (1/3)

SK01 (第64・65図)

B2調査区で確認した円形の土坑で、257が据えられていた。断面は浅い皿状を呈する。出土遺物は256～259で、257の土製風呂のほか256瓦片、258・259の不明鉄器片が見られる。258はX線写真から見て鉄製鋲先に釘が接着している状態と考えられる。258は断面円形の釘先の可能性が高い。年代は特定できないが近代以降の可能性が高いと考えられる。

SK02 (第66・67図)

B 2 調査区で確認した円形の土坑で、263が据えられていた。断面は浅い皿状を呈する。出土遺物は260～263で、263の土製壺のほか262瓦片、260・261の不明鉄製品が見られる。年代はSK01同様、近代以後と考えられる。

SK03 (第68図)

B 2 調査区で確認した円形の土坑で、出土遺物はない。断面は逆台形で二層の埋土からなる。1層には、焼土ブロック等が混ざることから埋められたことが明らかである。土坑の性格は不明である。

SK04 (第68図)

B 2 調査区で確認した卵形の土坑で、断面は浅い皿状を呈する。ベースブロック等を含むことから、短時間での埋没が考えられる。土坑からは264が出土している。264は、東播系こね鉢の口縁部片と考えられ、II-⑦～⑨期、13世紀代に位置づけられる。

SK05 (第68図)

B 2 調査区で確認した不整形な土坑で、土坑内に掘り込みが3ヶ所確認できた。内、中央の掘り込みは、断面からも明らかなように柱穴の観を呈していることから、この土坑の性格は、3つの柱穴から柱材を抜き取りときの抜き取り穴の可能性も否定できない。いずれにしても、年代は出土遺物がないため不明である。

SK06 (第68図)

B 2 調査区で確認した不整形な土坑で、土坑底から265～267が出土している。土坑は、断面がいびつな逆台形で、埋土は3層からなる。自然埋没と考えられる。

265～267は土師器杯で、265はやや突出した底を持ち、266・267はやや不安定な底である。266は底面へラ切りが見られる。II-⑦～⑨期、13世紀中葉～後半代に位置づけられる。

SK07 (第69図)

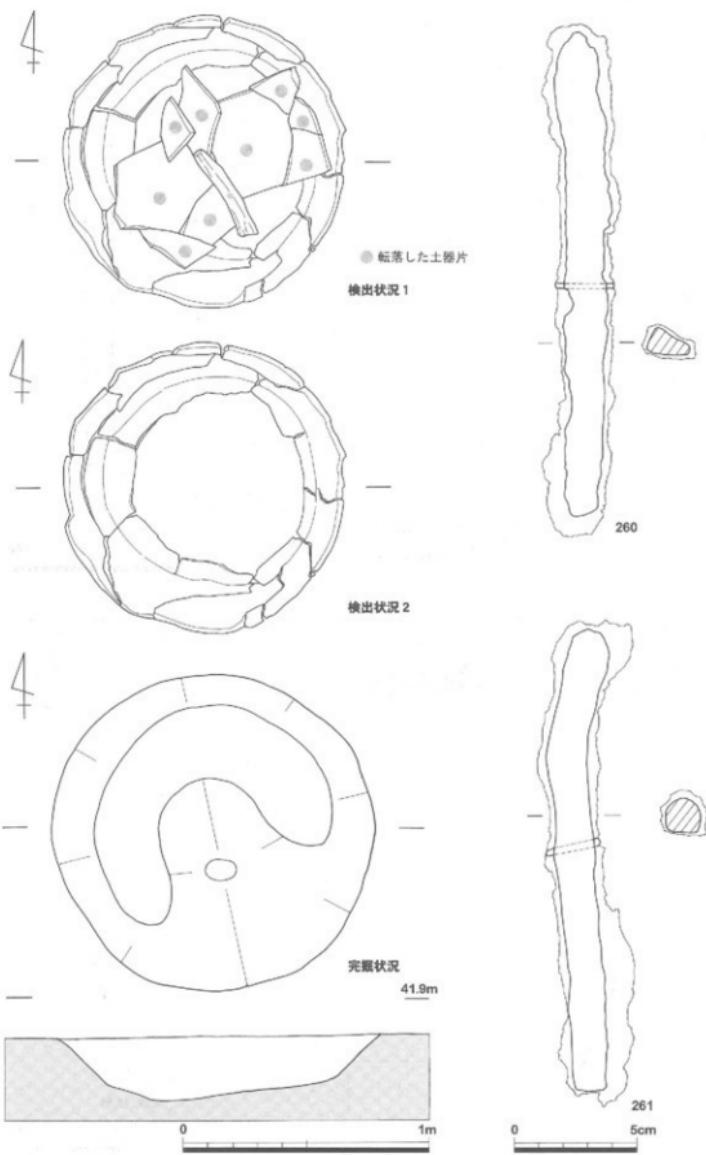
A 2 調査区で確認した不整形な土坑で、断面は四角形を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK08 (第69図)

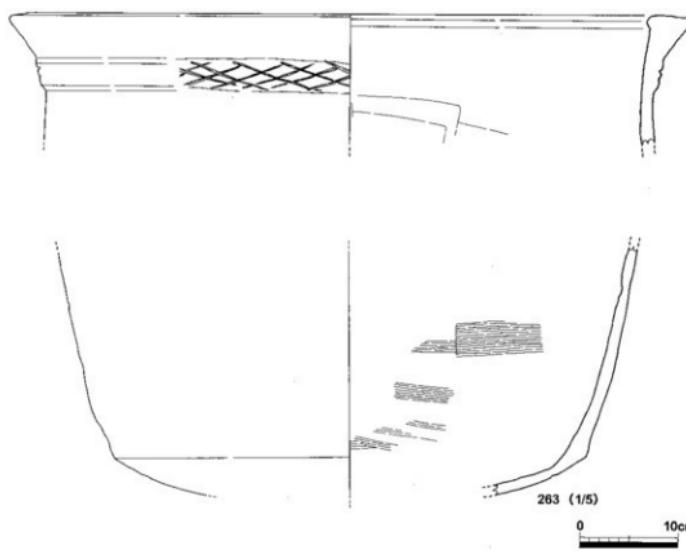
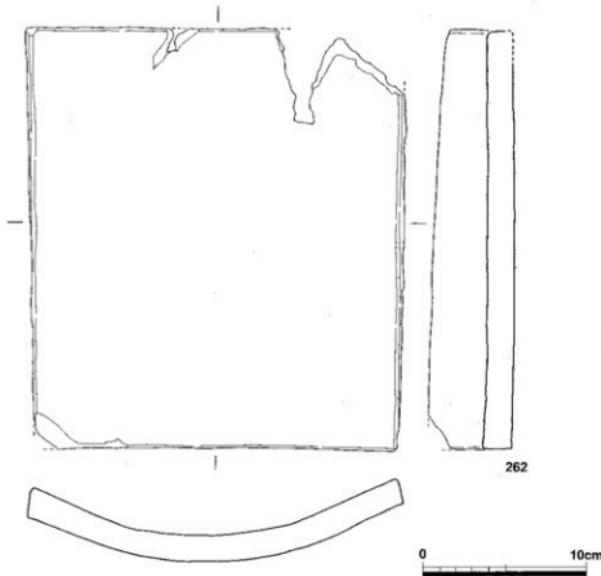
B 2 調査区で確認した不整形な土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK09 (第69図)

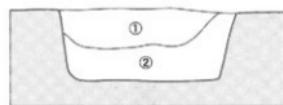
C 2 調査区で確認した隅丸方形の土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。



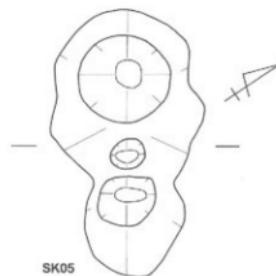
第66図 SK02平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図① (1/2)



第67図 SK02出土遺物実測図② (1/3)



①褐色色鉛漬じりシルト
(深褐色粘質土ブロック、暗褐色紗質土ブロック
土ブロック疊ぐる)

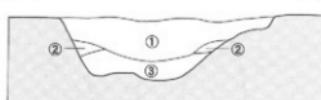
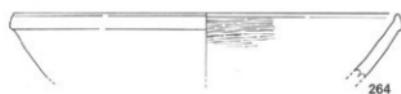


①灰色色鉛漬じり粘質土(Mn, Fe)
②黄褐色粘質土



①灰色色鉛漬じりシルト
(深褐色粘質土疊ぐる質土、ベースブロック疊ぐる)

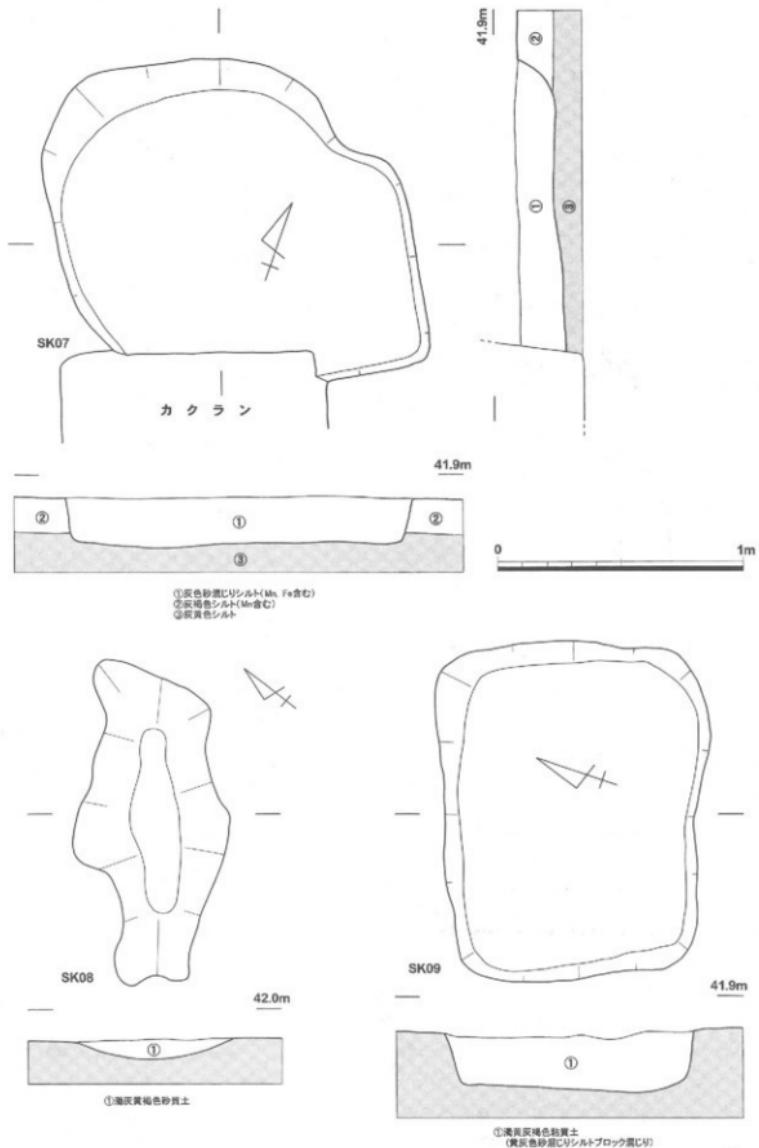
0 1m



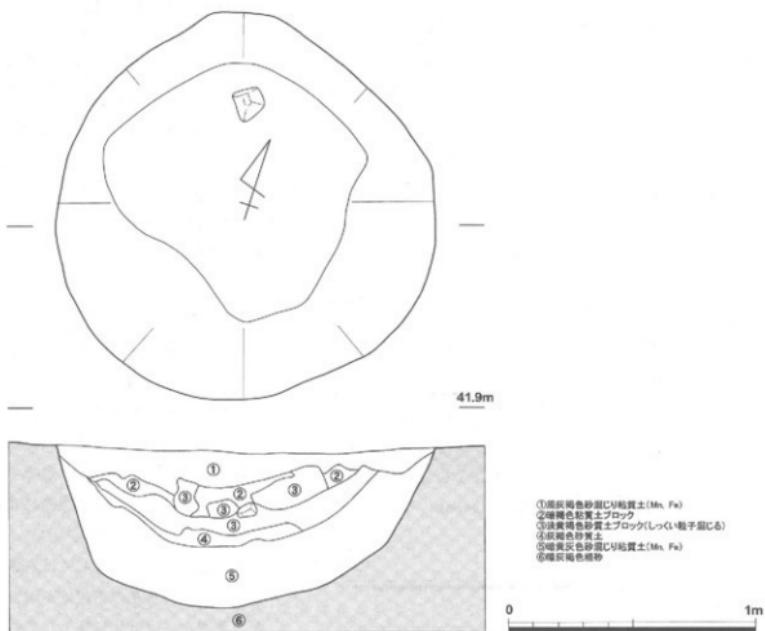
①褐色色鉛漬じりシルト(Mn, Fe)
②深褐色粘質土疊ぐるシルト
③褐色シルト



第68図 SK03～06平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/3)



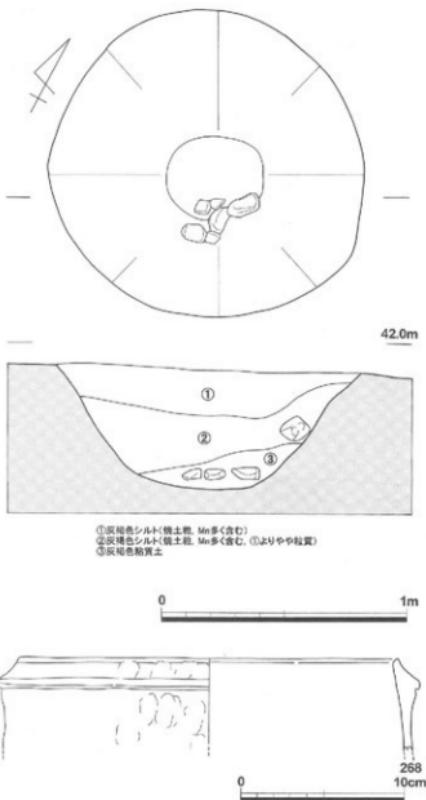
第69図 SK07～09平・断面図 (1/20)



第70図 SK10平・断面図 (1/20)

SK10 (第70図)

C 2 調査区で確認した円形の土坑で、断面はU字形を呈する。埋土は5層で、浅い皿状に堆積している。3層土は部分的にブロック状に混ざることから、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。



第71図 SK11平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/3)

SK14 (第73図)

B 3 調査区で確認した不整形な土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は2層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK15 (第73図)

A 3・B 3 調査区で確認した不整形な土坑で、断面は皿状を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK11 (第71図)

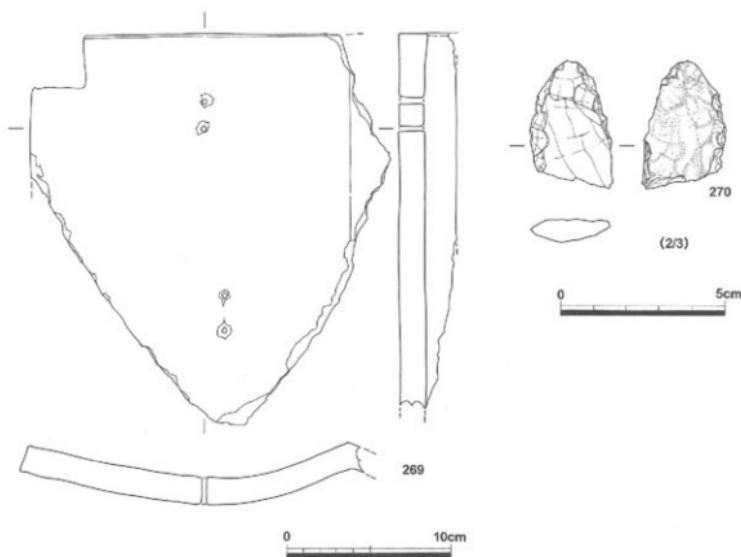
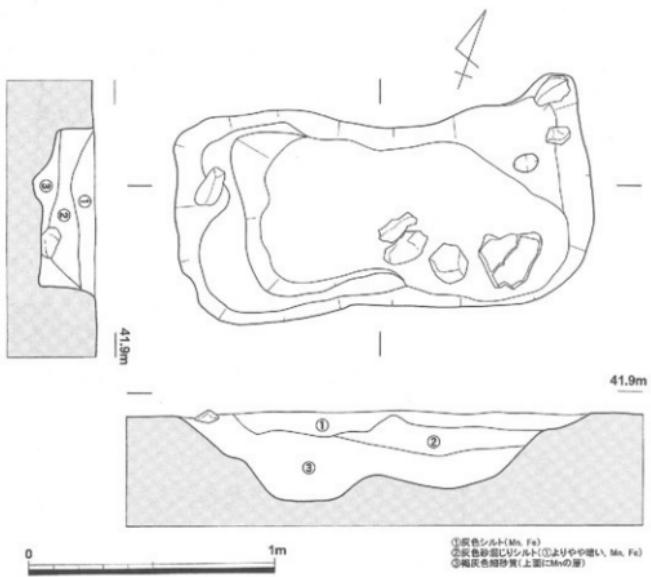
B 2・3 調査区で確認した円形の土坑で、断面は上部の広がるU字形を呈する。埋土は3層で、最下層には疊が多く見られた。堆積状況からは、埋められた可能性が高い。出土遺物は268土師質羽釜1点である。268は、直立する体部に、形骸化した鈎が付き、形態的にはⅢ-①～③期頃に位置づけられ、14世紀代と考えておく。

SK12 (第72図)

B 2 調査区で確認した隅丸方形の土坑で、断面は四角もしくはいびつな逆台形を呈する。埋土は3層で、埋められた可能性が高い。土坑内には人頭大の疊が多数確認されるが、意味するところは不明である。出土遺物は269・270の2点である。269は平瓦で、270は二次調整のある剥片もしくは石礫の可能性もある。平瓦の年代は不明であるが、形態からは近代以降としておく。

SK13 (第73図)

B 3 調査区で確認した方形の土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層で、焼土粒が含まれることから埋められた可能性が高い。出土遺物はない。



第72図 SK12平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/3)